

特別寄稿

平安時代初期物語文学におけるアジア叙述 ——『竹取物語』と『宇津保物語』を中心に——

頼 振南*

一、はじめに

周知のように、古代日本は遣隋使¹、遣唐使²、遣渤海使³、渤海使⁴を通じて中国大陸か

* 輔仁大学外国語学部日本語文学科教授兼学科主任

¹ 【遣隋使】日本大百科全書（ニッポニカ）（オンラインデータベース ジャパンナレッジ プラス JapanKnowledge+）<http://www.jkn21.com/koten/displaymain>

7世紀初頭、聖徳太子が摂政のとき、日本から隋（581～618）に派遣された公式の使節。600年に始まり614年まで前後6回に及ぶ。（中略）607年（推古天皇15、隋の大業3）の遣使には大礼（だいらい）小野妹子らが派遣され、このときは仏法を習得することを目的として沙門（しゃもん）数十人も同行した。（鈴木靖民）

² 【遣唐使】日本大百科全書（ニッポニカ）（オンラインデータベース ジャパンナレッジ プラス JapanKnowledge+）<http://www.jkn21.com/koten/displaymain>

7世紀から9世紀にかけて日本から唐（618～907）に派遣された公式の使節。630年（舒明天皇2）8月に犬上御田歙（いぬがみのみ たすき）（相）を派遣したのを最初とし、894年（寛平6）に菅原道真の建議によって停止されるまで、約20回の任命があり、うち16回は実際に渡海している。（中略）遣唐使の主目的は、唐の制度・文物を導入することにあった。これは、日本の古代国家を形成するうえで唐帝国の国制を模倣しようとしたためにほかならない。とくに文化面でも、同行した留学生、学問僧らによる先進文化の習得、書籍その他の文化的所産の将来に多大な成果をあげた。（鈴木靖民）

³ 【遣渤海使】日本大百科全書（ニッポニカ）（オンラインデータベース ジャパンナレッジ プラス JapanKnowledge+）<http://www.jkn21.com/koten/displaymain>

728年（神亀5）から811年（弘仁2）にかけて日本から渤海に13回にわたって派遣された公式の使節。日本と渤海（698～926）との交渉は727年の渤海使来日に始まり、翌年初めて遣使が行われた。渤海の来日の目的は、唐と対立し、唐・新羅から挟撃された形勢を打開することにあったが、日本も新羅を避けて渡唐する経路として渤海を利用するために派遣を開始した。やがて渤海と唐との関係が修復されると、日渤海外交の性格も政治的なものから経済・文化的なものへ変質し、日本は絹糸、織物、漆などをもたらし、渤海からは高級毛皮、ニンジン、蜂蜜などがもたらされた。渤海使の来日は、919年（延喜19）まで34回に及ぶ。（鈴木靖民）

⁴ 田中隆昭「渤海使と日本古代文学——『宇津保物語』と『源氏物語』」（田中隆昭 監修『アジア遊学 別冊 No2 渤海使日と日本古代文学』勉誠出版、2003・10）pp.10-12

奈良朝には遣唐使・渤海使ともに往来が盛んで、唐の文物文化が両方のルートを通して日本に入ってきたのであるが、平安朝になると遣唐使は桓武朝と仁明朝に一回ずつ派遣されたのみで、渤海使節の来朝がその欠けた部分のいくらかを補ったことを示している。（中略）

八三八年（仁明天皇・承和5）遣唐使が派遣され、これが最後の派遣使となった。『宇津保物語』は遣唐使が中国へ出かけて行き、渤海国から使節がやってきた時代のことが語られる物語である。遣唐使・渤海使が連動して日本の文人たちに大きな文化的刺激を与えていたことを示している。最後の遣唐使以後、なお大陸文化への貴重な窓口が渤海使であった。

ら大量の文化を受容した。『古事記』や『日本書紀』によれば、朝鮮半島の百済からも漢字・儒教⁵・仏教・医・易・暦などの文化が伝来し、五経博士⁶、易・暦・医博士も渡来している。その中で、奈良時代から平安時代にかけて遣唐使によってもたらされた唐の影響は深長である。古瀬奈津子は『遣唐使の見た中国』において次のように述べている。

日本とアジア、世界との関係の中で、日本史を考えていく必要がある。(略) その古代の日本と中国との橋渡し役として重要な役割を果たしたのが、遣唐使である。(略) 遣唐使は大きく見ると、前期と後期の二期に分けられる。前期と後期の遣唐使では、その目的、組織、航路が大きく異なっていた。前期は第一回から七回までである。この時期は朝鮮半島の動乱期であり、唐と結んだ新羅と、日本と結んだ百済とが覇権を争っていた。そのような対立を背景に、この時期の遣唐使には政治折衝的な性格が強い。しかし、天智二年(六六三)白村江の戦により、唐・新羅連合軍に攻められた百済救援のため、日本は朝鮮半島に兵を進めるが、完敗する。その結果、日本は朝鮮半島から撤退し、その後しばらく遣唐使は派遣されなくなってしまう。(略) 後期の遣唐使が派遣されたのは、朝鮮半島の動乱なども治まり、唐を中心に東アジア世界が安定した時期にあたっていた。日本からの遣唐使は、唐の皇帝へ朝貢品を献上し、唐を中心とした東アジア世界の中に位置付けられることを目的としていたが、前期の政治折衝という性急な目的がなくなり、法典や文化・文物の輸入といった側面の比重が高くなっていった。⁷

平安時代(794-1185/1192)に至ると、唐の影響はすでに平安朝廷に深く浸透していた。桓武天皇は中国皇帝にならい郊天祭祀を行うなど、中国志向が強かったと考えられている。従来の日本には見られない中国仏教が第16次遣唐使留学僧として長安に

⁵ 『古事記』新編 日本古典文学全集(オンラインデータベース ジャパンナレッジ プラス JapanKnowledge+) <http://www.jkn21.com/koten/displaymain#top>

和邇吉師。即論語十卷・千字文一卷、并十一卷、付是人即貢進。(和邇吉師。即ち論語十卷・千字文一卷、并せて十一卷を、是の人に付けて即ち貢進りき(此の和邇吉師は、文首等が祖ぞ。)) p.268

⁶ 『日本書紀』新編 日本古典文学全集(オンラインデータベース ジャパンナレッジ プラス JapanKnowledge+) <http://www.jkn21.com/koten/displaymain#top>

百済本記云、委意斯移麻岐弥。貢五経博士段楊爾。(百済本記に云はく、「委の意斯移麻岐弥」といふ。五経博士段楊爾を貢る。) pp.300-301

⁷ 古瀬奈津子『遣唐使の見た中国』(吉川弘文館、2003・5) p.1-8

入った最澄（天台宗）、空海（真言宗）によって伝来され、以降の日本仏教の方向性を大きく規定づけることとなった。嵯峨天皇（786－842）から清和天皇（850－881）にかけての時期は、凌雲集⁸などの漢文詩集が編纂されたり、唐風の書がはやるなど、唐風文化が花開いた。さらに言えば、日本は、弥生時代⁹から平安時代まで、中国（漢・隋・唐）、朝鮮や渤海国、そして遠くの天竺（インド）、波斯国¹⁰（ペルシャ、現イラン）までの外国文化を積極的に学び、模倣しなかったとすれば、894年に遣唐使を廃止して以降の独自の国風文化を發展させる堅固な基盤は形成できなかった筈である。遣唐使の廃止で外国の文化が入ってこなくなった日本は、外国文化を保存、改良したり、日本独自の文字（かな文字）を發明したりして、高度な平安王朝文明を作り上げた。特にその「かな文字」を使って多くの女流文学作品を残したのである。

日本と外国の交流は、正式な使節団を派遣するほか、貿易船を通じてさまざまな文物を交易することであったと思われる。日本平安時代初期の物語文学『竹取物語』における「火鼠の皮衣」難題譚に出てくる「唐人船」はその一例である。古代日本に伝来した外来文化が中国文化を中心に受容されていることに疑いはない。が、それと同時に中国周辺の文化も一緒に受容されていると考えられる。要するに、インド文明と中国漢字圏文化に包括されるアジアの文化痕跡を、古代日本で確認することができる

⁸ 【凌雲集】 デジタル大辞泉（オンラインデータベース ジャパンナレッジ プラス JapanKnowledge+）<http://www.jkn21.com>

平安初期の日本最初の勅撰漢詩集。1巻。嵯峨天皇の命により、小野岑守・菅原清公らが撰。弘仁5年（814）成立。延暦元年（782）から弘仁5年までの作者24人の詩91首を収める。

⁹ 【弥生時代】 国史大辞典（オンラインデータベース ジャパンナレッジ プラス JapanKnowledge+）<http://www.jkn21.com>

弥生時代の始まりは紀元前三世紀、終末は紀元後三世から四世紀にかけてのころとされている。弥生時代は、水稻農耕の発達によって社会の階層が分化し、小さな多くの政治的単位が出現し、やがてそれらが統一へと向かう胎動期ともいうべき時代であるが、その社会状況は中国の『魏志』倭人伝、『後漢書』倭伝からある程度読みとることができる。それによれば、邪馬台国に服属する対馬国（対馬）・一大国（壱岐）・末盧国（松浦）などをはじめとする多くの国があったとされているが、これは弥生時代後期の状況である。また弥生時代は金属器時代であるが、中国がすでに青銅器時代から鉄器時代に入ってから日本に金属器が波及してきたため、日本は青銅器時代から鉄器時代へとという過程は踏んでいない。石器は弥生時代の中で消えていくが、鉄器にとって代わられたものと考えられている。

¹⁰ 【波斯国】 日本国語大辞典（オンラインデータベース ジャパンナレッジ プラス JapanKnowledge+）<http://www.jkn21.com>

はしーこく 【波斯国】 ペルシア。イランの旧称。また、宇津保物語の主人公の一人である清原俊蔭が遣唐使として出航した際、嵐にあって漂着したという南洋諸島の一国をもいう。→波斯。

* 宇津保〔970～999頃〕俊蔭「俊蔭が舟は、波斯国にはなたれぬ」

のである。紙幅の関係で、本論では、学問的素養と知的好奇心に恵まれた男性作家によって創作された平安時代初期の物語文学に視点を置き、物語文学において「アジア」は如何に叙述されているかを考察してみたい。特に『竹取物語』における五つの難題譚と『宇津保物語』における秘琴伝説を取り上げて検討する。

二、平安時代初期までに形成された世界観

繰り返しになるが、古瀬奈津子が述べた「日本からの遣唐使は、唐の皇帝へ朝貢品を献上し、唐を中心とした東アジア世界の中に位置付けられることを目的としていた」という一節は、古代日本にとって、海外と直接交流する範囲が東アジアにある中国、朝鮮と渤海国¹¹に限られていたことを示している。『日本書紀』に記載される仏教伝来の記述によれば、南アジアに位置する天竺（インド）の仏法¹²が中国大陸、朝鮮半島を経由して日本に入ってきたが、まだインドとは直接接触、交流はしていない。また、

¹¹ 【渤海（国）】日本大百科全書（ニッポニカ）（オンラインデータベース ジャパンナレッジ プラス JapanKnowledge+）<http://www.jkn21.com/koten/displaymain>

高句麗（こうくり）が唐に滅ぼされた（668）あと、現在の中国東北地方、ロシア連邦の沿海州（現沿海地方）、北朝鮮の北部にまたがる広い範囲を領有して栄えた満州ツングース系の民族国家（698～926）。渤海が高句麗の復興を目ざしたものであることは、自他ともに認めていた。唐からの独立戦争および建国後の中心的役割を果たしたのは靺鞨（まっかつ）人と高句麗人である。初代国王は大祚榮（だいそえい）（在位 698～719）。以下最後の第15代の大諲譔（だいいんせん）（在位 907～926）まで大氏の王統が続く。大祚榮は初め震（しん）（振）国王と号したが、唐との関係が改善され、唐から渤海郡王に封ぜられるに及んで（713）、この渤海が国号となった。（中略）

渤海文化は、その基層には高句麗の文化があるが、やはり唐の強い影響を被っている。もちろん文化とよべるものは都市を中心に発達した貴族の文化であって、彼らは儒教思想を取り入れ、漢字を習い、官庁用語も文学もすべて漢文であった。この点も当時の新羅や日本とよく似ており、同様な理由から、おそらく渤海の仏教も貴族仏教あるいは国家仏教と位置づけてよかろう。壮麗な大伽藍（がらん）や石灯笼（どうろう）のみごとは、仏教が民衆管理という政治的意図のもとに手厚い保護を受けたことをうかがわせる。

9世紀前半の第10代大仁秀（在位 818～830）のときに国土は最大となり、渤海は唐から「海東の盛国」とうたわれるほどの繁栄をみせたが、以後しだいに内部崩壊し、第15代の大諲譔（だいいんせん）の926年に契丹の攻撃を受けて滅亡。そして渤海の制度・文物や人的資源は契丹に受け継がれていくことになる。（森安孝夫）

¹² 『日本書紀』新編 日本古典文学全集（オンラインデータベース ジャパンナレッジ プラス JapanKnowledge+）<http://www.jkn21.com/koten/displaymain#top>

此妙法宝亦復然。祈願依情、無所乏。且夫遠自天竺、爰泊三韓、依教奉持、無不尊敬。（此の妙法の宝も亦復然なり。祈願すること情の依にして、乏しき所無し。且夫れ、遠くは天竺より、爰に三韓に泊るまでに、教に依ひ奉け持ちて、尊び敬はずといふこと無し。）p.416-417

同じジャパンナレッジ プラス (JapanKnowledge+) オンラインデータベース¹³を利用して新編 日本古典文学全集の『古事記』と『日本書紀』を検索した結果、古代日本の主な交流国は大唐国 (中国・唐)、呉国 (中国江南の地) と朝鮮半島 (韓国: 広く朝鮮半島をさす) の新羅国 = 新良国、百済国、高麗国 (= 貊国)、任那国、卓淳国、伴跋国、安羅国などの国であることが判明した。そのほかに、『日本書紀』をはじめとする日本の史料には日本の東北地方以北の住人として、肅慎¹⁴の名も散見される。また『続日本紀』に出てくる崑崙国¹⁵、大食国¹⁶ (アラビア)、吐蕃¹⁷ (チベット)、波斯¹⁸ (ペルシャ) などの国名も出てくる。大食国の注によると、この年の唐朝の正月の拝賀式に

¹³ <http://www.jkn21.com>

¹⁴ 【肅慎みしはせ】 国史大辞典 (オンラインデータベース ジャパンナレッジ プラス JapanKnowledge+) <http://www.jkn21.com>

『日本書紀』欽明天皇五年十二月条の佐渡に到来した記事であるが、齊明天皇六年 (六六〇) 三月条には、蝦夷地に入った阿倍比羅夫の軍に、肅慎の攻撃を受けた渡島の蝦夷が救援を求め、比羅夫が肅慎を討ったという記事がみえる。これによれば肅慎は渡島の蝦夷とは異なる民族の名称として用いられている。これらの記事にみえる肅慎について、中国大陸から樺太・北海道方面に渡来したツングース系民族とみる説、朝廷に服属しない蝦夷に対して用いられた中国風の雅名とする説、その他諸説ある。(石井正敏)

¹⁵ 東南アジア地域に当たる今のベトナム中部沿海地方である。

青木和夫 (他) 校注『続日本紀二』(新日本古典文学大系 13, 岩波書店, 1990・9)

〈聖武天皇 天平十一年 (七三九) 十一月辛卯〉○十一月辛卯, 平郡朝臣広成等拜朝。初広成。天平五年, 随大使多治比真人広成入唐。六年十月, 事畢却帰。四船同発, 從蘇州入海。悪風忽起, 彼此相失。広成之船一百一十五人, 漂着崑崙国。有賊兵来围, 遂被拘執。船人, 或被殺, 或迸散。自餘九十餘人, 着瘴死亡。広成等四人, 僅免死, 得見崑崙王。仍給升粮, 安置悪処。至七年, 有唐国欽州熟崑崙到彼。便被偷載出来, 既帰唐国。逢本朝学生阿倍中満。便奏, 将入朝, 請取渤海路帰朝。天子許之, 給船粮發遣。十年三月, 從登州入海。五月, 到渤海界。適遇其王大欽茂差使欲聘我朝。即時同発。及渡渤海, 渤海一船, 遇浪傾覆。大使胥要德等卅人没死。広成等, 率遣衆到着出羽国。(p.356)

¹⁶ 青木和夫 (他) 校注『続日本紀三』(新日本古典文学大系 14, 岩波書店, 1992・11)

〈孝謙天皇 天平勝宝六年 (七五四) 正月〉○丙寅, 副使大伴宿禰古麻呂, 自唐国至。古磨奏曰, 大唐天宝十二載, 歲在癸巳正月朔癸卯, 百官・諸蕃朝賀。天子於蓬萊宮含元殿受朝。是日, 以我, 次西畔第二吐蕃下, 以新羅使, 次東畔第一大食国上。古磨論曰, 自古至今, 新羅之朝貢大日本国久矣。而今, 列東畔上, 我反在其下。義不合得。時將軍吳懷実見知古磨不肯色, 即引新羅使, 次西畔第二吐蕃下, 以日本使, 次東畔第一大食上。(pp.138-140)

¹⁷ 前注に同じ。

¹⁸ 青木和夫 (他) 校注『続日本紀二』(新日本古典文学大系 13, 岩波書店, 1990・9)

〈聖武天皇 天平八年 (七三六)〉○八月庚午, 入唐副使從五位上中臣朝臣名代等, 率唐人三人, 波斯一人拜朝。(p.302)

〈聖武天皇 天平八年 (七三六)〉○十一月戊寅, 天皇臨朝。詔, 授入唐副使從五位上中臣朝臣名代從四位下。故判官正六位上田口朝臣養年富・紀朝臣馬主並贈從五位下。准判官從七位下大伴宿禰首名・唐人皇甫東朝・波斯人李密翳等, 授位有差。(p.304)

おける玄宗皇帝との謁見式の場面で席順争いが引き起こされた。すなわち諸外国の使節が列席する席次は首位が大食（アラビア）、次席が吐蕃（チベット）、つづいて新羅（韓国）そして第四番目が日本という序列になっていた。これを見た大伴古麻呂おおもものこまろは色をなして憤激し、「新羅はずっと昔から大日本国へ朝貢している国である。どうして新羅の下位に立つ筋があるのか」と抗議した。そこで日本の使節は改めて新羅の上席にランクされたというのである。この史実から推考すると、当時日本からの遣唐使節は唐の長安（現西安）の宮廷で東アジアの韓国、西アジアのアラビア、中央アジアのチベットなどの諸国の使臣と互いに顔を合わせていたものと見られる。「遣唐使が派遣された回数は異説はあるが、全部で二十回とされている。平均すると一六年に一回のペースで派遣されている」¹⁹ 日本の使節が中国で外交儀礼の場を通して唐以外の国々の使節と交流していたことが分かる。そしてそれらの国々は地理的位置から見れば、皆広範囲のアジアに属している。無論、西南アジア文化圏と、それとはまったく異質の中国文化圏とを結んだシルク・ロード²⁰も考慮に入れば、唐と諸外国との交流によって中央アジア、南アジア、西アジアから輸入された文化と文物も大唐文化に融合しているはずである。したがって、仏法や法典、新しい文化、技術を学ぶ留学生、留学僧、技術者を多く含んでいた日本の遣唐使節団がもたらしたものは、唐を中心とした東アジア世界の文明だけではなく、広範囲のアジア全体の文化の精華であろう。したがって、日本平安時代初期までに形成された世界観は、唐帝国という大きな望遠鏡を通してみるアジアの「〔1〕中国を中心とした東アジア農耕文化圏、〔2〕インドを中心とする南アジア農耕文化圏、〔3〕北アジア遊牧文化圏、〔4〕イラン（ペルシア）やイスラ

¹⁹ 古瀬奈津子『遣唐使の見た中国』（吉川弘文館、2003・5）p.3

²⁰ 【シルク・ロード】日本大百科全書（ニッポニカ）（オンラインデータベース ジャパンナレッジプラス JapanKnowledge+）<http://www.jkn21.com/body/display/#idx040000>
シルク・ロードの役割

まず第一に、東西を結ぶ貿易路としての役割があげられる。中国からは特産の絹が、西からは、玉や宝石、ガラス製品などが、この道を経由して運ばれていった。また、獅子（しし）や葡萄（ぶどう）・石榴（ざくろ）・胡桃（くるみ）・胡豆（えんどう）・胡麻（ごま）・胡瓜（きゅうり）・苜蓿（うまごやし）・紅藍（べにばな）などの植物類、琵琶（びわ）・箜篌（くご）などの楽器、音楽や舞踊、奇術や曲芸をはじめ、中央アジア・西アジアの産物や風俗が中国にもたらされた。さらに、インドの仏教、イランのゾロアスター教（けん教）やマニ教、ローマで異端とされたネストリウス派のキリスト教（景教）、イスラム教（回教）などの宗教も到来した。一方、中国からは、たとえば、鑄鉄技術や養蚕、製紙法や画法が西方へと伝わっていった。シルク・ロードは、商業路としてだけではなく、東西文化の伝達路としても大きな意義をもっていたのである。（堀川徹）

ムの文化が支配的だった西アジア・オアシス文化圏²¹を含む世界である。特に平安時代末期に成立した『今昔物語集』が、天竺（インド）、震旦（中国）、本朝（日本）の三部構成になっていることから分かるように、平安時代の日本人にとって、日本列島と朝鮮半島も含めた中国大陆と西域インドの三地域は、すでに全世界を意味している。要するに、古代日本文化におけるアジア叙述は、広くアジア全体を含む全世界を語ることだと言えるし、逆に言えば遣唐使がもたらした文物はアジア全体を叙述しているとも言えよう。

三、平安時代初期物語文学における調和的なアジア叙述

日本の宮内庁の正倉院に保存されている宝物が、遣唐使がもたらした文物の内実を物語っている。便宜上、正倉院のウェブサイトの紹介を次のように引用しておく²²。

宝庫に伝えられている宝物の点数は、整理済みのものだけでも約九千点という膨大な量に上っており、またその種類も豊富です。試みに用途別に分類すると、書巻文書、文房具、調度品、楽器楽具、遊戯具、仏教関係品、年中行事用具、武器武具、飲食器、服飾品、工匠具、香薬類など生活の全般にわたっており、奈良時代の文化の全貌を眼のあたりに知ることができます。製作技法について見ても、金工、木工、漆工、甲角細工、陶芸、ガラス、染織など美術工芸のほとんどすべての分野におよび、平脱、木画、螺鈿、撥鏤、三彩、七宝といった高度の技法を用いたものが多く、使用材料の種類も豊富です。（中略）

²¹ 【アジア】「Yahoo! 百科事典」<http://100.yahoo.co.jp/>（「Yahoo! 百科事典」<http://100.yahoo.co.jp/>は、小学館提供の日本大百科全書（ニッポニカ）を無料で検索・参照可能なサービスである。）

アジアは北アジア、中央アジア、東アジア、東南アジア、南アジア、西アジアの6地域に分類されるのが普通であるが、これらの地域は地形、気候など風土的条件が非常に異なり、多種多様である。松田壽男（ひさお）によれば、アジアは〔1〕亜湿潤アジア（または寒冷アジア。森林地帯＝北アジア）、〔2〕乾燥アジア（または砂漠アジア。砂漠地帯＝中央アジアおよび西アジア）、〔3〕湿潤アジア（またはモンスーン・アジア。モンスーン地帯＝東アジア、東南アジア、南アジア）の三つの風土帯に分けられる。そして、これらの風土的条件に規制されて、亜湿潤アジアには狩猟生活型が、乾燥アジアには遊牧生活型とオアシス生活型が、また湿潤アジアには農耕生活型および海洋生活型（沿海部と島嶼（とうしょ）部）が、それぞれ歴史の基盤となったとされている。こうして、松田は人文、地文の両条件を踏まえ、アジアを次の四大文化圏に分けて考察する。すなわち、〔1〕中国を中心とした東アジア農耕文化圏、〔2〕インドを中心とする南アジア農耕文化圏、〔3〕北アジア遊牧文化圏、〔4〕イラン（ペルシア）やイスラムの文化が支配的だった西アジア・オアシス文化圏である。（岡倉古志郎）

²² 宮内庁・正倉院「宝物について」<http://shosoin.kunaicho.go.jp/>

正倉院の宝物は、国際色豊かな中国盛唐の文化を母胎とするもので、大陸から舶来した品々はもとより、国産のものもまた、その材料、技法、器形、意匠、文様などに、8世紀の主要文化圏、すなわち中国をはじめ、インド、イランからギリシャ、ローマ、そしてエジプトにもおよぶ各地の諸要素が包含されています。なかでも注目されるのは、西方的色彩の濃厚なことです、西方の要素は盛唐の文物に取り入れられ、やがて我が国に伝来して、正倉院にとどまっているのです。「正倉院はシルクロードの終着点である」という言葉は、この宝物のもつ世界性の一端を言いあらわしたものとといえるでしょう。正倉院宝物は、単に奈良朝文化の精華を示すだけでなく、実に8世紀の世界文化を代表する貴重な古文化財なのです。(傍線は筆者)

さらに、平安初期に成立した『宇津保物語』²³「蔵開 上」巻の次のような記述からは、遣唐使がもたらした文物の豊かさと重要度が伺える。

(前略) 内に、今一重校して鎖あり。その戸には、文殿と印さしたり。さればよと思して、また鎖開けたまへば、ただ開きに開きぬ。見たまへば、書どもうるはしき帙篋どもに包みて、唐組の紐して結ひつつ、ふさに積みつつあり。その中に、沈の長櫃の唐櫃十ばかり重ね置きたり。奥の方に、よきほどの柱ばかりにて、赤く丸きもの積み置きたり。ただ口もとに目録を書きたる書を取りたまひて、ありつるやうに鎖鎖して、多くの殿の人さして、帰りたまひぬ。

三条におはして、北の方に、ありつるやう申したまひて、この書の目録を見たまへば、いとみじくありがたき宝物多かり。書どもはさらにもいはず、唐土にだに人の見知らざりける、みな書きわたしたり。薬師書、陰陽師書、人相する書、孕み子生む人のこといひたる、いとかしこくて多かり。(略) 蔵の唐櫃一つに香あり、といへるを取り出でさせたまひて、母北の方にも一の宮にも奉りたまへば、この御族の香どもは、世の常ならずなむ。書どもも、要あるは取り出でて見たまふ。(p.329～331)

以上の歴史背景を概観すると、遣隋使によって中国大陸から文化的に大きな影響を

²³ 本文の引用は、中野幸一 校注・訳『うつは物語①②③』（新編日本古典文学全集 14・15・16、小学館、1999・6/2001・5/2002・8）を使用する。引用箇所後ろにページ数を示しておく。下線は筆者。

受けており、これは遣唐使に引き継がれた。中国大陸から朝鮮半島を経由して漢字が輸入され、漢文と、自分達の話し言葉に漢字を当てはめた万葉仮名が生まれた。日本文学におけるアジア叙述に絞って言うならば、奈良時代の上代文学に出てくるのは『古事記』や『日本書紀』のような日朝交流、日中交流の史的記述が中心である。唐代の漢詩や漢文などの影響を受けた『万葉集』は、ようやく生まれた万葉仮名とよばれる独特の表記法を用い、日本人による日本人のための、文字で編まれた最初の、少なくとも日本に現存する最古の和歌集である。言うまでもなく、751年頃成立した日本最古の漢詩集『懐風藻』の作風は中国大陸、ことに浮華な六朝詩の影響が大きい。したがって、上代文学における詩歌の表現は中国の漢詩文の影がまだ濃いと思われ、アジア叙述と言っても中国の思考的な桎梏から逃れられない。日本文学の伝統としての文学的資質を拡大させるためには中国文学を見習い、模倣し、創り直しをしなければならないのである。その中で筆者の注目を引いたのは、『万葉集』に詠まれた百三十二首²⁴の七夕歌と『懐風藻』²⁵の六首の七夕詩である。当時の七夕に対する関心の深さを示すほか、七夕²⁶伝説と関わる日中の文献、風俗や文学素材などが深広にして久遠だからであ

²⁴ 本文の引用は、小島憲之・木下正俊・東野治之 校注／訳『萬葉集(3)』（新編 日本古典文学全集 8、小学館、1995・11）を使用する。引用箇所の後ろにページ数を示しておく。下線は筆者。

七月七日の夜、織女星が天の川を渡って牽牛（けんぎゅう）星に逢うという中国の伝説、またそれに基づく行事の称。この伝説並びに習俗は日本にも早くから伝わり、この日、貴族の邸宅で詩歌の宴が催され、天平（七二九～）初年には朝廷の年中行事ともなった。万葉集にはこの巻第十をはじめ、巻第八・九その他の巻に百三十二首の歌が見える。ただし、日本の神話や風習と融合して、たとえば夫が妻の家に通う妻問いの習慣の影響を受けて、彦星が天の川を渡って織女星のもとを訪れるような類の変化、置き換えが認められる。（pp.74～75 頭注一「七夕」）

²⁵ 本文の引用は、小島憲之 校注『懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹』（日本古典文学大系 69、岩波書店、1964・6）を使用する。引用箇所の後ろにページ数を示しておく。下線は筆者。

²⁶ ○『詩経』「小雅 谷風之什 大東」：「（前略）維天有漢 監亦有光 跂彼織女 終日七襄 雖則七襄 不成報章 皖彼牽牛 不以服箱（後略、p.47 中）〔天の河空にかかりて うち監れば光りわたれり 三隅なす織女星は ひねもすに七襄する 七襄日にはすれども 織り返し章をも成さず 皖けるかの牽牛も いたずらに車をひかず（p.174 上）〕」

目加田誠 訳『詩経・楚辞』（中国古典文学大系 15、平凡社、1969・12）に拠った。

○『古事記』：「女鳥の 我が大君の 織ろす服 誰が料ろかも（女鳥のわが君が織っていらっしやる布は、いったいだれの着物になるものなのだろうか）」注5に同じ。pp.300-301

○『日本書紀1』：「其の秀起つる浪の穂の上に、八尋殿を起てて、手玉も玲瓏に経織る少女は、是誰が子女ぞ（あの波頭の高く立っている上に八尋殿を建てて、手玉もさやかな音をたてるほどに機を織っている乙女は誰の娘か）」注6に同じ。pp.152-153

○『日本書紀1』：「天なるや 弟織女の 頸がせる 玉の御統の あな玉はや み谷 二渡らす 味耜高彦根（天上にいる機織女の、首に掛けておられる連珠の美しい穴玉よ。そのように麗しく谷二つにわたって輝いておられる味耜高彦根神よ）」注6に同じ。p.127

る。『万葉集』における七夕歌はその後の王朝和歌や物語に大きな影響を及ぼしているように思われる。中国から伝わった七夕説話は日本神話と結びついて独特なものを作り出した。参考のため、『万葉集』からは柿本人麻呂、湯原王と山上憶良の七夕歌を以下のように引用しておく。

柿本人麻呂の三十八首（一九九六～二〇三三首）の七夕歌群の第一首²⁷

秋の雑歌 七夕

1996 天の川 水さへに照る 舟泊てて 舟なる人は 妹に見えきや

(天の川の 水も照るばかりに色鮮やかな 舟が着いて乗っていた彦星は 織女星の目に見えただろうか) 萬葉集(3)巻第十 pp.74~75

志貴皇子の子湯原王の七夕の歌二首²⁸

1544 彦星の 思ひますらむ 心より 見る我苦し 夜の更け行けば 織女の 袖
つぐ夕の 暁は 川瀬の

(彦星が 思っておいでの 気持よりも 見ているわれわれのほうが苦しい 夜が更けてゆくと)

1545 織女の 袖つぐ夕の 暁は 川瀬の鶴は 鳴かずともよし

(織女星たちが 袖を寄せ合って寝る夜の 暁には 天の川瀬の鶴は 鳴かなくて
もよいぞ) 萬葉集(2)巻第八 p.337

○漢「古詩十九首」の第十首：

「迢迢牽牛星 皎皎河漢女 織織擢素手 札札弄機杼 終日不成章 泣涕零如雨 河漢清且淺 相去復幾許 盈盈一水間 脈脈不得語 (p.404 上) [はるかかなたの空に牽牛の星 さやかに輝く天の河の娘星 ほっそりとした白い手のぞかせ さっさと機杼あやつる ひがな一日模様は成らずはらはらと涙は雨と 天の河は澄みきって浅い 河のはばも広いといえぬ この一水の隔たりを前に見つめあうだけ 言葉も交せぬ (pp.47 下-48 上)]」

伊藤正文・一海知義 編訳『漢・魏・六朝詩集』(中国古典文学大系 16, 平凡社, 1972・2) に拠った。

○曹丕「燕歌行」

「(前略) 明月皎皎照我床 星漢西流夜未央 牽牛織女遙相望 爾獨何辜限河梁 (p.414 中) [明月はしらじらと わが床を照らし 銀河は西に傾くも 夜は果てしなく 牽牛と織女は 恋しげに互いを見かえす お身たちは 何故にかくも 逢瀬のままならぬ (p.110 下)]」

伊藤正文・一海知義 編訳『漢・魏・六朝詩集』(中国古典文学大系 16, 平凡社, 1972・2) に拠った。

²⁷ 本文の引用は、小島憲之・木下正俊・東野治之 校注／訳『萬葉集(3)』(新編 日本古典文学全集 8, 小学館, 1995・11) を使用する。引用箇所の後ろにページ数を示しておく。下線は筆者。

²⁸ 本文の引用は、小島憲之・木下正俊・東野治之 校注／訳『萬葉集(2)』(新編 日本古典文学全集 7, 小学館, 1995・03) を使用する。引用箇所の後ろにページ数を示しておく。下線は筆者。

山上憶良の七夕の歌十二首（一五一八～一五二九首）の第一首²⁹

1518 天の川 相向き立ちて 我が恋ひし 君来ますなり 紐解き設けな〈一に云
ふ, 「川に向かひて」)

(天の川に 向き合って立ち わたしが恋しく思っていた あの方がいらっしやる
らしい 紐をほどいて準備しよう〈また「川に向って」) 萬葉集(2)巻第八 p.328

『懷風藻』にある六首の七夕詩を次の一覧表に示しておく。

贈正一位太政大臣藤原朝臣史（藤原不比等） 五言。七夕。一首

033 雲衣兩觀夕 月鏡一逢秋 機下非曾故 援息是威猷

鳳蓋隨風轉 鵲影逐波浮 面前開短樂 別後悲長愁

(雲衣兩たび觀る夕, 月鏡一たび逢ふ秋。機を下るは曾が故に非ず, 梭を息むるは
是威猷。鳳蓋風に隨ひて轉き, 鵲影波を逐ひて浮かぶ。面前短樂開けども, 別後
長愁を悲しふ。) (pp.101~102)

大学頭従五位下山田史三方（山田三方） 五言。七夕。一首。

053 金漢星榆冷 銀河月桂秋 靈姿理雲鬢 仙駕度潢流

窈窕鳴衣玉 玲瓏映彩舟 所悲明日夜 誰慰別離憂

(金漢星榆涼しく, 銀河月桂秋さぶ。靈姿雲鬢を理め, 仙駕潢流を度る。窈窕衣玉
を鳴らし, 玲瓏彩舟に映ゆ。所悲は明日の夜, 誰か別離の憂を慰めむ。) (p.119)

従五位下出雲介吉智首（出雲智首） 五言。七夕。一首。

056 冉冉逝不留 時節忽驚秋 菊風披夕霧 桂月照蘭洲 仙車渡鵲橋

神駕越清流 天庭陳相喜 華閣釋離愁 河橫天欲曙 更歎後期悠

(冉冉逝きて留まらず, 時節忽ちに秋に秋に驚く。菊風夕霧を披き, 桂月蘭洲を照
らす。仙車鵲の橋を渡り, 神駕清き流を超ゆ。天庭相喜を陳べ, 華閣離愁を釋く。
河横さにして天曙けなむとし, 更に歎かふ後期の悠けきことを。) (pp.121~122)

大宰大貳正四位下紀朝臣男人（紀男人） 五言。七夕。

074 犢鼻標竿日 隆腹曬書秋 風亭悅仙會 針閣賞神遊

月斜孫岳嶺 波激子池流 歡情未充半 天漢曉光浮

(犢鼻を竿に標ぐる日, 隆が腹に書を曬す秋。風亭仙會を悦び, 針閣神遊を賞す。
月は斜く孫岳の嶺, 波は激つ子池の流。歡情も未だ半ばにも充たねば, 天漢曉光
浮かぶ。) (p.137)

²⁹ 前注に同じ。

正六位上但馬守百濟公和麻呂（百濟和麻呂） 五言。七夕。

076 仙期呈織室 神駕逐河邊 笑臉飛花映 愁心燭處煎

昔惜河難越 今傷漢易旋 誰能玉機上 留怨待明年

（仙期織室に呈はれ、神駕河邊を逐ふ。笑臉飛花に映え、愁心燭處に煎る。昔は河の越え難きことを惜しみ、今は漢の旋り易きことを傷む。誰か能く玉機の上に、怨を留めて明年を待ためや。）（p.139）

贈正一位左大臣藤原朝臣総前（藤原總前） 五言。七夕。

085 帝里初涼至 神衿翫早秋 瓊筵振雅藻 金閣啓良遊

鳳駕飛雲路 龍車越漢流 欲知神仙會 青鳥入瓊樓

（帝里初涼至り、神衿早秋を翫したまふ。瓊筵雅藻を振り、金閣良遊を啓く。鳳駕雲路に飛び、龍車漢流を越ゆ。神仙の會を知らまく欲りせば、青鳥瓊樓に入るといふことを。）（pp.145～146）

七夕伝説や七夕説話などは、長い歴史の中で中国各地の民話として様々なバリエーションを生じるに至った。西王母³⁰伝説との関連から不老不死薬の伝説や羽衣伝説（白鳥処女説話）のようなストーリーが発生した。因みに、『万葉集』巻十六「由縁ある雑歌」に登場する竹取の翁と天女との相聞歌は、そういう伝説の由緒によって、物語の濫觴である『竹取物語』と関連があると指摘される。

平安時代は、アジアの中心となった中国文明の養分を摂取した奈良時代の文化が発展していくという好機運のなか、初期の物語という新しいジャンルを誕生させた。物語内容は従来からの様々な伝承、伝説や説話のエッセンスを巧みに取り入れながらも、骨組みは一から完全に創作されたものである。その原型を探す試みが繰り返されてきたが、原型となる先行の伝承は未だにベールに包まれているようで定かではない。中国の伝承、そしてインドと関連する仏典故事、シルク・ロードから伝わってきた文物が、その神秘性を語っているからである。特に『竹取物語』におけるかぐや姫の誕生から

³⁰ 【西王母】せいおうぼ [セイウボ] 日本国語大辞典（オンラインデータベース ジャパンナレッジ プラス JapanKnowledge+）<http://www.jkn21.com>

中国、西方の崑崙山に住む神女の名。「山海経－西山経」によれば、人面・虎齒・豹尾・蓬髪とあるが、次第に美化されて「淮南子－覽冥訓」では不死の薬をもった仙女とされ、さらに周の穆王（はくおう）が西征してともに瑤池で遊んだといい（「列子－周穆王」「穆天子伝」）、長寿を願う漢の武帝が仙桃を与えられたという伝説ができ、漢代には西王母信仰が広く行なわれた。

* 延喜式〔927〕祝詞・東文忌寸部献横刀時呪「左は東王父、右は西王母、五方の五帝、四時の四氣」

昇天までの半生に引き起こされた出来事の文化背景を見れば、物語はアジア全体を視野に入れているだけではなく、月の世界も含まれる世界観乃至宇宙観を持っていることが分かる。

『竹取物語』の原型を探す作業は、古くからの多くの研究者の労に譲る。本稿においては、平安時代に入って以降、日本文学におけるアジア叙述が如何に展開していったかについて、歴史書と詩歌集より、虚構のストーリーの展開、作中人物の心理描写、会話文の活用、筋立ての巧緻、あるいはその文章の魅力及び美意識の提起などが際立つ物語の分析を通して検討を試みたい。

まず、『竹取物語』における、文献に記載がある、世に実存するかどうか不明な五つの難題譚の叙述背景を、上坂信男の『竹取物語全評釈（古注釈篇）』³¹を参考しながら見てみよう。かぐや姫が五つの難題を提出する場面を引用しておく。

かぐや姫、「石作の皇子には、仏の石の鉢といふ物あり。それを取りて賜べと言ふ。「庫持の皇子には、東の海に蓬菜といふ山あるなり。それに白銀を根とし、黄金を茎とし、白珠を実として立てる木あり。それ一枝、折りて賜はらむ」と言ふ。「いま一人には、唐土にある火鼠の皮衣を賜へ。大伴の大納言には、龍の頸に五色に光る珠あり。それを取りて賜へ。石上の中納言には、燕の持たる子安の貝、一つ取りて賜へ」と言ふ。³² (p.18)

³¹ 『竹取物語』の本文解釈は、上坂信男 著『竹取物語全評釈（古注釈篇）』（右文書院、1990、11）を使用する。引用箇所の後ろにページ数を示しておく。下線は筆者。

この書籍に採録された古注釈の諸書とその略号は次のとおりである。

【儀抄】 小山儀・入江昌喜補『竹取物語抄』（天明四〔一七八四〕年版）

【伊左々米言】 狛毛呂成『伊左々米言』（寛政五〔一七九三〕年序）

【解】 田中大秀『竹取翁物語解』（天保二〔一八三一〕年）

【躬補】 田中躬之『竹取物語抄補注』（天保一一〔一八四〇〕年 奥村美楯写）

【俚言解】 佐々木弘綱『竹取物語俚言解』（安政四〔一八五七〕年刊）

【標柱】 鈴木弘恭『標柱竹取物語』（明治二一〔一八八八〕年）

【析義】 鳥居忱『竹取物語析義』（明治二五〔一八九二〕年）

【裏解】 五十嵐政雄『竹取物語裏解』（明治二五〔一八九二〕年）

【今泉講義】 今泉定介『竹取物語講義』（明治二六〔一八九三〕年）

【井上講義】 井上頼文『竹取物語講義』（明治二九〔一八九六〕年）

【落合読本】 落合直文『竹取物語読本』（明治二九〔一八九六〕年）

³² 本文の引用は、野口元大校注『竹取物語』（新潮社、新潮日本古典集成、1986）を使用する。引用箇所の後ろにページ数を示しておく。下線は筆者。

天竺の「仏の石の鉢」³³は仏教を摂取した日本では常識的なものだが、辿りつきそうもない仏の西方世界の果てにある。「東の海の蓬萊といふ山」³⁴は、徐福伝説を記した司馬遷『史記』卷百十八『淮南衝山列伝』に記されている蓬萊で、方丈・瀛州（えいしゅう）とともに東方の三神山の一つである。渤海湾に面した山東半島のはるか東方の海にあり、不老不死の仙人が住むと伝えられている。「唐土にある火鼠の皮衣」³⁵は、実は「唐人船」の貿易船を通じてインドの聖（高僧）が西域か南海から中国に持ち込んだ文物である。「龍の頸（首）に五色に光る珠（玉）」³⁶と「燕の持たる子安の貝」³⁷とは中国の伝説や神話に存在するものとしてその叙述が示されるが、どこの産物かはっきりしていない。さらにこの五つの宝物の根源や発祥地を探っていけば、アジアのあちらこちらから類似の伝承が出てきそうである。上記の代表的な文献記載を見る限り、『竹取物語』のかぐや姫は、中国とインドを中心とする、アジア各地（当時の世界中とも言える）から求婚の宝物を求めているかのようなようである。

なお、平安時代初期に成立した『竹取物語』の作者が作品中に披露している知識の背景から考えれば、外来文化や宗教（仏教・道教）の受容・融合過程の深化による神

³³ 『竹取物語全評釈（古注釈篇）』【落合読本】「仏の御石の鉢」天竺の釈迦牟尼仏がもてる、石の鉢にて、光あるものなり。西域記に「波刺斯国云々釈迦仏鉢在此王宮」と見え、南山住持感応伝に、「世尊初成道時四天王奉持仏石鉢唯世尊得用余人不能持如来滅後安鷲山与白毫光共為利益」とあるものはなり。p.103 下～104 上。漢文訓読記号を省略。

³⁴ 『竹取物語全評釈（古注釈篇）』【解】蓬萊山の事は、列子に、「渤海之東有五山。岱輿・員嶠・方壺・瀛州・蓬萊也。其上臺觀皆金玉也。珠庾之樹叢生。而五山之根無所連着。隨潮波上下不得暫時焉。帝恐流於西極。使巨鼈十五拳首而戴之。迭為三番。六万歳一交焉。」p.98 上。漢文訓読記号を省略。

³⁵ 『竹取物語全評釈（古注釈篇）』【解】火鼠の事は、和名抄に、「神異記云。火鼠[和名、比-襦-須-三]取其毛織為布。若汚以火燒之更令清潔以上」(略)抄に、本草綱目に、「時-珍曰。火-鼠出西域及南海火州。其山有野火。春夏生秋冬死。鼠產其中。甚大。其-毛及草木之皮。皆可織布。汚即燒之即-潔。名火浣布。」p.99 上。漢文訓読記号を省略。

³⁶ 【今泉講義】○龍は、想像の蛇の類にて、雲をおこし、天にのぼるものなりといふ。和名抄に、文字集略に云。龍。和名、太都、四足五采甚有神靈者也云々とあり○首の玉は、莊子曰、河上有家貧持緯蕭而食者、其子没於淵、得千金之珠、其父謂其子曰、取石來鍛之、夫千金之珠必在九重之淵而驪龍領下、子能得珠者、必遭其睡也、使驪龍而寤、子尚奚微之有哉云々とあり。p.102 上。漢文訓読記号を省略。

³⁷ 『竹取物語全評釈（古注釈篇）』【今泉講義】田中氏の解に、契沖の河社に、史記、三代世表第一に云はく、詩伝曰、湯之先為契、無父而生、契母与姉妹、浴玄丘水、有燕銜卵墮之、契母得故含之、誤吞之、即生契、々生而賢、堯立為司徒、姓之曰子氏、子者茲々益大也、詩人美而頌之曰殷社、芒々天命玄鳥降而生商、々者殷号也。p.102 下。漢文訓読記号を省略。

仏習合³⁸や本地垂迹³⁹の思想、信仰がすでに古代の日本社会に齎されていたと考えてい
いだろう。それ故に、五つの難題譚のほかに、『竹取物語』では、中国神話の嫦娥（姮
娥）の物語を借用して、かぐや姫は帝に不老不死の薬⁴⁰を残して月から飛翔してきた天
人⁴¹に迎えられていくというSF小説の場面⁴²を作り上げた。これは、道教的の神仙思想
に基づく。夫の不死の薬を盗んで月へ逃げ去っていった中国の伝承とはちょうど反対
に、仏教中の浄土教⁴³を背景にした阿弥陀如来来迎⁴⁴に近い宗教観によって書かれたも

³⁸ 【神仏習合】日本大百科全書（ニッポニカ）（オンラインデータベース ジャパンナレッジ プラ
ス JapanKnowledge+）<http://www.jkn21.com/koten/displaymain>

神道（しんとう）信仰と仏教信仰とを融合調和すること。習合とは、本来相異なる教義・教理を
結合また折衷することであり、本地垂迹（ほんじすいじやく）説がそれにあたる。よって、厳密な
意味でのわが国での神仏習合は、10世紀初期よりのち1868年（明治1）までに存したものであり、
それ以前は単に神仏調和とでもいうべきであろう。

わが国への仏教伝来以降、聖徳太子の積極的な仏教奨励策、また仏教そのものの同化性のあつた
ことも影響して、白鳳（はくほう）時代ころより神前で読経（どきょう）・写経などが行われ、天平
（てんぴょう）時代より日本の神は仏道に帰依（きえ）し、福業を修行しようと欲しているものとみ
て、そのための場として、神社に付属して神宮寺を建立したことなどは、神仏調和というべきこと
である。（中略）

その本地垂迹説とは、本地すなわちインドにおける絶対的な仏陀（ぶつだ）が、人間を利益（り
やく）し、衆生（しゅじょう）を済度（さいど）せんがために、わが国では神となって迹（あと）
を垂れるという説で、わが国の神祇（じんぎ）は、もとを尋ねるとみな仏であり、仏も神もみな、
もとは一つであるとの説であり、中国ではその古代信仰と仏教との習合は、隋唐（ずいとう）以前
六朝（りくちょう）時代よりあつたとされるが、わが国でその基礎となるような神観、仏観が生じ、
本地垂迹説が生じたのは、10世紀に入ってからのことである。（後略）（鎌田純一）

³⁹ 「本地垂迹」前注に同じ。

⁴⁰ 『竹取物語』本文：「天人の中に持たせたる箱あり。天の羽衣入れり。またあるは、不死の薬入れり。」
（p.80）

⁴¹ 『竹取物語』本文：「この衣着つる人は、もの思ひなくなりにはければ、車に乗りて、百人ばかり天
人具して、昇りぬ。」（p.82）

⁴² 『竹取物語』本文：「宵うち過ぎて、子の時ばかりに、家のあたり、昼の明かさにも過ぎて、光り
たり。望月の明かさを十合せたるばかりにて、ある人の毛の孔さへ見ゆるほどなり。大空より、人、
雲に乗りて降り来て、土より五尺ばかり上がりたるほどに、立ち列ねたり。」（pp.76-77）

⁴³ 【浄土教】日本大百科全書（ニッポニカ）（オンラインデータベース ジャパンナレッジ プラ
ス JapanKnowledge+）<http://www.jkn21.com/koten/displaymain>

（日本）奈良時代に浄土経典が中国から将来され、その萌芽は智光、善珠らにもみられるが、中国の
官立仏教の風を伝えた奈良時代には振るわなかった。平安時代、最澄により天台宗が開創されると、
比叡山常行三昧堂に円仁が中国の五会念仏を将来、「不断念仏」として発展し、「朝題目夕念仏」の
独特の宗風がおこり、比叡山に住した源信（恵心僧都）が『往生要集』を著し、浄土教発展に果た
した役割はきわめて大きい。（後略）（牧田諦亮）

⁴⁴ 【来迎らいごう】国史大辞典（オンラインデータベース ジャパンナレッジ プラ
ス JapanKnowledge+）<http://www.jkn21.com>

ののように思われる。換言すれば、『竹取物語』の誕生は、外国文化を吸収し、融和させるという新ジャンルの源泉として、また文学創作を活性化させる上で非常に重要な役割を果たすことになったと言えよう。

四、『宇津保物語』における芸術的なアジア叙述

アジア叙述について、『竹取物語』のほかに、平安時代初期におけるもう一部の作り物語『宇津保物語』を看過することは出来ない。『竹取物語』にも音楽は「遊び」として概括的に記述されているし、求婚手段として貴公子たちの求婚振りも描かれているが、男女が音楽の音声によって邂逅し、恋の関わりを発生させる機能や働きはまだ見られない。『宇津保物語』になると、音楽は、その多彩な姿を現すため、「純乎芸術、音楽、琴を主題とした芸術至上主義の文芸作品」⁴⁵・「音楽小説」⁴⁶・「饗宴・祝祭の文学」⁴⁷などと言われたり、「琴は一貫して呪術的力を保ち続けている」⁴⁸と説かれたりする所以である。筆者はかつて『『宇津保物語』における音の世界——「愛の共同体」の理想像——』と言う題で『宇津保物語』における音楽の機能を物語的構造の素因として究明し、理想的な「音声の共同体」を形成する経緯を分析し、以下の結論を提出した。

名琴の所持者であり、名曲の伝承者である俊蔭一族の中心人物である仲忠の芸術志向を物語の主軸として展開させたのは、作者が物語を構想する上で音楽、特に琴の音色の重要性に和歌を上回らせようと考えたからではないか。そして、物語の描写を通して、琴の芸術性の文芸化を図りつつ男女関係の理想を求めたのではないか。つまり、『宇津保物語』では、音楽を物語的構造の素因として有効に機能させることによって、男女の「音声の共同体」＝「愛の共同体」を理想的に形成しようとしたと見るのであられる。⁴⁹

念仏行者の臨終に、阿弥陀仏が二十五菩薩とともに雲に乗って迎えに来て、死者を極楽に引きとること。浄土宗では「らいこう」と読む。聖衆来迎・自来迎接・来迎引接ともいい、『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』などに阿弥陀来迎の相が説かれている。(後略)(玉山成元)

⁴⁵ 河野多麻「解説」(日本古典文学大系『宇津保物語一』岩波書店、1959・12) p.8

⁴⁶ 中村真一郎『色好みの構造——王朝文化の深層』(岩波書店、1985・11) p.46

⁴⁷ 三谷栄一「宇津保物語 総説」(『鑑賞日本古典文学第6巻 竹取物語・宇津保物語』角川書店、昭61・6、6版発行) p.241 下

⁴⁸ 井上英明「宇津保物語と音楽との関連」(『岡一男博士頌寿記念論集平安朝文学研究 作家と作品』有精堂、昭46・3)

⁴⁹ 拙者『『宇津保物語』における音の世界——「愛の共同体」の理想像——』(『日本文学の種々相』(尚昂文化事業、2004・10) pp.109-110)

さて、『宇津保物語』の作者は、俊蔭一族四代にわたる長編物語を作り上げたのであるが、その知識に富んだ叙述背景から見れば、作品に取り上げられた文物、宗教信仰や世界観などは甚だ膨大で深厚である。初巻の「俊蔭」巻に限って以下の河野多麻の紹介を借用し、その芸術的なアジア叙述を説明する。

うつほ物語の琴は最初から仏教信仰に出発しています。俊蔭が漂流して波斯国に渚に打ちよせられた時「七歳より俊蔭がつかうまつる本尊あらはれる給へ」と観音の本誓を念じ奉ると、白馬が現われて、俊蔭を乗せて飛びに飛んで、琴を弾き遊ぶ三人の人の所におろして消え失せるという筋で、俊蔭と琴との因縁は観音信仰に基づいています。次いで俊蔭の弾く琴の楽器が仏教と関係があります。即ち天女の植えた木を、山守の阿修羅が天女の命によってくる音が俊蔭の弾く琴の音に通うところから、その音を尋ねて三年にして到りつき、俊蔭はその木を得て琴を造り、日本で悲しんでいる親を慰めたいと思うのです。阿修羅は人間のおおけない望みを怒って食おうとすると大空が暗くなり、車の輪のような雨が降り、雷が閃いて、竜にのった童が天上からおりて黄金の札を阿修羅に渡します。阿修羅は恐懼して、俊蔭を伏し拝み、その木を与えます。すると天稚御子が天降って琴を造り、天女が漆を塗り、織女が緒をよりすげて、三十の琴を出来上ります。その中最も優れた二つの琴は手を触れても「山くづれ地われさけ七山一つにゆすりあふ」秘器で、これを切利天の天女がなん風、はし風と名づけ「この二つの琴の音せん所には娑婆世界なりとも必ず訪らはむ」といい、「また人にきかすな」と誡めます。この二つの琴が俊蔭四代に伝えられ、奇瑞を現わすのです。(中略)

琴の芸術性、倫理性、宗教性をうつほの作者は三位一体として体得し、その神秘性を信じ、奇特奇瑞を讃仰する芸術至上の強い信念は——秘曲も秘器も人間の手になったものではなく、天上世界、浄土世界から授けられたもの故に——地上の絶対権者、帝王の命と雖も伝えることを拒み続けるのです。(略) この芸術至高の尊厳こそは、作者の文学精神、魂をこめたうつほ物語の生命であるといえましょう。⁵⁰

俊蔭は遣唐使として唐土へ航行していく途中、激しい風に遭って船が難破し波斯国⁵¹

⁵⁰ 河野多麻「解説」(日本古典文学大系『宇津保物語一』岩波書店、1959・12) p.9~11

⁵¹ 河野多麻「補注一三」(日本古典文学大系『宇津保物語一』岩波書店、1959・12) p.451
これを南洋諸島の一とし、或は今のペルシャと見る説もあるが、ペルシャは印度の西方だから、

の海辺に漂着した。そこで日本から遠い海外での仏教色彩の濃い秘琴伝説が始まった。また、俊蔭が「七歳になる年、父が高麗人こまうどにあふに、この七歳なる子、父をもどきて、高麗人と詩を作り交はし」（『うつほ物語①』 p.192）」たことから分かるように、作品の歴史背景は遣唐使と渤海使が盛んな時代であり、国際文化交流も盛んである。さらに「俊蔭」巻の内容から「唐土船もろこしぶね」、「観音の本誓くわんおんほんぜい」、「あをき馬（白馬）」、「琴」、「阿修羅あしゅら」、「音声楽おんじやうがく」、「三宝さんぼう」、「忉利天たうりてん」、「織女たなばた」、「天人てんじん、天女てんむすめ」、「極楽浄土ごくらくじやうと」、「はし風はしかぜ、なん風なんかぜ」、「娑婆世界しゃば」、「鳳凰ほうおう」、「孔雀くじゃく」、「龍りゆう」、「仙人せんじん」、「象きさ」、「蓮華の花園れんげ」、「文珠もんじゆ」、「兜率天とつてん」、「阿弥陀三昧あみださんまい」、「尊勝陀羅尼を無等三昧むとうざんまいに」、「仏菩薩」などの用語をピックアップして考えれば、『宇津保物語』の冒頭巻における俊蔭の漂流譚と秘琴伝来話は地域的にはインドより東で、中国南部沿岸に近い国を舞台として語られた、仏教に由緒ある叙述であるが、その中の、特に「琴」と「阿修羅」の関係に注目したい。

俊蔭は「鞍置きたるあをき馬出で来て、踊り歩いていなく。俊蔭七たび伏し拜むに、馬走り寄ると思ふほどに、ふと鞍に乗せて、飛びに飛びて、清く涼しき林の梅檀のかげに、虎の皮を敷きて、三人の人並びみて、琴を弾き遊（『うつほ物語①』 pp.21-22）」ふ神秘なところに連れられていき、また六年後に、やっと将来三宝（仏法僧）や天人に献上する木を守っている阿修羅が住んでいる山にたどり着いた。最後に、俊蔭は、天人降臨によって阿修羅から木を出させ、天女に三十の琴を造ってもらったわけである。「琴」と「阿修羅」はもともと違う概念のものであるが、なぜ容貌醜悪のイメージを持つ阿修羅が天人の命で山中に住み、神木の樵に勤めて、木を伐る音が俊蔭の弾く琴の音に通う描写構想が生まれたのか。つまり、なぜ阿修羅が木を伐る音から琴の音色が出るようになったのか。これは『大智度論⁵² 卷第十七⁵³』の以下の内容となんらか

そこまで船が漂着したとも考えられず、日本へ俊蔭が帰る時も波斯国へ渡るとあるので、日本との交易に便利な所と見なければならぬ。少くも印度より東であって、シナに近い国である。

⁵² 便宜上、ウィキペディアの説明を借用する。『大智度論』（だいちどろん）は龍樹の著作とされる書で、『摩訶般若波羅蜜経』（大品般若経）の百巻に及ぶ注釈書である。初期の仏教からインド中期仏教までの術語を詳説する形式になっているので仏教百科事典的に扱われることが多い。中国隋の時代の書写経が正倉院聖語蔵に伝来している。（略）一般には、基本的な部分は龍樹の著作であり、その解説のために、訳者である鳩摩羅什（くまらじゆう、くもらじゆう）が大幅な付加を加えたという説が普及している。

⁵³ 『大智度論』の中国語の内容はニューヨーク・上州荘厳寺・世界宗教研究所、1994年7月創立「美國佛教會電腦資訊庫功徳會（資功會）（EBS）」（米国仏教会コンピューター・データベース功徳會／Electronic Buddhadharma Society, <http://www.baus-eps.org/main.html>）による。

日本語の訳文は「つばめ堂通信

<http://www.geocities.jp/tubamedou/Daichidoron/Daichidoronn-index.htm>」による。

の関連があるのではないかと思う。

法身菩薩變化無量身。為眾生說法。而菩薩心無所分別。阿修羅琴，常自出聲，隨意而作，無人彈者。此亦無散心，亦無攝心，是福德報生故，隨人意出聲。法身菩薩亦如是，無所分別，亦無散心，亦無說法相。(法身の菩薩は無量の身に變化して，衆生の為に法を説き，しかも菩薩の心には分別する所無し。阿修羅の琴の常に自ら声を出して，意に随って作し，人の弾ずる者無きが如し。此れも，また散心無く，また摂心無く，この福德の報生の故に，人の意に随って声を出す。)

ここの阿修羅は鬼道にあるものか，畜生道にあるものか，あるいは菩薩の變化したものはっきりしないが，持っている琴は常に，人の意に従って聞く人の『福德の報生』のために，自ら音声を出している。さらに同じ『大智度論』巻十一に出てくる以下の内容をみよう。

又如甄陀羅王⁵⁴。與八萬四千甄陀羅。來到佛所彈琴歌頌以供養佛。爾時須彌山王及諸山樹木。人民禽獸一切皆舞。佛邊大眾乃至大迦葉。皆於座上不能自安。(また，甄陀羅(きんだら，楽神)王は八万四千の甄陀羅と来たりて，仏の所に到り，琴を弾じて，頌(じゅ，賛歌)を歌い，以って仏を供養せるが如し。その時，須彌山王及び諸山の樹木，人民，禽獸の一切，皆舞えば，仏の辺の大衆より，乃ち大迦葉に至るまで，皆，座上に於いて，自ら安んずること能わず。)

ここの内容と注53の弾琴の場面と照らし合わせてみれば、『宇津保物語』に描かれた俊蔭一族が琴による奇瑞を引き起こした各場面に通ずる。

俊蔭，せた風をたまはりて，いささかかき鳴らして，大曲一つを弾くに，大殿の上の瓦，碎けて花のごとく散る。いま一つ仕うまつるに，六月中の十日のほどに，雪，衾のごとく凝りて降る。(『うつほ物語①』「俊蔭」p.42)

⁵⁴ 前注に同じ。『大智度論巻十七』の「緊陀羅王」と同じ人物。

「如聲聞聞緊陀羅王屯崙摩彈琴歌聲以諸法實相讚佛。是時須彌山及諸樹木皆動。大迦葉等諸大弟子皆於座上不能自安(声聞の如し，緊陀羅(きんだら)王屯崙摩(とんろんま)の弾琴する歌声の，諸法の実相を以って，仏を讃ざるを聞く。この時，須彌山，及び諸の樹木は皆動き，大迦葉等の諸の大弟子も皆座上に於いて，自ら安んずる能わず。)」

仲忠、かの七人の一つてふ山の師の手、涼は弥行が琴を、少しねたう仕うまつるに、雲の上より響き、地の下よりとよみ、風雲動きて、月星騒ぐ。礫のやうなる氷降り、雷鳴り閃く。雪衾のごと凝りて、降るすなはち消えぬ。仲忠、七人の人の調べたる大曲、残さず弾く。涼、弥行が大曲の音出づる限り仕うまつる。時に天人、下りて舞ふ。仲忠、琴に合はせて弾く。(『うつほ物語①』「吹上 下」p.532～533)

以上、「琴」と「阿修羅」との関係性を述べてきたが、結論を言えば、『宇津保物語』における「琴」は仏教との因縁にかかる上に、俊蔭の授けられた秘琴は唐土の琴ではなく、南洋諸島（東南アジア）のものだと思われる。しかし、そうになると、前掲した「葦開 上」巻に出てくる文物の内容と矛盾してくるようには筆者には思われる。あるいは、これはフィクションの物語に含まれる伝奇性と現実性による叙述の落差なのかもしれないが、総合的に考えれば、すでに唐の文化という穏健な土台に立つ物語作者は、かな文学の物語を創作するに当たって、当時の社会事情、歴史背景を考慮に入れながら、中国文化を模倣することから離れて、脱中国の主題や構想を織り成したのであろう。したがって、『宇津保物語』の出発は遣唐使という文化の触媒を借り、中国文化を視野に入れることを前提として、琴の尊重と賛美を通し中国以外のアジア世界を芸術的に叙述したと考えられよう。

五、おわりに

簡潔にまとめれば、古代日本は遣隋使、遣唐使、遣渤海使、渤海使を通じて中国大陸から大量の文化を受容したということになるが、その歴史と回数と被遣者数を考えれば、中国文化はいうまでもなく、アジア各地域の文化や文物も膨大かつ多量に日本に伝来した。正倉院に保存されている宝物は氷山の一角にすぎない。たとえば、インドに発祥した仏教に限って言うならば、その宗教、信仰、思想、経典が先ず中国文化に受容され、またその精華が、日本の学问僧（長期留学僧）や還学僧（短期留学僧）などに吸収され、日本に伝え広められていく全過程を検討すれば分かるように、日本に辿り着いた仏教はすでにインドのものでも、中国のものでもなくなる。要するに、日本で宗教に、生活に、文芸に再利用された仏教文化は、混淆されたアジア仏教とも称すべきものになるわけである。同じことが日本文学にも当て嵌まり、同じ経路によってその痕跡を追跡することが可能になるのである。

本論は、『竹取物語』における五つの難題譚と『宇津保物語』における秘琴伝説を取

り上げ、限られた文献を中心に分析を試みたが、それぞれについて深く探っていく余地が多々有ると思う。浩瀚なアジア文化に直面して、日本文学の平安朝初期物語である『竹取物語』と『宇津保物語』は砂漠の一握りの砂のような存在でしかないかもしれない。が、『竹取物語』は、外国文化を吸収し、融和させる新ジャンルの源泉として、文学創作を活性化させる上で非常に重要な役割を果たすことになったのは疑いを容れないし、また、『宇津保物語』は遣唐使という文化触媒を借りて、中国文化を視野に入れることを前提とし、琴の尊重と賛美を通して、中国以外のアジア世界を芸術的に叙述した作品だと考えられよう。

特別寄稿

米国ジャーナリズムの新たな潮流： 非営利化する調査報道

立岩 陽一郎

はじめに

ワシントンDCの中心部にニュージアム（Neuseum）と呼ばれる博物館がある。外壁に大きく言論の自由を象徴する「The First Amendment（合衆国憲法修正条項1条）」¹と書かれたその施設は、米国の報道の歴史を伝えてくれる。ニュージアムとは、ニュース（news）と博物館（museum）をかけた名称で、訪れた人は、米国の新聞、通信、そしてラジオ・テレビといったマスメディアについて、その変遷を学ぶことができる。

冷戦時代に東西ベルリンを分け隔ててきた壁、監視塔の実物や米国以外の各国の新聞の一面が展示される中、特に人気なのが米国における報道の歴史を映画にしたコーナーである。その内容から、米国人が自国のマスメディアについてどう見ているかを読み取ることができる。

この映画によれば、米国における報道の発祥は、建国前にさかのぼることができる。1775年の独立戦争前に、英国から新大陸に来た新聞記者達が本国の英国政府の命令に反して植民地の人々の側に立って取材をしたことが始まりだとされている。その後は、収容した女性を劣悪な環境で虐待し続けたニューヨークの医療施設に潜入して記事を書いた女性記者や、「こちらロンドン」の言葉で知られ、米国の対独戦参戦を促したと言われるCBSラジオのエドワード・マーロウ（Edward R. Murrow）による第二次大戦下のロンドンからのドイツ軍の空襲を伝える決死のリポートなどが説明されている。

映画に取り上げられている事例に共通するものは、何れも報道する人が自ら体験し、独自に調べた内容だという点である。こうした報道内容は、「investigative reporting」と呼ばれるもので、日本語では調査報道と訳されている。ニュージアムの映画は、米国がジャーナリズムの中で調査報道に最も価値を置いていることを教えてくれているのである。

調査報道にこれほどの価値を見出す考え方は、世界を見渡して決して一般的なものではない。日本も含めて多くの国で、マスメディアの役割として広く認識、期待されているのは政府や自治体などが発表する内容を人々にいち早く伝えるもので、命名す

るならば「当局報道」と呼ぶべきものである。日本でマスメディアと記者クラブ²がほぼ同義語として使われるのは、それを反映したもので、官邸記者クラブ、国会記者クラブ、警視庁クラブ、司法クラブ、日銀クラブなど、その名称を耳にしたことのある人もいるだろう。日本の新聞・テレビの記者は、行政機関や公的な団体に設置された記者クラブに籍を置き、そこを通じて入手した情報をそれぞれの媒体で伝えることが期待されているのである。

米国にも記者クラブ的なものは存在するが³、それがマスメディアの主な役割と認識されたことはない。巨大な権力が発信する情報を流すということではなく、その権力を監視することこそがマスメディアの存在意義であると考えられているのである。

1972年、ワシントン・ポスト紙⁴の記事がニクソン大統領を失脚に追い込んだウォーターゲート事件⁵は、調査報道の代表的な事例である。後にロバート・レッドフォード主演で「大統領の陰謀」として映画化され、今も米国のマスメディア界で語り継がれる偉業とされる。また、その前の年には、ベトナム戦争の実態を政府が自らまとめた機密文書「ペンタゴン・ペーパー」⁶の存在がニューヨーク・タイムズ紙⁷の報道によって明らかになり、全米を揺るがす大問題となった。この時ニクソン政権は、報道は国益を害するとして記事の差し止めを連邦裁判所に求めたが、ニューヨーク・タイムズ紙は一步も退かずに裁判で争い、最後に勝訴している。

米国でこの2つの歴史的な事象を知らないジャーナリストはいないと言っても過言ではないが、今日問題となっているのは、こうした米国ジャーナリズムの伝統に危機的な状況が押し寄せていることである。すなわち、米国のマスメディアから調査報道が急激に姿を消しているのである。ハーバード大学ケネディスクール・ショーレンスタイン・センターのアレックス・ジョーンズ（Alex Jones）センター長は、「問題は経済的なものだ。リスクの高い調査報道を可能にする信頼関係を築く為には報道機関の忍耐強い支援が必要とされる。優秀な調査報道記者を1人雇うとなれば、報道機関は年に数件の記事のために、年間25万ドル以上の給料と経費を払うことを覚悟しなければならない」と指摘している⁸。

ジョーンズが指摘する「経済的なもの」とは、長引く景気の低迷から、広告料を財源とした新聞やテレビが活動の縮小を迫られている現状を指している。その結果、報道各社において、それまで優秀な記者を集めていた調査報道班が縮小、或いは解散させられる動きが出始めているのである。

調査報道は取材に取りかかって直ぐにその成果を世に伝えられる性質のものではない。何か月、場合によっては1年程度の長期にわたって取材を続けることが一般的で、経営の側から見れば効率的とは言い難い。その為、会社の事業規模を縮小せざるを得ない環境に於いては、調査報道に従事している記者が真っ先にやり玉に挙がることになる。

前述のウォーターゲート事件の取材で調査報道の象徴的な存在ともいえるワシントン・ポスト紙も例外ではない。調査報道班を率いているジェフ・リーン (Jeff Leen) は、「取材に時間がかかるものばかりやるのではなく、比較的早く記事にできるもの、短い期間で直ぐに記事にできるものなどを組み合わせて取材し、出来るだけ、頻繁に記事を出せるようしている」と述べている⁹。

自身も長く調査報道に携わってきたリーンでさえも、効率性を意識せざるを得ない現状を明かしているのである。ワシントン・ポスト紙の取り組みは非効率とのそしりを避ける為の手立てだが、実際にはそう簡単に記事が出せるものではない。その結果、多くの報道機関で調査報道記者が居場所を失い、権力を監視するという米国社会がジャーナリズムに求めた役割が危機的状況に陥り始めているのである。

この状況を打開する可能性を秘めているとして、今注目を集めているのが非営利ジャーナリズムである。NPOを立ち上げて調査報道を行うというものだ。財源を一般からの寄付とすることで、経済的な影響を受けずに調査報道を行うことを目指すのである。

その形を最初に提示したのは、チャールズ・ルイス (Charles Lewis) というテレビ出身のジャーナリストである。本稿では、ルイスに焦点をあてて、米国における非営利ジャーナリズムの成立・発展の過程を振り返り、ルイスの目指すものが持続可能性を持った調査報道のモデルとなりうるのか、その今後の展望を考察することにした。

(1) 非営利ジャーナリズムが生まれるまで

① チャールズ・ルイスというジャーナリスト

本稿の目的はルイスが始めた非営利団体による調査報道のモデルについて考察するところにある。最初に、筆者が本人に行ったインタビューと彼の著書などから、ルイスの経歴をたどってみたい。

ルイスは1953年10月に米国東部のデラウェア州で生まれた。地元のデラウェア大学¹⁰で政治学を学んでいる。在学中に地元選出の上院議員の事務所でインターンを行うなどしている。政治に強い興味を持った若者だったという。1975年に大学を卒業し、外交官の養成で知られるワシントンDCのジョンズ・ホプキンス大学高等国際問題大学院へ進んでいる。

ワシントンDCの大学院に進んだルイスの関心が政治にあったことは間違いないが、それは徐々に政治を監視することに移っていく。ルイスはこの当時の心境について、「ウォーターゲート事件が終わって数年しか経たない1979年には、また多くの議員が起訴されるというスキャンダルが起きるなど、政治の世界には幻滅を覚え始めていた。それに、私は民主党、共和党という2大政党制に疑問も持ち始めてい

た。そうした私にとって、政治家になるよりも政治を取材することが別の選択として魅力的に思えてきた¹¹と回想している。

報道記者を目指したルイスは、1977年、ABCテレビのワシントン支局に採用される。その時の支局長はカール・バーンスタイン（Carl Burnstein）だった。はじめにで触れたウォーターゲート事件を調査報道したワシントン・ポスト紙の主要メンバーの1人である。

バーンスタインは暫くして支局長の職を離れるが、ルイスはバーンスタインによって調査報道のいろはを学んだ。ルイスはバーンスタインについて、「カールは根っからの調査報道記者で、それが原因で支局長という管理職にとどまっておれずに辞任に追い込まれるのだが、私にとってジャーナリズムの最初の時期をカールと一緒に過ごせたのは幸運だった。カールは素晴らしい人物で、何よりも調査報道記者として群を抜いて優秀だった」と語っている¹²。

バーンスタインの指導の下、ルイスは調査報道記者として実績を出していく。しかし、テレビに出る機会が少なく、取材結果を短いニュースでしか伝える機会を与えられなかったことに不満があったという。ルイスを鍛えたバーンスタインが支局長の職を解かれてABCテレビを辞めるという出来事もあった。そして、ルイスに移籍話が来る。それはCBSテレビの看板番組「60 Minuets」からの申し出だった。

米国には当時、ABCテレビ、CBSテレビ、NBCテレビという3つの全米を網羅したテレビ局があり、3大ネットワークと称されてしのぎを削っていた（現在はこれらにFOX TVが加わり4大ネットワークと称されている）。そのライバル会社の看板番組から引き抜きの話が来たということである。

引き抜き話は米国のマスメディアの世界では珍しいことではないが、その接触の仕方は異例なものだったという。ルイスはその話が来た時について、「ある日突然、マイク・ウォーレス（Mike Wallas）¹³から直接電話がきて、『君のことを耳にした。私と一緒に仕事する気は無いか？』というんだ。驚いてね。マイク・ウォーレスと言えば私からすれば、雲の上の様な存在だ。こちらは、実績こそ出していたが、テレビにもさほど出たことのない若い記者だ。光栄なことだし、何よりもウォーレスは「60 Minuets」のキャスターだ。彼と一緒に仕事をするということは、アメリカを代表する報道番組の制作に携われるということだ。直ぐにCBSテレビへ移ることを決めた」と話している¹⁴。

マイク・ウォーレスはCBSテレビの看板番組「60 Minuets」¹⁵のキャスターとして長く活躍した米国を代表するジャーナリストである。若い記者の引き抜きに自ら電話をするということは、ルイスが駆け出しの頃から高い評価を得ていたことを物語っている。

1984年、ルイスはCBSテレビに移籍する。そして「60 Minutes」のプロデューサーとなり、その後、制作した2つの番組でエミー賞¹⁶の最終候補となるなどしている。

② 非営利ジャーナリズムの誕生

しかし1988年、ルイスはCBSテレビを辞める。この経緯については、ルイスは特に個別の事象に原因があったわけではないとしている。一方でルイスは、「ある企業の不祥事を取材している時、CBSの幹部から『取材をするのはかまわないが、社名は出さないでくれ』と頼まれた。取材をするなどまでは言われなかったが、こういう話に、実はうんざりしていた。そして結局、プロデューサーである私の判断で社名を出して放送した。その後、その幹部が、『何で、社名を出したんだ。あれだけ出すなど言っただろ』とクレームに来た。そういうものが重なって嫌になってきた。これでは調査報道はできない。そう考えて、CBSを辞めることにした」と話し¹⁷、商業的なマスメディアでは調査報道を行うことに制約が多いと感じていたことを隠さない。

CBSテレビを辞めた当時、ルイスを経済的に支えるものは無かったという。当時を回想した講演の中で、ルイスは、「当時は妻と8歳の子供、それに住宅ローンを抱えて職を失ったわけだから、皆から『何を考えているのか』と驚かれた。何よりも、CBSの『60 Minutes』という米国のジャーナリストにとって考え得る限り、最高のポジションを捨てるという点で、『Are you out of mind? (気でも狂ったか?)』と言われたものだ」と話している¹⁸。

CBSを辞めたルイスは、新聞社や他のテレビ局に行くことは考えず友人のジャーナリストらと、新たなジャーナリズムのモデルが作れないか議論を続けた。当時についてルイスは、「1人はNBCテレビのディレクターだったアレハンドロ・ベネス (Alejandro “Alex” Benes)、もう1人は現在、非営利ジャーナリズム「サクラメント・ビー (Sacramento Bee)」で調査報道を行っているチャールズ・ピラー (Charles “Charlie” Piller) で、この2人と、商業主義からの決別とはどういうことなのか、それは具体的にどうやったら可能なのかを議論する毎日だった」という¹⁹。

ルイスが最終的にたどり着いた案は、自ら団体を組織して調査報道を行うというものだった。その団体の運営方式はnonprofit (非営利) という形態で、商業的な世界から離れることで自由に調査報道を行うことを目指したのである。

つまり営利を目的とせず公共の利益の為に活動し、その財源を広く人々からの寄付に求めるというものである。それは米国では、社会の様々な分野で活発に活動している存在だ。しかし、このような形態でジャーナリズムを実践する団体というのは稀だった。

もっとも、非営利ということだけを広義にとらえるならば、ジャーナリズムを実践する団体は、以前から無かったわけではない。最も古いのは1908年に創設されたクリスチャン・サイエンス・モニター紙（Christian Science Monitor）である。米国に本部のある世界的な通信社のAP通信も非営利である。公共放送PBSも非営利である。ただし、これらは何れも財源が安定している。クリスチャン・サイエンス・モニター紙は、ボストンに本部のあるキリスト教の教会が創設したもので、この教会からの寄付が財源である。AP通信は加盟するマスメディアの加盟料で運営されている。PBSは議会からの助成金が財源の主なものである。それらは、寄付を広く一般から募るといったものではない。

ルイスは寄付を特定の者に求めない、従来とは異なる形のジャーナリズムの確立が必要と考えた。この点についてルイスは、「財源を確保することは重要だが、特定の団体や個人からのみ資金を得るのでは、『寄付した者の意図に基づいて取材をしているのではないか』と疑問を持たれる。それでは社会の信用を得ることはできない。財源は幅広く寄付を募ることが重要だ」と話している²⁰。

ルイスが寄付の提供者として期待をかけたのは、foundation²¹（筆者訳：慈善事業財団、以後、財団）だった。しかし、その道は楽なものではなかった。2011年にニュージウムで開かれたルイスを表彰するパーティーで、当時ルイスから寄付を求められたある財団の責任者が挨拶に立ち、「友人から電話が有り、CBSを辞めたチャールズ・ルイスという男が君を頼って行くから相談にのってくれと言われた。それで会ったのだが、私が最初に彼に言ったのは、『今からCBSに戻って謝罪し、また仕事を続けなさい。君が考えているほど、簡単に寄付なんか集まらないよ』というものだった」と話している²²。

それでもルイスは友人2人の協力を得て団体を立ち上げる。それがThe Center for Public Integrityの誕生で、同時にそれは、非営利ジャーナリズムの夜明けとなるものだった。

最初は寄付集めでの苦戦が続いたが、徐々に寄付が集まるようになる。ルイスは最初に得られた寄付について今でも覚えている。それはTHE MARY REYNOLDS BABCOCK FOUNDATIONという財団が出してくれた2万5000ドルだったという²³。

団体名にあるPublic Integrityとは、「公共の清廉」とか「公共の健全性」という意味である。Integrityという英語に馴染む日本語を見つけるのは困難だが、この言葉は米国人が耳にしても随分と肩肘をはったものに聞こえるらしい。この名称について、ルイスは、「本当はThe Center for Investigative Reporting（筆者訳：調査報道センター）が良かったのだが、その名称は既に登録されていて使えなかった。それで考えた末、public integrityという言葉を使おうと考えた。気恥ずかし

さは有ったが、それくらい自分を鼓舞したいという思いもあった」と語っている²⁴。

自分を鼓舞する必要があったという当時の心情を、前述のニュージアムの講演の場で、ルイスが披露している。ルイスには当時8歳になる娘がいた。その娘とのやり取りについて語ったもので、ルイスは、「娘が私の新しい事務所を見たいとせがむのには困りました。新しい事務所といっても自宅の2階がそれだったわけです。しかし、それでは娘が不安がるだろうと思って、ワシントンDCの郵便局へ連れて行き、『ここがお父さんの新しいオフィスだよ』と言って安心させたものです。それがあながち嘘ではなかったのは、私は郵便局に私書箱を開設していたからです」と語り²⁵、出席者の笑いを誘っていた。この話は後に、現在、ニューヨークで演劇の脚本家をしている本人、カサンドラー・ルイスに筆者が確認したところ、本当にあったことだと話していた²⁶。

ルイスにとって自宅は事務所というだけでなく、資金を得る為の担保物件でもあった。自宅を担保に得た資金でCPIの活動を開始したのである。

調査報道の対象として選んだのは、政治と金の関係である。そこにはABCテレビで手ほどきを受けたバーンスタインの影響もあったと見られる。バーンスタインがニクソン大統領を追い込んだウォーターゲート事件の決め手は金で、ルイスは、「今では米国の調査報道の世界では、『follow the money』というのが、一種の合言葉となっているのだが、これは映画『大統領の陰謀』で最初に使われたセリフだ。金を追え。そうすれば真実に近づける。私が目指したのは、金を追うことで政治の本質を明らかにするというものだった」²⁷と話している。

その調査報道の結果は、CPIの知名度を全米に知らせるほどのインパクトを持つに至る。その内容は、大統領選挙が如何に政治資金によって左右されているかを社会に示すもので、ルイスは、米国社会で誰もが疑問に思いつつ、実際には誰もが素通りしてきたテーマに作ったばかりの団体で取り組んだのである。

(2) 非営利ジャーナリズムの誕生と調査報道の実践

① 公開情報を駆使した調査報道

ルイスが行った調査報道は、1996年の大統領選挙を題材に、政党及び各候補に政治資金が流れる実態を解明し、どのように大統領が決まり、その大統領の政策がどう影響されるかを明らかにするものだったのである。それは「The Buying Of The President」というタイトルで本にまとめられて出版され、その年のベストセラーの1つとなる。

大きな反響を呼んだこの調査報道は、続けて2000年、2004年の大統領選挙についても行われ、それらは全て出版されている。

その内容を、シリーズ最後の作品となった2004年版から見てみたい。この選挙は、最終的に共和党のジョージ・ブッシュ²⁸と民主党のジム・ケリー²⁹が争ったものだ。

同書では、共和党、民主党に寄付している法人について、それぞれ金額の多い上位50について掲載している³⁰。

それによると、共和党への献金額が最も多いのは世界的なたばこ会社のフィリップ・モリスである。日本でも知られている企業では、巨大通信企業のAT&Tが5位、マイクロ・ソフト社も8位に入っている。17位には、あらゆる銃規制に反対することで知られる全米ライフル協会が入っている。

一方、民主党は圧倒的に労働組合からの寄付が多いことがわかる。1位は地方自治体公務員の組合である。伝統的に民主党の強固な支持基盤と言われる教職員組合も7位に入っている。一方、共和党への寄付額が多いフィリップ・モリスも民主党に寄付しているが、38位だ。その金額は共和党へのその4分の1程度に落ちる。

これらの事実から、共和党がたばこ規制に積極的になりにくいことや、銃規制に反対しそうなことがわかる。一方、民主党は公務員改革や公教育改革にメスを入れにくいことが推察できる。つまり大統領が誰になるかによって、どのような政策を行うかが、その資金源を分析することで予見できるということなのである。今では当たり前指摘されていることだが、資金を追うことで明確に解きほぐしたと言える。

同書には、各候補の個別の資金源も掲載されている。このうち、選挙戦に勝利するブッシュについて見ると、メリルリンチ、クレディスイス、ゴールドマンサックスなどウォール街の主役たちの企業名が並んでいる。一瞥すれば、ブッシュが、ウォール街を敵に回すような政策をとれる筈がなく、様々な批判を浴びながら決定された金融機関への公的資金の導入の背景に、こうした資金の流れが影響しているだろうことがうかがえる³¹。

このブッシュの寄付について、ルイスは情報源を明示している。連邦選挙委員会(Federal Election Commission)、内国歳入庁(Internal Revenue Service)、テキサス倫理委員会(Texas Ethics Commission)がその主なものとなっている。これらの機関がルイスらの情報公開の求めに応じて出した資料から情報を拾い出したもので、全て公開可能な情報をもとに書かれているのである³²。

ここに、ルイスの調査報道の特徴を見ることが出来る。ルイスの調査報道は、国家の機密情報の様な入手困難な情報を世の中に公表するものではない。一般に公開されているものの人々の目に届くことはなく、且つ、情報を見ただけではその意味するところのわからないものを正規のルートで入手し、整理した上で社会に提示するというものである。

これは、従来言われてきた調査報道とは異なる。例えば、ニクソン大統領を辞職に追い込んだワシントン・ポストの調査報道には、「ディープ・スロート」と称された政府高官³³やFBI捜査官、それに検察官などが登場する。カール・バーンスタインらワシントン・ポストの記者達はそうした情報源に秘密裏に接触して情報を入手することで真実に迫っていったのである。

一方、ルイスの調査報道は、情報源の有無に関わらず可能である。情報公開制度という誰もが等しく使える制度を利用して粘り強く資料を集め、それらの意味するところを整理して報じるというもので、そこには政府高官との密接且つ特別な関係は必要ない。また、情報を得る為にかかる経費も限られたものに抑えることが可能である。情報公開を請求し資料をコピーする為の諸経費が主なものであろう。資料を丹念に読み解く辛抱強い作業は必要となるが、従来の調査報道のように多額の取材費をかけて記者が全米を飛び回るといった種類のものではなく、財源に限りのあるCPIでも可能な手法だったということが言えるのである。

情報公開制度は米国ではFOIA (Freedom of Information Act) と呼ばれている。今、FOIAはインターネットで各省庁と直接やり取りができるほど便利になっている。勿論、諸経費は負担せねばならずクレジットカードの番号を登録する必要はあるが、オンライン上で手続きをすますだけで、官公庁に足を踏み入れることなく情報を入手することができる。

勿論、ルイスがCPIを設立した20年前はこれほど便利ではなかった。この為、ルイスは、CPIを設立する場所を首都と決め、官庁街に近いビルに事務所を構えた。そして採用した記者達とともに、FOIAで得た情報を整理し内容の意味するところを追加取材するなどして書物にまとめていったのである。

The Buying Of The President の調査報道は、連邦議会についても行われ、The Buying Of The Congress としてまとめられて好評を博した。

CPIは出版した本が新聞やテレビ局に取り上げられることでその評価を高めていくのだが、2000年代に入ると、状況は更にルイスに味方するのである。それは本格的なネット社会の到来である。

CPIは自前のウェブサイトを立て上げて、それを主戦場に、自らの報道を発信するようになる。これは当初、ルイスが考えていなかった嬉しい誤算だったのである。これについてルイスは、「CPIや他の非営利ジャーナリズムが可能となった最大の理由はインターネットの普及だろう。この便利なツールによって、我々は巨大な資本を投下して輪転機を準備したり、テレビスタジオを作らなくてもニュースを発信することが出来るようになった」と話している³⁴。

CPIはその後も、大統領が巨額の資金を提供した人物をホワイトハウスに宿泊させるなどしている実態や、湾岸戦争時やイラク戦争で米軍の下請け業務を一手に

引き受けた巨大企業と政権の実力者ディック・チェイニー³⁵との間の不透明な関係などを報じるなど、様々なスクープを放っている。しかし2005年、ルイスはC P Iを去る。それについてルイスは、「C P Iを公的な存在にする為には、私が代表を続けることは良くない」と考えたという³⁶。

② 活動資金の質的量的な多元化と信頼醸成の構築

C P Iはルイスの狙い通りに成長を続けている。現在は公共放送P B S出身のビル・ビューゼンバーグ（Bill Buzenberg）が代表を務めており、記者50人余りを抱え、政治と金の流れを追うワシントン担当を中心に、様々な調査報道を展開している。取材部門だけで以下のセクションに分かれている。

1. 環境問題
2. 金融問題
3. 国際問題
4. 社会・健康問題
5. ワシントン担当（Washington Desk）
6. データ分析
7. ウェブ情報
8. 映像ニュース

ビューゼンバーグは、「ワシントンDCで調査報道のみを専門に行う記者を50人も抱えている報道機関は他にない」と語った³⁷。

C P Iは、その誕生の当初から財源を寄付によって得ている。その際に重要なのは、developing directorという肩書の寄付集めの責任者だ。その草創期に寄付集めの重責を担ったのはバーバラ・シェクター（Barbara Shector）という女性である。

シェクターは、C P Iが年間に得る寄付の額を6倍増やしたことで知られる凄腕の会計責任者だ。シェクターに、寄付を集める作業について尋ねたところ、「私の仕事は、財団と交渉して、活動の趣旨に賛同してくれる財団から寄付を得るというものです。勿論、寄付については、それが適正に使われたことを示す報告書を寄付者である財団に提出しなければなりません。そうした報告書もまとめます」と話した³⁸。

シェクターが寄付額を6倍にできた理由は、その情報収集能力にあると見られる。同インタビューの中で、「ジャーナリズムに限らず、あらゆる非営利財団には私のような担当がいます。私は様々な団体でdeveloping directorを務めてきたので、そういう担当の友人を多くもっています。そうした友人らと定期的に会って情報交換をしています。どこの財団がどのような寄付に関心を持っているか、事前に情報を集めるのです。そうすれば、良い提案書を早めに準備できます」と明かして

いる³⁹。

シエクターによると、周到的な準備をしても最後は団体の代表の資質がものを言うとのことだった。インタビューの最後に、シエクターは、「いろいろと準備をして提案書を出しますが、最後の決め手はチャック（ルイス）です。最後にチャックが出て来て、このプロジェクトが如何に意味のあることかを説明します。それで決まりです。ですから、最後はチャックなのです」と話している⁴⁰。

ルイスが去ると同時にシエクターもC P Iを去っている。今、C P Iの年間予算は日本円で10億円にのぼっている⁴¹。

これ迄何度か触れたニュージウムで開かれたパーティーとは2010年10月21日、ニュージウムの巨大なパーティールームで催された盛大なディナーパーティーのことだが、これはルイスがC P Iを設立して20年になるのを記念し、その功績を讃える為に開かれたものである。CNNテレビで活躍するクリスチャン・アマンプール⁴²が司会を務めたその式典には米国大手マスメディアの幹部や一線で活躍するジャーナリスト300人余りが参集し、非営利ジャーナリズムが確固としたものに育ったことを確認しあうものとなったが、その席でシエクターはルイスを支えC P Iの土台を作った功労者として会場で紹介されている。

③ 大学と非営利ジャーナリズムとの融合

ルイスは、C P Iを辞めた後、ハーバード大学でジャーナリズム研究に従事している。その時にまとめた論稿で、「報道機関が真面目なジャーナリズムへの関与を減らしていく中で、権力監視を行う市民や社会、そしてそれを実践してきたジャーナリストに大きなマイナスを与えている」と書いている⁴³。

同じ論稿で、「我々は社会問題や時事問題について知識武装を欠いたかなりの数のアメリカ人を生み出している。思慮深い市民社会無しに、人民の人民による人民の為とされる民主主義はいつまで持つのだろうか？」と指摘し、米国民主主義に危機的な現状が生じていると危惧している⁴⁴。その危機感がルイスを新たな動きに駆り立てる。

研究生生活を続けていたルイスに、2007年、ワシントンDCにあるアメリカン大学から別の角度のアプローチが入る。同大学のコミュニケーション大学院長を務めていたラリー・カークマン（Larry Kirkman）からのもので、それは、大学内に非営利ジャーナリズムを作らないかという提案だった。

カークマンはルイスの作りだした非営利ジャーナリズムは、同じ非営利組織である大学との間に高い親和性があると考えたという。その思いについてカークマンは、「私は実際にジャーナリズムの場に身を置いたことはないが、メディア研究者として、また健全なジャーナリズムの存在が民主主義に不可欠だと考える市民として、今のジャーナリズムの現状に危機感を抱いていた。そうした中、チャック（ル

イス）が始めた非営利ジャーナリズムについて強い関心を持って見ていた。ジャーナリズム学科を仕切っていたウェンデル（ウェンデル・コクラン教授 Wendell Cochran）から、『それならば、チャック（ルイス）を連れて来て大学で新たな非営利ジャーナリズムを始めたらどうだろうか？』との提案があり、私は直ぐにゴーサインを出した」と話している⁴⁵。

その際、カークマンからルイスに出された要望は、次の3点を満たせる団体を作るといったものだったという。それは、調査報道を実践する組織であり、また同時に新たなジャーナリズムを生み出すものであり、なお且つ、大学の機関として学生の教育に資するものであること⁴⁶。

この時、ルイスは、直ぐに提案書を書いてカークマンに送付している。カークマンの構想とルイスの危機感が一致したからだ。

提案はアメリカン大学の理事会で了承され、2008年、Investigative Reporting Workshop（IRW）が誕生する。ルイスはコミュニケーション大学院の教授としてアメリカン大学に招かれ、同時にIRWの代表に就任した。

ルイスは、CPIの時と同様に、この名称にもこだわりを持っていたという。その意味するところを、「大学のセンターというと、ただの研究機関というイメージが強くなる。ラリー（カークマン）と私が目指したものは、ジャーナリズムの研究もやるけれども、調査報道を維持する新たな取り組みを始めるということだ。Workshopという言葉には『作業』をする意味がある。汗をかく。我々はセンターで資料を読むだけじゃない。ジャーナリズムを実践する。それを表わしたかった」と話している⁴⁷。

アメリカン大学の理事会に提出された起案書から、その点を更に詳しく紹介したい。まず「その意義」として以下の様書かれている。

「米国に於ける調査報道はこれまで、新聞と放送という主要メディアと呼ばれる報道各社に雇われたジャーナリストによって実践されてきた。多くの場合、それらは、1つのトピックを数ヶ月から数年にわたって追い続ける高い能力を持ったベテラン記者のチームによって行われてきた。不幸にして、そして愚かとしか言いようがないのだが、近年の経済状況が報道各社に、調査報道にかかる費用を削るか無くす方向に向かわせている。

調査報道が、我々の生活に大きな影響を与える強大な公的機関や巨大企業の活動を監視する役割を担う事で社会に寄与してきた事は疑いを挟まない。つまり、この重要な役割を担うための能力が全体として減少しようとも、調査報道の必要性が消えるものではない。

問題は、どのような形で強力かつ公共の利益に資する調査報道を残し、更に育て

ていくかだ。これは米国だけの問題ではない。特に近年民主主義が普及しつつある中米や東欧など、世界の多くの地域で求められている。

解決策の1つとして、調査報道ジャーナリズムを「非営利」や「第三セクター」の分野に移すということがある。実際、アメリカン大学客員特別ジャーナリスト（筆者記：当時）のチャールズ・ルイスによって設立された非営利ジャーナリズムのCenter For Public Integrityは、この選択が有効である事を示す素晴らしい実績を示している。このスタイルの非営利ジャーナリズムはチャールズ・ルイスの指導を得て全米に広まり始めている。例えば、UCバークレイでは、学生が調査報道の重要な担い手になるプログラムが作られている」。

また、「IRWの目指すもの」として次の様な点が列挙されている。

「IRWは生徒に対して、刺激的で新しい学びの機会を提供する。また、教員に対しては教育と研究の場を提供する。我々はこれを世界中の優秀な調査報道ジャーナリストを集める磁石として活用したい。IRWは、アメリカン大学コミュニケーション大学院をジャーナリズムの最先端の場として評価を高める事になるだろう。そして、特に大学院に於いて、優秀な学生を集めるのに役立つだろう。

IRWのモデルは、セサミストリートを制作しその後の教育テレビの保育器且つ革新的な存在となったチルドレンズテレビジョンワークショップにある。私たちはこれまで調査報道を担ってきた主要な報道機関ととってかわろうとするものではない。それよりも、調査報道を全米、全世界に届ける為、それらの報道機関と連携を模索したい」

そして主要な機能として特に以下の7点を挙げている。

1. 活字や映像による独自の調査報道を行い、マルチメディアによって発表する。その活動には、アメリカン大学コミュニケーション大学院の教員や学生も参加する事が出来る。また、他の非営利ジャーナリズム団体やフリーランスの調査報道ジャーナリストもパートナーとして参加する事が出来る。
2. 調査報道の新たな手法や技能を実践する為の革新的なプロジェクトを行い、その為の保育器の役割を担う。それらのプロジェクトには報道各社、非営利ジャーナリズム、大学などがパートナーとして参加できる。
3. 調査報道についてのアカデミックな研究について支援する。
4. 調査報道の発展や新たな技能の試みの為の実験室となる。
5. 調査報道に関する資料を収集する。
6. 調査報道を志すジャーナリストの為の資料センター兼情報センターとなる。特に、市民ジャーナリストや国際的な団体によって支援されている非営利の

ジャーナリズム団体をその対象とする。

7. その他、自由な社会に資する調査報道を促進する為の様々な活動を促進する。

現在、I R WにはUSA Today紙でデジタル紙面担当のエディターをしていたリン・ペリー（Lynne Perri）、C P Iで映像ニュース部門のエディターをしていたマーガレット・エイブラハム（Margaret Ebrahim）、更にはC P Iの財源確保で力を発揮したバーバラ・シェクター（2012年退職）も参加。また公共放送P B Sのプロデューサーで、スタンフォード大学のナイト・フェロー⁴⁸だったリック・ヤング（Rick Young）ら実績あるベテラン・ジャーナリストが参加している。こうしたプロのジャーナリストが大学院生とともに調査報道を行い、その結果を自らのウェブサイトで発表するとともに、公共放送P B Sの看板報道番組「Frontline」⁴⁹を制作するなどしているのである。

I R Wの現状についてルイスは、「財源が確保されているという意味では、とても大きい。我々の上司となるカークマン大学院長の理解は実に心強い。現在、私を含め、I R Wの主だったジャーナリストの給与は大学が支払っている。また、事務所は大学が極めて格安でI R Wに貸してくれるし、通信費やパソコンなどの設備費、テレビカメラなどの撮影機材、V T R編集機材などは大学が負担してくれている。そして最も大きいのは、我々の報道にクレームがついた際、或いはクレームが予想される際に対応してくれる弁護士は大学が用意してくれている。これらはC P Iの時は、全て自前で準備していたものだ。だから、極めて強固な基盤だと言って良い」と話している⁵⁰。

一方で、まだ多くの課題があることも示唆している。ルイスはそのインタビューの中で、「現状に問題が無いわけではない。大学という教育機関と我々ジャーナリズムとの時間の流れの違いだ。何かを決定する為に要する時間が、大学の場合は我々の感覚からすると、長くかかり過ぎる。これはジャーナリズムの世界では、時に、致命的なものとなりかねない。例えば、ある取材をしていて、急遽、取材を続ける上で必要なジャーナリストを新たに加えたいとなっても、大学の決定を待たねば予算措置ができないといったケースが有る。我々も大学の機関である以上、ルールは守らねばならないが、そうした点は改善したいと考えている」とも話している⁵¹。

I R Wは大学からの財政支援とは別に、独自に寄付を集めている。その額は2009年には108万ドル、そして2010年には160万ドル、日本円で1億円を超えている⁵²。ルイスら職員の給与や通信費などの必要経費を大学が払い、取材者の多くが無給の大学院生ということを見ると、ある程度、潤沢な資金と言えるだろう。

ルイスは、可能な限り大学からは財政的な支援を受けないことが重要だとしている。独自に集めた財源で取材経費の主な部分を賄うことによって、ジャーナリズム特有のスピード感を維持することを目指すのである。それは大学という巨大な組織の中で軋轢を生むことはないのだろうか。ルイスの実験は今も続いている。

おわりに

新聞の販売部数は下落の一途をたどっている。代表的な新聞ニューヨーク・タイムズ紙は、生き残りの為に、2013年2月、傘下のボストン・グローブ紙の売却を決定した。ボストン・グローブ紙も米国を代表する伝統ある新聞だ。数年前に赤字に転落した際は、ボストン市民がこの新聞を救おうと販売部数を維持する為に立ち上がったこともある。この売却について伝えるニューヨーク・タイムズ紙の記事は、ボストン・グローブ紙の収入が過去10間で半減したことを明かしている。

ところがそのニューヨーク・タイムズ紙自体も販売不振が続いているのである。親会社のTimes Co.の発表では、発行部数は2010年に100万部を切り、回復する兆しは見えない。

米国では、新聞は急速に売れなくなっているのである。その為、すさまじいダンピングが行われている。2010年に筆者がワシントンDCで生活した際、ワシントン・ポスト紙を購読した。ショッピングセンターで購読を呼び掛けていたので1年間契約したところ、140ドルだった。更に、そのショッピングセンターのクーポン40ドル分がついていた。つまり12カ月で100ドル、当時のレートで9000円足らずである。月々の支払いは800円にもならない額である。

しかし、そこまでしても購読者数を維持できないのが現状となっている。当然、広告収入は下降線をたどっている。その結果、記者の解雇が日常茶飯事となっている。

米国で17年にわたって新聞記者をしている岩部高明は、「新聞社での解雇は日常茶飯事なので、そこには1つのルールが出来ている。それは入社年次の若い順に解雇するというもので、その際に記者の能力は全く加味されない。能力には客観的な指標が無い。客観的な数値である在籍年数が解雇理由であれば、裁判を起こされても会社側が負ける可能性が極めて低くなるからだ」とその厳しい状況を明かしている⁵³。

テレビも状況は同じである。放送時間に占めるニュース時間の枠は減らされ、バラエティー番組が増え始めている。また、ニュース番組の内容がバラエティー化していったという指摘もされている。その為、調査報道記者らが解雇されたり、別の番組に配置転換になったりするケースが後を絶たない。民間の調査機関ピュー・リサーチセンターが2012年の状況を調べたところ、ニュース番組に占めるスポーツ、天気、交通情報の割合が高くなっており、全体の40%を占めていた。ニュース専門テレビのCNNでも、調査報道の数が5年前の半分に減ったという⁵⁴。

一方、ルイスが提示した非営利ジャーナリズムは確実に全米に広がっているのである。2010年にI R Wが全米でアンケート調査を行った結果、団体の数は60に増えていた。また年間の活動費が日本円で1億円を超える団体は、C P I以外にもプロ・パブリカ（Pro Publica）、Center for Investigative Reporting、など17団体もあった。2011年のI R Wの調査では団体数は75に増えている⁵⁵。

これについてルイスは、「この数字をどう見れば良いのか。ただ単に団体数が増えたということに注目するのか。そうではないと思う。それによって、優秀な調査報道記者が次の職場を得られたことが最も重要なのだ。彼らは新聞やテレビ局といった伝統的なメディアでは働く場を失っていた。しかし、それは調査報道記者が社会から必要とされなくなったわけではない。調査報道は商業ベースでは機能しないかもしれないが、非営利によって商業ベースから切り離されることで、持続可能なメカニズムを得たのだ」と話している⁵⁶。

2011年6月にF C C = 米連邦通信委員会⁵⁷がまとめた報告書は、ルイスの取り組みが米国メディア全体に広く受けとめられていることを物語っている。F C Cがジャーナリストなど有識者に委嘱して2年間にわたって調査した結果をまとめたその報告書は、今後の米国のメディアは非営利を軸に展開する必要があると結論付けた。そこで特に強調されたのは、非営利化することで権力監視的なジャーナリズムを存続させることの必要性だった。そして、非営利団体を認定するI R S（米内国歳入庁）に対して、報道機関が非営利の権利を得やすくするよう制度的な見直しを求めている⁵⁸。

こうした中、伝統的なメディアの中に、非営利ジャーナリズムとの連携を模索する動きが出始めている。特に顕著なのは公共放送P B Sだ。看板の報道番組「Frontline」は、非営利ジャーナリズムとの共同制作が増えている。番組の制作責任者であるエグゼクティブ・プロデューサーのデイビッド・フェニング（David Fanning）は、「非営利ジャーナリズムの調査報道の能力は群を抜いている。彼らの取材を生かさない手はない。番組全体の2割くらいは共同制作になるだろう」と話し⁵⁹、非営利ジャーナリズムとの共同制作に期待を寄せている。

更に、2011年3月にI R Wとワシントン・ポスト紙が同時に発表した内容が、米国のメディア関係者に新たな動きを感じさせている⁶⁰。それは、著名な調査報道ジャーナリストとして知られるジョン・サリバン（John Sullivan）をI R Wとワシントン・ポスト紙が共同で雇用するというものだった。資金はフォード財団（Ford Foundation）が寄付として拠出し、サリバンは双方に記事を書くとともにアメリカン大学で教鞭にも立つというものである。ルイスは、ワシントン・ポスト紙のインタビューに対して、「The extraordinary alliance（極めて稀な協力関係）」と語っている⁶¹。

第一章で紹介したニュージウムでのルイスの為のパーティーで1つのエピソードがある。招待状を持たなかった一部の人が出席を断られるというハプニングがあったのである。断られたのはある大手新聞社の幹部だった。これまで新聞、テレビの殿堂とされたニュージウムで非営利ジャーナリズムを生み出したルイスの為のパーティーが催され、招待状を持たなかったとは言え、新聞社の幹部が出席を断られるという出来事に、出席者は時代の流れを感じさせられていた。

ルイスがC P Iを作って20年余り。非営利ジャーナリズムは確実に米国メディアの中で重要な地位を占めている。更なる技術革新、不安定な景気動向など、様々な要因から、まだ先を見通せない米国のマスメディアだが、今後どのような方向に向かおうとも非営利ジャーナリズムが軸となっていくことは間違いないのである。

【注】

- ¹ 表現・報道の自由を規定した合衆国憲法の条文。
First Amendment : Congress shall make no law respecting an establishment of religion, or prohibiting the free exercise thereof; or abridging the freedom of speech, or of the press; or the right of the people peaceably to assemble, and to petition the government for a redress of grievances.
- ² 行政機関などに設置された記者の取材拠点で、帝国議会が開かれた際に設けられたのが最初とされる。新聞、通信、放送などの大手マスメディアの記者が常駐している。加盟社以外を記者会見から締め出すなどした為、外国メディアから批判を受けている。
- ³ ホワイトハウス、国務省、国防省などに大手メディアの記者が常駐して取材をしており、「インナーサークル」と揶揄されることはある。ただし、日本の様に組織化されたものではなく、且つ排他的なものではない。
- ⁴ Washington Post 米国の首都に本社を置く新聞社。経営難から規模を縮小し、現在はワシントン首都圏の地方紙的な位置づけが強いが、社説が各国のマスメディアに引用されるなど現在も米国を代表する新聞と見られている。
- ⁵ ワシントンDCのウォーターゲート・ビルにあった民主党事務所への元C I A職員などの侵入事件についての取材から、ニクソン政権中枢の様々な問題が明らかになった事件。
- ⁶ ランド研究所に勤務していた研究員のダニエル・エルズバーグがベトナム戦争の実態を伝える必要があると、政府の機密文書であった機密文書を公表した事件。ニューヨーク・タイムズ紙によって明らかにされたその内容は、米国民にベトナム戦争の無謀さを伝え、戦争終結を促すものとなった。
- ⁷ New York Times 米国のマスメディア界の頂点に君臨しているとも言われる代表的な新聞。社説や記事は世界各国のマスメディアに引用される。
- ⁸ アレックス・S・ジョーンズ『新聞が消える』(朝日出版、2010年) P30
- ⁹ インタビュー 2011年3月14日 I R Wのオフィスにて
- ¹⁰ University of Delaware
- ¹¹ 筆者への電子メール 2013年3月24日
- ¹² インタビュー 2010年12月22日 I R Wのオフィスにて
- ¹³ 「60ミニッツ」の番組が始まった1968年当初から記者として出演し、2006年に88歳で引退するまで番組の顔として活躍した。
- ¹⁴ インタビュー 2010年12月22日 I R Wのオフィスにて
- ¹⁵ 米国を代表する看板報道番組で調査報道に定評がある。

- ¹⁶ 優れたテレビ番組に贈られる米国の賞で最終候補となるだけでも栄誉とされる。
- ¹⁷ インタビュー 2010年10月25日 I R Wのオフィスにて
- ¹⁸ 2011年10月21日にニュージャムで開かれた表彰式での講演 筆者のノートから
- ¹⁹ インタビュー 2010年12月22日 I R Wのオフィスにて
- ²⁰ 同上
- ²¹ 慈善事業財団 米国の名だたる企業はその多くがこうしたものを作っており、それが米国の寄付社会を支えている。企業にとっては慈善事業財団を作ることで節税となる。連邦議会は慈善事業財団に対して、毎年、その前年の総資産の5%を寄付するよう求めている。
- ²² 2011年10月21日に行われたニュージャムの表彰式での講演・筆者のノートから
- ²³ 筆者への電子メール 2013年3月24日
- ²⁴ インタビュー 2010年12月22日 I R Wのオフィスにて
- ²⁵ 2010年10月21日の講演 筆者のメモから
- ²⁶ インタビュー 2011年4月20日 ニューヨークのレストラン「Josie's」にて
- ²⁷ インタビュー 2010年12月22日 I R Wのオフィスにて
- ²⁸ George W. Bush
- ²⁹ Jim Kerry 現国務長官
- ³⁰ *Charles Lewis and The Center For Public Integrity ,The Buying Of The President 2004 (Perennial, 2004) P119~P128*
- ³¹ Ibid., P170
- ³² Ibid., P170~P171
- ³³ Deep Throat 当時米国で上映されていたポルノ映画のタイトルで、深い部分を知った情報源という意味で使われた。情報源を守る為にワシントン・ポスト紙内でも極めて限られた記者しかその存在を知らず、長期間にわたってその存在が謎とされてきた。後に本人の告白によって当時F B Iの幹部だったMark Feltと判明。
- ³⁴ インタビュー 2010年10月22日
- ³⁵ Dick Cheney ブッシュ・シニア大統領時代に国防長官、ブッシュ・ジュニア大統領時代に副大統領を歴任。
- ³⁶ インタビュー 2011年6月7日 I R Wのオフィスにて
- ³⁷ インタビュー 2011年1月25日 C P Iのオフィスにて
- ³⁸ インタビュー 2011年3月15日 I R W近くのレストラン「シェ・ジェフ」にて
- ³⁹ Ibid.
- ⁴⁰ Ibid.
- ⁴¹ I R Wが調査した結果によると、年間の予算が日本円で10億円にのぼる団体は、2013年現在でC P I以外に2団体ある。1つはニューヨークに本部を置くPro Publica、もう1つはカリフォルニア州バークレイに本部を置くCenter For Investigative Reportingである。
- ⁴² Christiane Amanpour 湾岸戦争の従軍記者として活躍した米国を代表する国際派のジャーナリスト。
- ⁴³ Charles Lewis *The Growing Importance of Nonprofit Journalism* (Joan Shorenstein Center on the Press, Politics and Public Policy 2006) P3~P4
原文は「As news organizations have reduced their commitment to serious journalism, there has been an incalculable cost to communities, to citizens' ability to monitor those in power, and of course to those professionals directly impacted in the profession of journalism itself」
- ⁴⁴ 原文は「... it would seem that we have an extraordinary number of unarmed Americans, less and less knowledgeable about public affairs or news. To what extent can a democracy ostensibly "of the people, by the people and for the people" exist without an informed citizenry?」

- 45 インタビュー 2011年3月15日 I R W近くのレストラン「シェ・ジェフ」にて
46 Ibid.
47 インタビュー 2010年12月22日 I R Wのオフィスにて
48 スタンフォード大学がナイト財団と共同で行っているもので、優れたジャーナリストに資金を提供し自由にジャーナリズム研究を行わせる取り組み。
49 米国テレビ界の最後の良識とも称される報道番組。徹底した調査報道で知られる。
50 インタビュー 2011年6月7日 I R Wのオフィスにて
51 Ibid.
52 I R Wは大学の付属機関だが、活動費の多くは自前で賄っている。大学が給与を支払っているのは代表のルイスを含め、教授か准教授の資格を持った数人で、残りのスタッフの給与はI R Wが集めた寄付から出されている。内部資料によると、初年度の2008年は、大学からの助成金が6万4500ドル、集めた寄付が42万9000ドル。2009年が大学からの助成金が10万ドルだったのに対して集めた寄付は108万ドルとなっている。2010年は集めた寄付が160万ドルとなり、大学からの助成金は無かった。
53 インタビュー 2013年4月1日 日本の筆者の自宅にて
54 *The State of the News Media 2013*, Pew Research Center
55 *Web site of Investigative Reporting Workshop*
<http://investigativereportingworkshop.org/ilab/story/second-look>
56 インタビュー 2011年6月7日 I R Wのオフィスにて
57 Federal Communication Committee 日本の総務省的な役割を担う機関だが、政府から独立している。
58 Future of Media, Federal Communication Committee 2011年6月9日公表
59 インタビュー 2011年11月1日 ボストンのオフィスにて
60 *Washington Post* 電子版 2013年3月1日
61 Ibid.

The Exemplary Wife, or How to Read the Syair Putri Akal
(模範的な妻, あるいは「理性的な王女」をどう読み解くか) (Dr. Willem van der Molen)

アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2012年4月20日(金)

場 所：名古屋キャンパス N棟3階 社会倫理研究所会議室

テーマ：The Exemplary Wife, or How to Read the Syair Putri Akal
(模範的な妻, あるいは「理性的な王女」をどう読み解くか)

報告者：Dr. Willem van der Molen

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所客員教授)

*講演はインドネシア語



オランダの王立言語地理民族学研究所の研究者ウィレム・ファン・デル・モーレン博士(マレー文学, ジャワ文学, 文献学)が、「シャイール」と呼ばれる詩篇文学についてインドネシア語で講演を行った。

シャイールとは、ムラユ語(マレー語)で作られた韻文で、古典ムラユ文学というジャンルに区分される。4行で一つの連をなし、その4行は同一の韻を踏む。近代文学と異なり、書き手が不明であり、いつ書かれたかも定かでない。しかも印刷されていない手書きの写本であるため、判読に困難が伴う。今回題材となった「理性的な王女」は、古典ムラユ語をアラビア文字で記した、いわゆる「ジャウイ」表記である。500連からなり、オランダのクリンケン(Klinken)が筆写したが、現在はライデン大学図書館とジャカルタの国立図書館に所蔵されている。19世紀半ば以前に、いわゆるマレー世界(マレー半島, スマトラおよびその周辺)で編まれたと推測される。

物語は、美しさで名高いブランタドゥラ国の王女が、ダムシク国の王子に求婚されるところから始まる。王女はまだ結婚の意思がないとしてこの申し込みを断った。しかし、王子が持っている踊る人形を見て、それをどうしても手に入れたくなった。父

王に婚姻申し込みを受ける意思を示すが、父王は王女が一旦は断ったことを理由に、王女の願いを聞き入れなかった。そこで、王女は一計を案じ、彼女と顔がよく似た侍女を王子の許へ行かせた。侍女を王女と見誤った王子は、一晚床を共にすることを条件に、人形を渡すことを承諾する。こうして王女は人形を手に入れたが、真実を明かされて王子は辱められた。再び王女に結婚を申し込んだところ、父王からの許しが出て、王女も王子を愛するようになっていた。しかし、王子は王女に欺かれた復讐を胸に秘めていた。ダムシク国への帰路、王子は王女を自分の召使ラマットの許へ行くように命じ、国に到着すると王子は財務大臣の娘と結婚した。王女は、新しい夫と床をともにするまいとして、ラマットにヤシの実を料理するように命じたので、ラマットは朝まで仕事した。また、この夫は一晚かかるもうひとつの仕事をしなければならなかった。王女は、王子の新しい妻、財務大臣の娘に、人形を譲ることを条件に、一晚夫を交換するよう迫った。この秘密の約束から二人の男の子が誕生したが、その顔から息子たちの本当の父親は誰かがわかってしまった。王女は王子と再び結ばれ、財務大臣の娘は親元に戻され、ラマットは処刑されてしまった。

従来解釈では、この王女は、夫に裏切られたにも拘わらず夫を愛し続け、貞節を守ったと称賛された。夫の心を読み取り、冷静な判断で夫とよりを戻すのに成功し、模範的な妻と評された。確かに「理性的」な女性である。しかし、ファン・デル・モーレン氏はこれに疑問を投げかける。王女の理性は狡猾さとも言えるし、自分のためには下々の者を容赦なく犠牲にしており、それは、封建社会の価値観に基づいた行いそのものである。物語全体では、階級社会におけるルール、身分によって異なるルールが適用されていることが描かれている。生まれが重要であり、夫の地位に妻は従属させられる。特に、結婚に関しては、そのルールから逸脱しないようにすることが要求される。性的関係はそれを決定する鍵となる。このように、シャイールは社会の規範を反映した文学作品である。また一方では、騒動の発端となった「踊る人形」は海外から渡来したカラクリ人形とも考えられ、時代を考察する一端ともなっている。

講演会には、学外からのインドネシア研究者3名のほかにも、インドネシア語を学んでいるアジア学科の学生や大学院生が10人ほど出席し、インドネシア語で質疑応答がなされた。ファン・デル・モーレン氏も、若い世代がマレー文学に関心を持ったことに大いに感激された様子であった。

(文責：小林 寧子)

アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2012年6月7日（木）

場 所：名古屋キャンパス J棟1階 特別合同研究室

テーマ：Cinematic Contest of Popular Post-Islamism

報告者：Dr. Ariel Heryanto（オーストラリア国立大学准教授，京都大学東南アジア研究所外国人研究員）

* 講演は英語



Dr. Ariel Heryanto 氏



南山大学 森山幹弘教授（右）

講演会は予定通り17時から開始し，最初に講演者の紹介を森山幹弘教授（外国語学部アジア学科）が行った後，およそ1時間の講演が行われた。参加者は南山大学の学部の学生が10名ほど，南山大学の教員が3名，名古屋大学の大学院に所属するインドネシア人学生が3名，一般の参加者が1名であった。

アリエル氏は，パワーポイントを使いながら講演をされ，ビデオクリップや今回の講演で扱った映画の映像を紹介しながら，熱のこもった講演を行われた。

講演内容の概略は次のとおりである。インドネシアでは1990年代になるとスハルト大統領が，それまでのイスラムを権力から遠ざけようとしてきた政策を転換させたことに伴い，インドネシア社会は日常の暮らしの中にイスラム化した現象が見られるようになった。それは，女性のイスラムファッションをはじめとして，音楽，テレビ番組，雑誌等の出版物という大衆的な文化に見る事ができる。敬虔な信仰心が，そのような消費される文化を通して社会をイスラム化したと言える。中でもベストセラーとなった小説を原作として制作された映画『愛の詩』（Ayat-ayat Cinta）の2008年の封切りと爆発的なヒットは，インドネシア社会のイスラム化のターニングポイントを象徴するものであった。この映画から見られることは，イスラムが商業主義と結びつき新しいタイプのイスラム（ポップなイスラム）を生み出したこと，またイスラム共同体としてのインドネシア社会の内部に，様々な対立を生み出したことである。一

方、この映画『愛の詩』はイスラムの布教を主題としたものであったと言えるが、社会には賛否両論が巻き起こった。その後、この映画に対する賛成と反対の立場から、3本の映画が製作されるが、いずれも『愛の詩』を凌ぐヒット作とはならなかった。映画『愛の詩』の大ヒットの背景には、インドネシアの大衆文化の担い手である女性と若者を中心とした中産階級あるいはより下層の階級の支持があり、インドネシア社会のイスラム主義（Islamism）を考える際には、この映画に象徴されるように大衆文化を無視するわけにはいかないことを指摘できよう。

（文責：森山 幹弘）

アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2012年6月26日（火）

場 所：名古屋キャンパス R棟1階 会議室

テーマ：東アジアを視野に入れた文化交流史を考える

報告者：徐 興慶（台湾大学日本語学科教授，国際日本文化研究センター外国人研究員）



一、十七～十九世紀に日中間を越境した知識人

(1) 近世の時代背景：

近世中国の明，清交替期，そして同時代の徳川鎖国の日本社会では，戦乱が不可避である環境の中で，人・僧侶・書籍・学問（儒学）のグローバルな越境やそれに伴う文化，思想交流が育まれていた。そこでは，日中知識人の中の儒学観，宗教観，世界観などの異同が生じていた。

(2) 近代化における伝統ある学問と西洋文明の葛藤

近代化を促すインパクトの時代の中で，東アジアの知識人が西洋文明を摂取するという事象が一斉に起こった。こうした日中間の人的思想交流のプロセスにおいて，それぞれの葛藤や相克に伴ってその世界観も変化していく。東アジアにおける多様な方向性の中で，伝統的学問の実用性や新しい学問の再構築を考える必要がある。

二、これまで取り上げた近世日中文化交流の知識人

- (1) 儒者：朱舜水，安東省菴，張斐，貝原益軒，熊沢番山，伊藤仁斎
- (2) 僧侶：隱元，独立，心越（曹洞宗）
- (3) 政治人物：鄭成功

三、朱舜水研究の新史料の発掘とその展望

- (1) 『朱舜水集補遺』（編著，台湾大学出版中心，2004）

本書は、従来の朱舜水全集に全く収録されていない書簡43点，筆語62点，問答23点をはじめ，舜水の手になる跋文や詩，これまでも部分的には抄録されてきた書翰20点，問答8点の全文を，それぞれやり取りした相手（22人）別に，年代を可能な限り比定して年次順に配列し，さらに適当な解説を付した。これによって，朱舜水の知られざる側面や，従来不明瞭であった点が明らかになる。また安東省菴・人見竹洞などの儒者や当時長崎在住の黄檗僧，在留華僑の唐通事，朱舜水の後継者たらんとして渡来した孫の毓仁，張斐などの儒者，長崎町人の代表（町年寄）らの関係書簡を収録し，朱舜水の交友関係や学問的，社会的背景を明らかにする。さらに跋・祭文・賛などからは，その後の日本人の朱舜水観を知ることができ，多角的な朱舜水研究の新素材を提供する。

本書収録の新史料は，1986年に初めて公開された柳川古文書館安東家史料（省菴の末裔が寄贈したもの）をはじめ，日本全国各地で収集したものである。同時に，閲覧・出版を許可して下さった各所蔵機関のご理解を得，また多くの関係する研究者，学兄の温かいご指導，ご助言をいただいた結果でもある。換言すれば，舜水がそうであったように，朱舜水研究をめぐる「生きた日中文化交流」の研究素材を提供している。

- (2) 『朱舜水與東亞文化傳播的世界』（著，台湾大学出版中心，2008）

- ◇東アジアの視野から朱舜水研究を考える
- ◇朱舜水と東アジア儒学の発展
- ◇朱舜水と貝原益軒の「経世致用」観
- ◇隱元と朱舜水のアイデンティティ問題
- ◇朱舜水と安東省菴の思想の異同
- ◇独立と朱舜水：文化伝播者の異なる論述
- ◇心越，徳川光圀と朱舜水の思想変遷

- (3) 「朱舜水與東亞文明的發展」（編著，台湾大学出版中心，2012）

◎ 討論の焦点：

- ◇日本に伝播し，影響を及ぼした朱舜水の学問と思想

- ◇朱舜水と日本の朱子学、陽明学との関係
- ◇明の遺民である朱舜水の日本での史跡考察
- ◇朱舜水研究の現代意義

(4) 『独立全禅師文集』の編纂と出版について

四、東アジア諸国の知識人は近代化そのものをどう見ていたか

(1) 『近代日中思想交流史の研究』（京都：朋友学術叢書，2004）

ここで述べる近代中日思想交流は、主として東アジアの近代の幕開けと呼ばれる1840年に起きたアヘン戦争から、1851年に清朝打倒を宣言し、中国革命の先駆として後世の東アジア社会に多大な影響を与えた太平天国の反乱、さらに清末の先駆的な知識人たちが西洋学問の摂取によって、従来の伝統的、保守的な国策を変え、新しい改革思想を中国に植え替えようとする変法維新期を経て、十九世紀末に孫文の革命思想が萌芽するまでの時期を取り上げている。とりわけ、人物思想交流をめぐる幕末の対外思想構想や明治維新観を研究対象としている。具体的には、「西洋列強の外圧」という時代背景から、清国側の朱舜水、魏源、何如璋、黎世昌、黄遵憲、楊守敬、康有為、梁啓超、孫文らと日本側の徳川光圀、佐久間象山、吉田松陰、横井小楠、高杉晋作ら関連する人物をそれぞれ抽出して比較し、時代の流れに導かれた発想が相手国に摂取され、または受容される実態を明らかにした。

(2) 『東亞知識人對近代性的思考』（編著，台湾大学出版中心，2009）

- ◇十九世紀以前，日本人の朝鮮観
- ◇近代西洋知識の東アジアにおける伝播とその共通テキストの検討
- ◇漢学，蘭学と日本近代化の関連性
- ◇近代日本におけるナショナリズムの成立と展開の様相
- ◇中国近代「新史学」の日本的背景：清末の「史界革命」と日本の「文明史学」
- ◇「国族精神」の境界を引く：梁啓超『論中國學術思想變遷之大勢』を考える
- ◇西学の子：容闕と新島襄の異国経験

東アジアの「近代性（Modernity）」に対する研究方法として、東アジア史とグローバル史がクロスする点を取り上げ、伝統文化と近代西洋文明の葛藤（相互影響）に対して如何に対応すべきかを視野に入れた。すなわち、日本の知識人のみならず、中国、韓国、台湾の「周辺から見る」という観点から、文化摩擦が生じた原因や相違点を究明し、その対応策を生み出していった方法を述べた。いわば、西洋文明が東アジア地域にもたらした社会変容を再認識する必要があるという問題意識を中心にすえたものである。

(3) 『近代日中知識人の自他認識——思想交流史からのアプローチ』

（著，2013 出版予定）

- ◇幕末知識人の西洋文明摂取とその思想変遷
- ◇王韜（1828-97）と日本維新人物の思想比較
- ◇伝統と近代の間——福沢諭吉（1835-1901）の儒教主義批判への試論
- ◇東西文化の融合と構築についての試論——岡倉天心（1863-1913）の「アジアは一つ」を中心として
- ◇小室信介（1852-85）の中国観——『第一遊清記』を中心として
- ◇近代文化論から見た李春生（1838-1924）の日本観——『主津新集』と『東遊六十四日隨筆』を中心に
- ◇他者としての異文化論説——張德彝（1847-1918）の『航海述奇』をめぐって
- ◇近代中国知識人の日本経験——梁啓超（1873-1929）、林猷堂と戴季陶の日本観の比較

五、研究方法—結語に変えて

上述のように、越境した知識人の思想交流において、自国の立場から考えるのと外国の視野によって思考するのは異なる。これまで、日本に散在するオリジナル史料を可能な限り発掘し、これに解説を加え、さらに日中であまり利用されていない資料を駆使して、また関連する問題意識の原点に立ち戻るという方法によって研究を進めてきた。同時に、近年の日中の同分野の学界に良い学問的刺激を受け、なるべく自国中心主義（National Particularism）や一国史の視野にとどまらない客観的な実証研究を進め、少しでもこの分野の研究に貢献したいと考えている。

（文責：徐 興慶，蔡 毅）

アジア・太平洋研究センター主催

日 時：2012年7月2日（月）

場所：名古屋キャンパス L棟9階 910会議室

テーマ：『蒙古秘史』に記載されるチンギスハンの祖先

報告者：賀希格陶克陶（中国中央民族大学教授，モンゴル国大統領「北極星勲章」
受章者）

通訳者：賽漢卓娜（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究員，南山
大学非常勤講師）

* 講演は中国語



1. 『蒙古秘史』 および研究概況

(1) 『蒙古秘史』

○ 13世紀20年代（or 40年代）

回紇（かいこつ，ウイグル族の先祖と言われる）式蒙古文字『蒙古秘史』が
上梓された。

○ 構成：①チンギス・ハン22代先祖の系譜および伝説

②チンギス・ハンの伝説

③チンギス・ハンの息子オゲデイ（Ogedei）がハン位を継承してから12 年間の歴史事件

* 回紇式『蒙古秘史』はすでに伝承が途絶えた。現世に伝わっているのは，明朝の
漢字音で書き傍訳と総訳が加えた『元朝秘史』で，現在はこれを『蒙古秘史』
（以下で『秘史』とも呼ぶ）として研究対象にしている。

◎『秘史』はモンゴル歴史研究において最も重要な古典文献である上、モンゴル高原の古代遊牧民族の歴史文化、さらに漢学研究にとって必要不可欠な歴史文献である。ここ一世紀あまりはモンゴル、中国関係者だけではなく、各国の研究者によって研究され、国際的学術領域として「秘史学」は成り立っている。

(2) 研究概況

○中国：明朝洪武年代～

清朝，民国時代 重要な研究成果あり

○内モンゴル：1980年代以降 重要な成果

巴雅尔《蒙古秘史》(全三册，1980)

亦邻真《蒙古秘史：回鹘式蒙古文复原》(1987)

额尔登泰，乌云达賚《〈蒙古秘史〉校勘本》(1980)等

○モンゴル国：1940年代～

C. Damdinsuren 老モンゴル語で編集，翻訳した『秘史』，謝再善の中国語訳本あり(1956)

○ヨーロッパ及びアメリカ：1840年代～

ロシア正教北京宣教団の P. I. Kafarov, A. M. Pozdneev の研究，S. A. Kozin の研究。ドイツのモンゴル学・漢学大家 E. Haenisch，フランスの東方学大家 Paul Pelliot，アメリカ F. W. Cleaves の研究等

○日本：日本学者の研究成果

1902年，内藤湖南が『蒙文元朝秘史』を発表したことは，日本における『蒙古秘史』研究の皮切りとなる。1907年，那珂通世は不朽の訳注版の『成吉思汗の実録』を出版し，さらに1943年に筑摩書房によって新版し，各種の索引，文献目録，およびその他の従属文献を増加した。那珂通世の訳注の本は日本で出版したもっとも早い全文の訳注であり，『蒙古秘史』の研究の推進にとって大きな貢献をしていた。1939年，服部四郎と都嘎爾扎布は『蒙古秘史』巻1(文求堂)を共著し，音声学の視点から『蒙古秘史』を研究した。1941年，小林高四郎は『蒙古秘史』を翻訳した。1943年，白鳥庫吉は『蒙古秘史』に対して音訳し，『音訳蒙文元朝秘史』を出版した。1961年，山口修の『成吉思汗実録』が出版された。1963年，岩山忍の簡訳本『元朝秘史——成吉思汗実録』が出版された。また，村上正二の『元朝秘史——成吉思汗伝』全3巻は，それぞれ1970年5月，1972年4月，1976年8月に出版された。小澤重男の全訳本『元朝秘史全訳』(上，中，下三巻，風間書房，1984年，1985年，1986年出版)；『元朝秘史全訳続考』(上，中，下三巻，風間書房，1987年，1988年，1989年出版)。この6冊の著作の完成は，日本における『蒙古秘史』研究史上のピラミッドとなった。訳者は，40年間余りを通して，『蒙古秘史』の言語学方面の研究を基礎にし，『蒙古秘史』

に対して進めてきた純粋な言語学の角度の訳注である。

- 韓国，ハンガリ，チェコ，ポーランド，イタリア，トルコ，イラン，インドなどの国でも『秘史』の翻訳本および研究成果が出版されている。

2. 『蒙古秘史』に記載されるチンギス・ハンの祖先孛兒帖－赤那（Burte－qina）および後世の3つの異なる記載

◎明朝漢文版『蒙古秘史』は全部で282節があり，第1節の全文は以下の通り：
成吉思汗の根源。

奉天命而生的孛兒帖赤那（Burte qina），和他的妻子豁埃馬闌勒（Huwa maral），渡过大湖而来，来到斡难河（オナン川）源头的不儿罕合勒敦山（Burhan galdun）扎营住下。他们生下的儿子为巴塔赤罕（Bataqihan）。（余大钧訳）

*『秘史』は始めから終りまで難解な問題で充滿している。本報告は，そのうちの孛兒帖－赤那という人物のみ考証する。理由：孛兒帖－赤那は『秘史』の一人目の人物である。もしこの理解を間違ったら，チンギス・ハンの22代の祖先に対する理解，『秘史』全体の理解，さらにモンゴル人起源について誤解を招くことになる。

◎今までの学者は孛兒帖－赤那に対して3つの記載がある

(1) トーテム説

明朝の漢字音書き，傍訳と総訳を加えた『秘史』では，すべての人名に「名」「人名」「婦人名」と傍訳で書いたが，ただ孛兒帖－赤那の傍訳は「蒼い狼」，豁埃馬闌勒は「白い鹿」と書かれ，後に「蒼狼」「白鹿」と簡略化された。19世紀後半に西欧のトーテム崇拜（totemism）理論が現れた後，この「蒼狼白鹿」説は盛んになった。

(2) 西藏の金座王の息子であるという説

17世紀のモンゴル歴史文献には，孛兒帖－赤那は西藏金座王の息子であると記載されている。『蒙古源流』では，大臣が金座王を殺し，王の3人の息子は異郷に逃げ，末息子の孛兒帖－赤那は後に巴塔人（Bata）の那顔（Noyan）となった。

(3) 歴史実在人物説

モンゴル4大ハン国のうちの一つであるイリハン国（II）宰相拉施特（Rashid－al－Din）はペルシャ文で書いた『史集』（Jami'al－tawarikh，1307－1316）で，“关于蒙古人最初生活的详情，诚实可靠的讲述历史的突厥讲述者说，所有的蒙古部落都是从【某时】逃到额兒古涅－昆来的那两个人（捏古思和乞颜）的氏族产生的。那两个人的后代中有一个名叫孛兒帖－赤那的受尊敬的异密，他是若干个部落的首领，朵奔伯颜与妻子阿闌－豁阿以及若干其他部落都出自他的氏族。他有许多妻子

(哈敦)和孩子。名叫豁埃－马阑勒的长妻为他生了一个…。后来登临帝位的儿子，…。名叫巴塔赤罕。”

(「…すべてのモンゴルの部族はそこから生じた…尊敬される孛兒帖－赤那という政權の座に座する人はいくつかの部族の首領である。豁埃馬闌勒という順位の一番高い妻は…後から帝位に登った息子－巴塔赤罕を生んだ」)。

○他にも『多桑蒙古史』、『突厥世系』でも同様な視点をもつ。

3. 孛兒帖－赤那と豁埃馬闌勒は狼トーテムと鹿トーテムではない

○トーテムは異なる婚姻集団と氏族のシンボルである。オーストリア原始住民のトーテム信仰はもっとも典型と言われている。

○オーストリア原始住民のトーテム信仰の内容：①ある動物、植物、自然界物を本氏族のトーテムとみなし、狩猟や殺すことをしない、②シンボルであるトーテムで本氏族を命名する、③トーテム・タブー、④トーテム先祖の伝説、⑤トーテムの聖なる物、⑥トーテム聖地。

○トーテム制度の内容：①トーテム・タブーの条例、②トーテム繁殖儀礼、③トーテム巫術

◎モンゴル人の中では、トーテム信仰内容及び制度は存在していない。傍訳による憶測にすぎない。ある民族の深層文化を研究する際にとりわけその民族の一貫とした解釈を重視しなければならない。『秘史』～19世紀末のすべてのモンゴル語で書かれた文献では、トーテムに関する記載は全く見当たらない。

4. 孛兒帖－赤那は西藏金座王の後裔ではない

○17世紀のモンゴル歴史文献に孛兒帖－赤那が西藏王の後裔と記載されるのは、11世紀以降の西藏歴史文献上で西藏王はインド王の後裔とされることと関連性がある。『蒙古源流』で記載された孛兒帖－赤那が西藏王の末息子という歴史伝説と、西藏がインド王の息子であるという歴史伝説のどちらも、仏教を伝道するために生まれた伝説であり、歴史的な根拠がない。

5. 孛兒帖－赤那は額兒古涅－昆出山後のモンゴル部族の首領

◎以下の信憑性の高い記載が根拠となりうる。

①前述の拉施特『史集』は孛兒帖－赤那に関する記載について信憑性がある。

『史集』は宮廷欽定版であり、資料の出所は、①宮廷が収蔵する『金冊』およびほか保存資料、②各族の学者の口授資料である。

②阿ブ爾－哈齊－把阿秃兒汗 (Abul gazi) が著述した『突厥世系』では孛兒帖－赤那について、額兒古涅－昆出山時期の蒙古のハンは孛兒帖－赤那であり、彼は

「乞顔和郭爾羅斯」分枝の後裔であると明記している。著者本人は傑出した歴史学者、かつチャガタイ・ハンの直系子孫であり、先祖へたどる記憶も一部にあると考えられる。

③『多桑蒙古史』では8世紀半ばに孛兒帖－赤那がいくつかの部族の首領であると記載していた。

◎概して、以上ペルシャ語、突厥語、フランス語の三種類の著作は、孛兒帖－赤那に関して、トーテム化でも、仏教化でも、イスラム教化でもなく、現実的かつ可視的な記録であることがわかる。したがって、信憑性があると考えられる。

6. 結論

- (1) モンゴル高原では狼と鹿のトーテムが存在しているかもしれないが、孛兒帖－赤那及び妻の名前は、『秘史』で現れたほかの動物名で命名された人名と同様に人間の名前であり、トーテム動物名ではない。
- (2) 『秘史』では孛兒帖－赤那はチンギス・ハンの先祖であると言及したが、モンゴル人の先祖であると言及していない。この記述は正確である。モンゴル人の先祖とならば、紀元前2－3世紀あるいはもっと古い時期の匈奴に辿りつくことになる。これもまた、8世紀半ばの孛兒帖－赤那はトーテム崇拜の時代からかなりかけ離れていることがわかる。
- (3) 孛兒帖－赤那とその妻はトーテムと思われるようになったのは、明朝の『元朝秘史』の傍訳で人名として扱われていないところに起源した。これは間違っていると指摘しねばならない。
- (4) 孛兒帖－赤那は西藏金座王の後裔でもない。
- (5) 孛兒帖－赤那は、いくつかのモンゴルの部族を額兒古涅－昆出山地域から斡難河、克魯倫河、図拉河流域に引き連れた首領である。

参考文献：（一部のモンゴル語の文献は表示できないため、割愛させていただく）

《史记·匈奴列传》。

日・内田吟风等著，余大钧译《北方民族史与蒙古史译文集》，云南人民出版社2003年。

《魏书·蠕蠕等传》，卷一〇三。

《北史·突厥，铁勒传》卷九十九。

余大钧《蒙古秘史》，河北人民出版社2001年。

村上正二訳注『モンゴルの秘史』1チンギス・カン物語・平凡社1970，p9。

小林高四郎訳注『蒙古の秘史』，生活社1940，p26。

Qad-un<nd<s<n quriyanggui altan tob·i·，Улаанбаатар2002。

ШАРА ТУДЖИ·МОНГОЛЬСКАЯ ЛЕТОПИСЬ XVII ВЕКА·，СВОДН

БЫЙ ТЕКСТ, ПЕРЕВОД, ВВЕДЕНИЕ И ПРИМЕЧАНИЯ Н. П. ШАСТ
ИНОЙ ИЗДАТЕЛЬСТВО АКАДЕМИИ НАУК СССР МОСКВА · ЛЕН
ИНГ А Р А Д 1957. 21。

拉施特主编《史集》，商务印书馆 1983 年。

斯韦茨编辑《早期西方人的旅行，1748-1846》第 2 卷（1904）。

吕大吉《宗教学通论新编》，中国社会科学出版社 1998 年。

沈衛榮《再論〈彰所知論〉與〈蒙古源流〉》，《中央研究院歷史語言研究集刊》第七十七本，第四分册，2006，第 710。

布顿大师著《佛教史大宝藏论》，民族出版社 1986 年。

陈寅恪《彰所知论与蒙古源流（蒙古源流研究之三）》，《国立中央研究院历史语言研究所集刊》第二本第三分册，1931。

【清】耶喜巴勒登著，蘇魯格译注《蒙古政教史》，民族出版社 1989 年。

“Explanation of the Knowable” by 5 Phags-pa bla-ma Blo-gros rgyal-mtshan (1235-1280)
Facsimile of the Mongolian Translation with Transliteration and Notes by Vladimir Uspensky
with special assistance from INOUE Osamu Preface by NAKAMI Tatsuo, RESEARCH
INSTITUTE FOR LANGUAGES AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA, TOKYO 2006.

《法顯傳校注》，章巽校注，上海古籍出版社 1985 年。

乌兰著《〈蒙古源流〉研究》，辽宁民族出版社 2000 年。

ERICH HAENISCH <Eine Urga-Handschrift des mongolischen Geschichts-werks von Secen
Sagang(alias Sanang Secen)>, 1955 AKADEMIE-VERLAG · BERLIN, 7v-8r.

索南坚赞著，刘立千译注《西藏王统记》，西藏人民出版社 1987 年。

韩儒林《突厥蒙古之祖先传说》，《韩儒林文集》，南京大学元史研究室編，江苏古籍出版社 1985 年。

希都日古《17 世纪蒙古编年史与蒙古文文书档案研究》，辽宁民族出版社 2006 年。

阿布尔-哈齐-把阿秃儿汗著，罗贤佑译《突厥世系》，中华书局 2005 年。

《多桑蒙古史》，商务印书馆 1935 年。

（文責：賽漠卓娜，蔡毅）

アジア・太平洋研究センター主催シンポジウム

日 時：2012 年 10 月 27 日（土）

場 所：名古屋キャンパス M棟 MB12 教室

テーマ：新世代の日中関係論——日中国交正常化 40 周年に寄せて

報告者：與那覇 潤（愛知県立大学准教授）

家永 真幸（東京医科歯科大学准教授）

福嶋 亮大（文芸評論家）

司 会：宮原 佳昭（南山大学講師）

2012 年は日中国交正常化 40 周年にあたる。南山大学の大学生をはじめとする新世代の人々は、これまでの、そしてこれからの日中関係をどのように考えていくべきであろうか。本シンポジウムは新世代の人々を主たる対象とし、彼らが日中関係を考えるためのヒントを見出すことを目的として開催した。本シンポジウムでは、40 年前にはまだ生まれていなかった 30 歳代の若手研究者三名が日中の政治や文化について基調講演を行い、その後、来場者との質疑応答を交えつつ総合討論を行った。以下、三名の基調講演の要旨を掲載する。なお、総合討論の内容は、NHK「ジレンマ+」のサイトで公開されているため、こちらを参照されたい。

前編：<http://dilemmaplus.nhk-book.co.jp/talk/2122>

後編：<http://dilemmaplus.nhk-book.co.jp/talk/2244>

第 1 報告

民主化へのふたつの道？——「同病相憐れむアジア主義」の構想

與那覇 潤

拙著『中国化する日本』（文藝春秋、2011 年）で、「日本は明治以降、西洋化を推進・達成したと考えられてきたが、実は『中国化』してきたのではないか」という歴史観を提起したところ、読者から「日本が中国と同じになるとは思えない」「また、そうはなりたくない」という声が寄せられることも多い。しかし今日の日本では実際に、西洋型の議会政治・民主主義の機能不全が目立つ状況から、「むしろこれからは、日本の個性を活かした“日本型の民主主義”を作っていくべきだ」という風潮に傾くことは必ずしも珍しくない。

そこで提案されるのは、たとえば「参議院議員は、得票数ではなく人格や識見で選ぶ」といった議論だが、実はこれは明治・大正期に、津田真道や北原龍雄が行った提案と同じである。そのように人格・識見で政治家を選ぶという発想は、中国で実施されてきた「選挙としての科挙」（宮崎市定）と相似形をなすものであり、この意味で私は日本の近代化には「中国化」の側面がある、すなわち日本の民主主義には「中国的な民主主義」の要素が多く入っているものと考えている。

中国は今日も、一党独裁、議会の不在などから、「民主主義が存在しない国」と一般には思われている。しかし民主主義を「民意が政治に反映されること」と捉えるなら、カール・シュミットが唱えたように独裁と民主主義は矛盾しない（独裁と対立するのは「自由主義」である）。だとすれば、現代中国を「民主主義の不在」ではなく「中国的な民主主義」と捉えなおす問題提起には、その体制の当否とは別個に歴史認識としての意義があろう。

我々が普段考えている民主主義、すなわち西洋的な民主主義（議会制民主主義）は「一人一票」を理念とする。すなわち、一般民衆の投票権を平等にして、選ばれた議員が議会で自由な議論をおこなって法律を制定し、この法律を権力者が遵守すること（法治）を正統性の根拠としている。これに対し、宋朝以降の「中国的な民主主義」の理念は「一君万民」、すなわち君主（皇帝）専制のもと、君主が万民の望むところを実現することであった。そして、投票権ではなく官僚となるための科挙の受験資格を平等にし、君主も一般民衆も儒教思想を共有して、君主が儒教の道徳にかなった政治を行うこと（徳治）を正統性の根拠においたのである。現代中国の政治体制は、君主の地位が共産党に、儒教の地位が共産主義に、それぞれ置き換わったにすぎない。換言すれば、民意の担い手を「議会」に期待すると西洋化、「君主」（行政の長）に期待すると中国化、になるだけであり、かような「自由主義なき民主主義」を「中国的な民主主義」と呼ぶことができる。

ここで問題は日本のケースである。江戸時代の日本は藩主（貴族）が残った点では西洋に近く、武士が議会をつくらずに官僚化した点は中国に近い。明治維新以降、幕藩体制を壊し、憲法を制定して議会選挙を実施したのは一見すると「西洋化」ではあるが、近年の日本思想史研究者（原武史・住友陽文）の議論によれば、明治・大正・昭和にかけての政治動向は実は「中国化」、すなわち天皇を中心とする「一君万民」的な政治体制の確立過程であったと見ることもできる。

そう考えれば、日本も中国もいまだ政治面で十分「西洋化」できていないという点では、そう遠くない国同士とも言えよう。まして近年は欧米でも議会制民主主義の限界が指摘され、日本の識者もそれを踏まえて議会制の欠点を補う方法を模索している（東浩紀・谷口功一）。今後、日本の民主主義をどう再生すべきかを考える際、中国のことを他人事として見るのではなく、同じ悩みを抱えた国同士と考える、いわば「同

病相憐れむアジア主義」の視角に立ったほうが、より生産的な思考ができるのではなからうか。

第 2 報告

パンダから見た日中関係 40 年

家永 真幸

本報告では、パンダを通じて 40 年間の日中関係の変化、具体的には日本におけるパンダ人気の凋落という側面にとどまらない、日中関係の構造的変化やパンダをめぐる国際環境の変化を明らかにしたい。

パンダは 1869 年にダヴィド神父によって「発見」され、抗日宣伝のために宋美齡によって 1941 年にアメリカへ初めて贈呈された（「パンダ外交」の起源）ことで、「中国」の動物として認識されるようになったと考えられる。日本では、戦前はパンダにはほぼ無関心であったのに対し、戦後は映画『白蛇伝』（1958 年）や雑誌『アンアン』（1970 年創刊）など自発的に関心を深め、天皇訪欧（1971 年）の頃にはパンダがメジャーな動物として日本社会に認知されていた。日本の動物園へのパンダ誘致は、中華民国と国交のある間は成功しなかったが、「日中共同声明」調印後、ランラン・カンカンが来日して日本で爆発的ブームを巻き起こし、日中友好のシンボルとして認識された。これ以降、パンダの来日は、日中の関係が良好であるか、もしくは悪化した関係が改善されたことを示すバロメーターとなった。

内閣府の世論調査によると、「中国に親しみを感じるか？」という質問に対し、1978 年から 1989 年にかけては親しみを感じる人が多かったが、1989 年以降は半々で推移し、2004 年からは悪化している。一方、上野動物園の入園者数も、1972 年のパンダ来日以降、日中関係が良好な時期は増加しているのに対し、1989 年以降は減少している。ただ、2004 年以降も日中関係が悪化しているのに対し、来場者数はそれほど減少していないことは、新しい現象だと言える。

この間、パンダをめぐる国際環境が変化した。すなわち、パンダ保護のための国際ルールが整備され、1984 年にパンダがワシントン条約「附属書 I」入りして、国際取引が禁止になった。これにより、中国国内ではパンダが「国宝」と呼ばれることになる。これを受けて、新たなパンダ誘致手段として、1994 年に「グリーンディング・ローン方式」（和歌山アドベンチャーワールド）が登場し、いわゆる長期レンタル・パンダの時代へ突入した。

2008 年 4 月のリンリンの死亡によって、上野動物園は 1972 年以来初の「パンダ不在」となった。同年 5 月に胡錦濤が日中平和友好条約 30 周年で訪日した際、新たな

パンダのレンタルを発表したが、2004年以降、政治情勢を受けて日中間の国民感情対立が深刻化していたため、日本のネットやテレビは受け入れに批判的で、石原慎太郎都知事も消極的態度をとった。このように、日本はパンダを歓迎しないムードであったが、結果として2011年2月にリーリー・シンシンが上野に到着すると、日本のネットやテレビはパンダをもてはやし、パンダは日本社会に歓迎されたといえる。

この40年間で何が変わったかと言うと、まず「日中友好」の感情は間違いなく後退した。次に、パンダは「贈呈」ではなく「レンタル」方式になり、ビジネスの要素が強くなった一方で、「種の保存」という国際ルールが重視されるようになった。すなわち、日本と中国の政府が管理する「日中友好」演出の道具であったパンダの立場が、経済的動物とされたり、絶滅危惧種のシンボルになるなど、国際社会のなかでより複雑になったといえる。ただし、「日本と中国の政府間の関係が悪ければパンダは来ない」という点だけは、この40年間で変わっていない。

第3報告

東洋の「復興文化」

福嶋 亮大

第二次世界大戦後の東アジアでは日本人と中国人が相互に交流する機会が制限され、1970～80年代の日本では外交におけるパンダ、サブカルにおける香港、美術におけるシルクロードなどの美化された中国イメージが先行していたが、1990年代以降今日に到るまでのあいだに、そうした甘美なイメージは領土紛争を含む物理的接触のなかであえなく破壊された。だが、暴力的な現実がせり上がる一方、経済的には「アジアの時代」などと言われる時代だからこそ、東洋の文化的価値を再発見し、それをパッケージに仕立て、未来志向的なイメージを再構築することが重要であろう。その一つとして提起したいのが、東洋の「復興文化」である。今回は主として日本の文化に注目する。

もともと日本では、源平合戦後の平家物語、日露戦争後の近代文学、第二次世界大戦後のサブカルチャー（アニメ・漫画）などに代表されるように、大きな戦争や災厄に続く一種の「事後処理」として新しい文学運動が起こる傾向がある。日本の文化にダイナミズムを与えてきたのは、喪失からの「復興」ではないかと考えられる。

例えば、呪歌・讃歌的要素をふんだんに含んだ柿本人麿の長歌は、壬申の乱の「戦後」に絶頂を迎える。国家の混乱に続く「復興期の詩人」としての人麿が、日本文学の詩の進むべき方向性を示したのである。あるいは、源平合戦は一族郎党がほぼ滅亡するという日本では珍しいケースであり、その稀に見る存在論的殲滅＝滅亡体験を受

けて、『平家物語』は一種の鎮魂文学として日本の文学史に刻み込まれた。逆にずっと時代が下った日露「戦後」の近代文学は、ある意味で縮小傾向に振れたケースである。文明開化のプログラムが一段落ついた日露「戦後」の時空においては、文学における陰鬱な「気分」が突出し、社会的・公的な関心につながった市民を描くことができなくなり、社会や国家とは別の領域（不機嫌→狂気）に文学は吸収されていった（夏目漱石『それから』など）。

その一方で、第二次世界大戦後のサブカルチャーは、近代文学とは違う形での「戦後文化」だと考えられる。荒々しい自然を抑圧したディズニーの「衛生的」な記号を導入した手塚治虫は、「戦後」の廃墟に記号のユートピアを建築した。これは、日本的現実（＝自然）を抑圧し、未来の人工世界を仮構しようとする復興思想である。その一方で、宮崎駿はディズニー＝手塚の反自然的世界が追い出した「自然」を再び復興するのであり（「もののけ姫」「崖の上のポニョ」など）、この復興の連鎖こそが日本のサブカルチャーを特徴づけている。

村上春樹は震災後の2011年のカタルーニャ国際賞スピーチにおいて、日本的な「無常」について語ったが、果たして作家としての村上は「無常」を書いてきたのだろうか。もし彼の作品に力があるとすれば、それはむしろ資本主義社会における無数の具体的あるいは抽象的喪失からの「復興」を書いたからではなかろうか。日本的な「無常」のような外国人受けする言説に乗りかかっているのは、東洋文化の真の動力は見えてこない。喪失の後（＝跡）を穴埋めしようとするとき、我々の文明は最も活発に動き始めるのであり、しかも復興期は単なる「復元」に留まらず、むしろ新しいものが侵入してくる活気溢れた時間帯にもなり得る。ここにこそ、我々の文明の力強さとしたたかさ、ダイナミズムを見るべきである。

（文責：宮原 佳昭）

アジア・太平洋研究センター主催, アジア学科共催講演会

日 時：2012年11月9日（金）

場 所：名古屋キャンパス N棟3階 社会倫理研究所会議室

テーマ：Pesantren, Santri, Puisi (「イスラム教育施設, サントリ, 詩」)

報告者：Acep Zamzam Noor (イスラーム詩人)

通 訳：森山 幹弘 (南山大学教授)

*講演はインドネシア語



講演会は予定通り17時から開始し、最初に講演者の紹介を森山幹弘（南山大学外国語学部アジア学科）が行った後、およそ1時間の講演が行われた。参加者とのダイアログの時間を十分にとりたいという講演者の意向で、講演の後、およそ1時間の質疑応答を行い、活発な議論が行われた。参加者は南山大学の学生を中心に15名の参加があった。うち一般の参加者が2名であった。

アチェップ・ザムザム・ヌール氏は、落ち着いた静かな語り口で参加者の学生たちの様子を観察しながら、講演を行われた。講演内容の概略は次のとおりである。

インドネシアには、各地にイスラム教育を行う伝統的なプサントレンと呼ばれる教育施設が古くからあり、そこでは主宰する指導者キアイの下で生徒サントリが、寝食を共にしながらイスラムだけでなく、倫理、寛容の精神、交際などあらゆる生きる術を学んでいる。彼らサントリたちはアラビア語の文法から始め、イスラム法を段階的に学んでいくが、その媒体として詩や歌などの文化を学んでいく。アラビア文学の輝かしい伝統は、インドネシアの様々な土地で吸収され、土地の伝統文化と融合していき、インドネシアの各地で花開いた。スマトラでは多くの詩人がマレー語の詩の伝統を築き、ジャワ地方ではジャワ語、スンダ地方ではスンダ語によって詩作の発展をみ

た。それらの詩の特徴である神秘主義的な内容は、最も長い伝統を持つマレー語圏だけでなく、各地の文学伝統の中に吸収されて発展していった。近代文学が現れる 20 世紀になると、なかでもアミール・ハムザという名の詩人が、自己の内省と何世紀にもわたって発展してきたプサントレンを基盤とするイスラム神秘主義的な詩の伝統を融合してムラユ語で表現した。それは、その後のインドネシア文学において重要な潮流の一つとなり、インドネシア独立後の多くの詩人たちに影響を与えた。

プサントレン出身の詩人たちの中には、スーフィズムを取り込んだ作風を特徴とする詩人たちが活躍してきた。神への畏怖とともに恋慕の気持ちが表現された精神性豊かな詩は、独立後のいつの時代でもインドネシアの文学史において一定の位置を保ち続けてきた。

スハルト体制が終わり、改革の時代以後には、それまでのスーフィズムや神秘主義を表現するイスラム的な詩だけでなく、様々な詩が創作されるようになってきた。伝統的なイスラム教育機関であるプサントレン出身の詩人だけでなく、都市出身の詩人たちが、とりわけ女性の詩人や文学愛好者が新しいコミュニティーを形成して文学活動を行うようになってきている。例えば、「フォーラム・ペンの輪」などのようなコミュニティーはインドネシア国内だけでなく、国外にも支部を持ち、グローバル化の流れのなかでポップ・カルチャーとして、イスラム的な要素を持った詩、短編、小説を創作している。そこには、イスラムの要素が溶解し、文学に溶け込んで新たな潮流を生み出したと言える。

(文責：森山 幹弘)

アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2012年11月20日（火）

場 所：名古屋キャンパス J棟1階 特別合同研究室

テーマ：日本企業のR&D海外移転は何故成功しないのか？

～マレーシアの日系企業の実証的研究から～

報告者：岡本 義輝（南山大学アジア・太平洋研究センター客員研究員）



1) 問題意識

近年、電機・電子産業における多くの日本企業が、自社の海外工場で組み立てる商品に関し、製品開発のかなりの部分をマレーシアの現地子会社に移管している。しかし、大半のマレーシア現地子会社では、R&D部門で日本人技術者が約1割を占め、彼らが中心となって基本設計と管理を行っており、未だ現地人技術者が主体となる（ローカル化が進んだ）体制とはなっていない。

2) 分析枠組みと調査結果

本報告では、上記の問題意識（以下の表1①に再掲）をふまえ、表1の②および③について簡単に説明した後、報告者が実施したアンケート調査の結果をふまえて表1の④で示された要因分析を行う。

日本企業のR&D海外移転は何故成功しないのか？
～マレーシアの日系企業の実証的研究から～（岡本 義輝）

表1 本報告の概要

①問題意識		②先行研究		③現状分析:採用政策、処遇およびローカル化					
日系企業R&D コモディティー商品の開発はマレーシア。しかし基本設計とマネージメントは日本人でローカル化が進んでいない。		Bartlett & Goshal: 多国籍企業3類型 藤本: 製品開発の成功		企業	奨学金	インターンシップ	採用	処遇	ローカル化
				外資系(M社)	大学1-2年の優秀者に奨学金	3年で10週間の工場実習、4年で3ヶ月の卒業研究	半年間 +十分観察し採用(1/3)	入社5年 5,000リンギ	米国人比率 約1%
				日系11社	なし	なし	1~2日の面接	入社5年 3,500リンギ	日本人比率 約10%
④要因分析: 在マレーシア日系R&Dのローカル化が何故進まないのか									
アンケート	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回				
質問項目(要因)	ローカル化のメリットはある	格差ある処遇しない と良い技術者は集まらない	格差ある処遇の導入状況	原因: 本社は改革の評価× 現地: 改革に保守的	中央集権的な海外R&D統治				
技術者賛同	85.0%	96.3%	12.5%						

3) 先行研究

多国籍企業の類型を論じた代表的な研究として Bartlett & Goshal があげられ、R&Dと関わる「知識と開発の管理」についても、表2に示された形で類型化を行っている。

なお、報告者の観察によれば、2000年頃以降の電機・電子における日本企業のR&D体制の実態は、表2に示された4つの類型のうち「②グローバル型」に近いと考えられるが、実際には、表2の矢印部分

表2 多国籍企業3類型とトランスナショナル企業(理論と実態)

組織の特徴	①マルチナショナル型(分権連邦型)	②グローバル型(集権ハブ型)	③インターナショナル型(調整連邦型)	④トランスナショナル企業(トランスナショナル構造)
資源の能力と配分	分散型で国ごとに自立	中央集権型でグローバル規模	コア能力の源泉は中央に集中させ他は分散	分散・相互依存専門性
海外事業の役割	現地の機会を利用	親会社の戦略を実行	親会社の能力を適応させ活用	統合された世界的事業規模に向けた各国ユニットによる分化した貢献
知識の開発と普及	各ユニット内で知識を開発して保有	中央で知識を開発して保有	中央で知識を開発し海外のユニットに移転	共同で知識を開発し世界中で共有
事例	ネスレ、チバ、ガイギー、エレクトロラックス	トヨタ、三菱、NEC、LG、大宇、現代	GE、GM、IBM、コカ・コーラ	欧州フォード・モーター、オーストラリア・エリクソン

出典: 古沢昌之(2008)、吉原英樹訳(1990)p.88; Bartlett & Ghoshal、ジェイB・バーニー(2003)

↑ 本論文の主張: <理論が実態を十分説明できていない>

②グローバル型の知識の開発と普及は二極開発体制である

- 1) 第一極開発センター(本国: 日本) 中央で知識を開発して保有
- 2) 第二極開発センター(海外: マレーシア) 海外のユニットで知識を開発して保有

で示された「いわば“二極開発体制”」がより現実に近いと考えられる。たとえばテレビの場合、第一極開発センター(日本)と第二極開発センター(マレーシア)の両者が独立して知識を開発・保有し、前者が「液晶テレビ」の製品開発を、後者が「ブラウン管テレビ」の製品開発を行う体制となっていた。

以下では、このような“二極開発体制”を念頭に、マレーシア子会社においてローカル化を促すためのポイントについて考察を行っていきたい。

4) 外資系・日系R&Dの採用政策と処遇の違いとローカル化

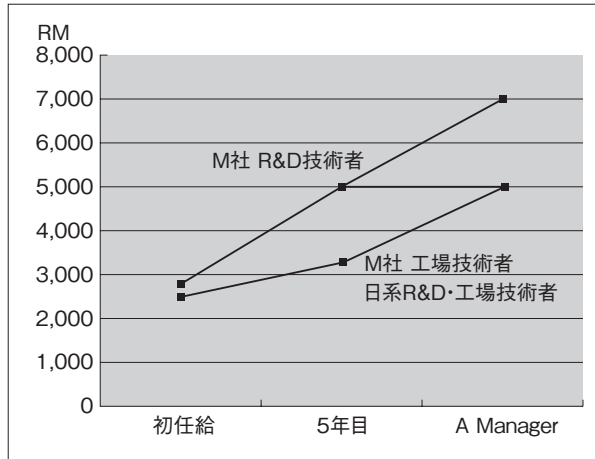
M社は、大学1~2年の成績優秀な学生に3~4年次に奨学金を与える。3年次のインターンシップ、4年の卒業研究を技術部門で行わせる。約半年の観察期間を経て採用する。採用の1/3はこの方法である。日系は1~2日の面接だけで採用している。

初任給，5年目給与，管理職給与を図1に示す。M社のR&D技術者の給与は5年目で日系R&D技術者より1.5倍位高い。

つまり，日系と外資系のR&D技術者の「採用政策」と「処遇」に大きな違いがあり，日系R&Dが優秀な技術者を採用できていない。

ローカル化を表3に示す。日系とM社の本国人比率の2003年と2008年の調査結果を比較したものである。M社の本国人（米国人）技術者は，わずか12人で，しかも管理職ではない。また，その比率は1.2%である。日系の日本人比率は8.7%で5年前（2003年）の11.4%に比べ2.7%の減少でやや改善している。

図2に日系・外資系R&D部門の組織概念図を示す。日系の上位11.4%には基本設計とマネジメントを行っている日本人がおり，その下には製品設計と補助設計を行うローカル技術者という構成になっている。一方，外資系は基本設計とマネジメントを華人技術者が行っておりローカル化が進んでいる。



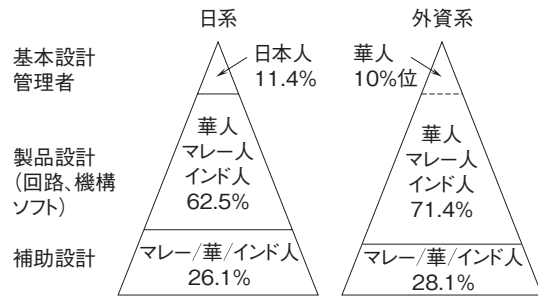
出所：筆者作成

図1 初任給・5年目給与・管理職給与

表3 本国人比率

項目	日系		外資系	
	日系 11 社	日系 11 社	M社	M社
調査年月	2003年12月	2008年7月	2003年3月	2008年7月
総数	1,148	1,110	350	997
本国人	131	97	3	12
比率	11.4%	8.7%	0.9%	1.2%

出所：筆者調査



出所：筆者調査

図2 日系・外資系R & D部門の組織概念図

5) 日系R&Dが前記 4) の違いを何故、改革しないのかの要因分析

5-1 調査1「ローカル化のメリット・デメリット」(2010年7月)

「Q1：日本人技術者のローカル化はメリットあり」の設問に対する回答を表4に示す。「5 そう思う」「4 ややそう思う」を加えた90%の回答者がメリットありと回答している。

表4 ローカル化のメリットあり

回答	%	人
5 そう思う	37%	11
4 ややそう思う	53%	16
3 どちらともいえない	0%	0
2 あまりそう思わない	10%	3
1 そう思わない	0%	0
計	100%	30

5-2 調査2「日系R&Dが良い技術者を採用するには」(2007年3月)

「1 格差ある処遇の導入」についてのアンケートを行った。この設問で「Q1：格差ある賃金体系を導入しないと優秀な技術者は集まらない」の質問に96.3%が、また「Q5：優秀な技術者には昇給と昇進のペースを速めるべき」の質問に100%が同意している。

5-3 調査3「格差ある処遇の導入状況は？」(2007年9月)

調査3のアンケートは、権限のある16人の社長(MD)とR&D部門長に、記述式の質問票で行った。アンケート「Q1：格差ある処遇の導入と今後の導入見込み」をまとめる

表5 格差ある処遇の導入状況

<導入に対して>			<今後の導入見込み>		
回答	人	%	回答	人	%
肯定的	2	12.5%	導入する	2	12.5%
否定的	14	87.5%	導入検討	2	12.5%
計	16	100%	変わらず等	12	75.0%
			計	16	100%

と次の通りである。格差ある処遇の導入に対して、肯定的が2人(12.5%)で、否定的が14人(87.5%)である。また、今後の導入見込みは、導入する2人(12.5%)、導入を検討する2人(12.5%)、徐々に改善・一部実施・余り変わらず12人(75%)である。

調査2のアンケートでは「格差ある処遇の導入」は96.3%の人が賛同しているが、実際の導入は12.5%である。日系R&Dは一般論では賛成だが、自社の問題としては導入しない、いわば「総論賛成、各論実行せず」の状態であることが明らかとなった。

5-4 調査4「『総論賛成、各論実行せず』の要因」(2008年7月)

調査3の「総論賛成、各論実行せず」の要因を究明するために、調査4のアンケートを行った。その結果、要因の1位は「Q1：本社はR&Dの改革を評価しない(売上、利益、品質、納期のみ評価)」で27%、2位は「Q4：日系企業のMDは保守的で改革しない」で23%、この2つで50%を占めている。

5-5 調査5「国際経営戦略の視点から」(2010年10月)

Bartlett & Goshalの「多国籍企業3類型とトランスナショナル企業」の視点からアンケートを行った。「日本企業と日本企業R&Dの国際経営戦略はどれに近いか」について「現状」と「将来あるべき姿」を、表6の①～④のいずれに該当するかを求めた。

表6の<全員>に示すように現状の日本企業の国際経営戦略は82.4%、日本企業R&Dは56.5%の人が「②グローバル型」と回答している。

表6 日本企業と日本企業R&Dの国際経営戦略<全員>

国際経営戦略	日本企業		日本企業R&D	
	現状	将来	現状	将来
①マルチナショナル	2.9%	2.9%	4.3%	0%
②グローバル	82.4%	2.9%	56.5%	0%
③インターナショナル	14.7%	47.1%	21.7%	34.8%
④トランスナショナル	0%	47.1%	17.4%	65.2%

<技術者>

国際経営戦略	日本企業		日本企業R&D	
	現状	将来	現状	将来
①マルチナショナル	0%	0%	8.3%	0%
②グローバル	84.6%	7.7%	58.3%	0%
③インターナショナル	15.4%	46.2%	8.3%	33.3%
④トランスナショナル	0%	46.2%	25.0%	66.7%

出所：「国際経営戦略アンケート」結果にもとづき筆者作成

6) まとめ

本報告では、日本企業マレーシア子会社のR&D部門において、現地人材の登用(ローカル化)が進んでいないという現状を確認するとともに、報告者が行ったアンケート調査にもとづき、その要因について考察した。

その結果、特に外資系企業と比較した場合、日本企業のローカル化が遅れている要因として、以下の3点が確認された。

- ① 外資系は、大学1～2年の成績優秀者に奨学金を与え、その学生にはインターンシップ、卒業研究を企業で実施(約半年)。日系は奨学金を出していない。
- ② 外資系は、採用の1/3を半年位十分観察して採用しているのに対し、日系は1～2日の面接で決めている。
- ③ 入社5年目の給与を比較すると、外資系は日系の1.5倍と高い。

なお、日系企業において、外資系R&D並みの採用政策と処遇が実現できていない要因としては、日本本社の海外R&D活動に関する企業統治が中央集権的であり、海外R&D活動を改革する必要性についての理解が不十分であるという点が考えられる。

(文責：岡本 義輝)

アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2012年11月27日（火）

場 所：名古屋キャンパス J棟1階 特別合同研究室

テーマ：平安時代初期物語文学におけるアジア叙述

——『竹取物語』と『宇津保物語』を中心に——

報告者：頼 振南（台湾輔仁大学外語学院日文系教授）



周知のように、古代日本は遣隋使、遣唐使、遣渤海使、渤海使を通じて中国大陸から大量の文化を受容した。朝鮮半島の百済からも漢字・儒教・仏教・医・易・暦などの文化が伝来し、五経博士、易・暦・医博士も渡来している。正式な使節団を派遣するほか、貿易船を通じてさまざまな文物が交易されたと思われる。日本の平安時代初期の物語文学『竹取物語』における「火鼠の皮衣」難題譚に出てくる「唐人船」はその一例である。さらに『竹取物語』における五つの難題譚を検証してみれば、「唐人船」のほかに天竺の「仏の石の鉢」、「東の海の蓬萊といふ山」、「龍の頸に五色に光る珠」と「燕の持たる子安の貝」などのものが示され、中国大陸以外、特にインドに存在しそうなものが記載されている。これらの記載を見ると『竹取物語』のかぐや姫は、中国とインドを中心とする、世界中から求婚の宝物を求めているかのようである。こうした『竹取物語』の作者の知識的な背景には、古代日本に伝来した外来文化が中国文化を中心に受容されていた事実があると考えて間違いはない筈であるが、それと同時に中国周辺の文化も一緒に受容されていたとも言える。要するに、インド文明と中国漢字圏文化に包括されるアジアの文化痕跡を、古代日本において確認することができるわけである。今回の発表では、学問的素養と知的好奇心に恵まれた男性作家によって創作された平安時代初期の物語文学に視点を据え、物語文学の中で「アジ

ア」が如何に叙述されているかを考察した。特に『竹取物語』における五つの難題譚と『宇津保物語』における秘琴伝説を取り上げて検討した。

(文責：頼 振南, 蔡 毅)

本講演の主な内容は、特別寄稿論文“平安時代初期物語文学におけるアジア叙述——『竹取物語』と『宇津保物語』を中心に——”として、本書 pp.1-21 に掲載されています。

アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2012年12月14日（金）

場 所：名古屋キャンパス J棟1階 特別合同研究室

テーマ：海を知れば聖人が分かる——近世東アジア使節往来とその詩作

報告者：廖 肇亨（台湾中央研究院教授，東京大学客員教授）



古来、中国は海洋と非常に密接な関係を結んできた。とりわけ明清以降、朝貢貿易体制が確立すると、東アジア各国との海洋貿易が盛んになり、文化的な交流も深まっていく。そしてこのことは、文学作品にも反映されていった。特に「海洋詩歌」と呼ぶべき作品群は、悠久の中国文学史においても異彩を放っており、十分注目に値する研究対象だと言える。

中国の海洋詩歌において、使節の詠んだ詩は大変重要な地位を占めている。『春秋左氏伝』以来、詩を詠む伝統は脈々と受け継がれ、後世の外交使節にとっても作詩は当然不可欠な行為であった。そして近世、東アジアの文化交流において、外交使節は国を繋ぐ重要な媒介の役目を担うようになる。その一例に、琉球冊封使たちがいた。大海の荒波を越えて異国に赴いた彼らは、危機に溢れた航海の様子や異国で見聞した事物を細々と書き留めていったのだが、これらの記述こそが、他の文献に見られない重要性を有するのである。

東アジア各国の外交往来において、漢詩は常に重要な地位に置かれていた。使節の詩歌とは、単に風土や人情を記録するだけではなかった。それは自己と他者に対する認識を、時に近世東アジア地域の秩序やその世界観を、あるいは新旧の価値概念の対立と融合の様相を、さらには商業活動や社会の実情をよく体現しているのである。

そうした使節による各種記述の中、明・清代の琉球冊封使が果たした意義は大き

い。陳侃（1489-1538）以降、郭汝霖（1510-1580）や蕭崇業（?-1585）に到るまで、明代の使節による描写は、文化的に特色溢れた論述を展開しており、伝統的な儒学・詩学の内容をより深化させ、ある種の革新をもたらした。海の儒学と呼ぶべき一連の論述は、明代の琉球冊封使によって多大な発展を遂げていく。

江西陽明学に属する儒者だった郭汝霖は、嘉靖年間に琉球冊封使として赴いたのだが、その時の航海の体験を「洋中折舵歌」に詠みあげている。海上は、郭汝霖にとって生き抜く知恵を試す、陽明学が説くところの「生死道場」となった。海上で船の舵が壊れる苦難に見舞われた一行は、ただ波風に従って進むほかなかった。苦難を乗り越え、辛くも九死に一生を得たという経験は、郭汝霖にとって、「聖人の道を理解し、自然と実践する（契入聖道）」という儒教の伝統的な思想を一層深めるための契機となったのだ。

また、万暦年間に琉球冊封使となった蕭崇業は、自著の『使琉球録』にて、海を眺めることは儒学の理解に繋がるという考えを示した。即ち、万物をその身に収める大海の特質に端を発して、「海を知ることとは聖人を知ることと繋がる」と主張したのである。これぞ、海の儒学の本質だと言える。何故なら、その語は孔子が桴いかだに乗って海に出たという故事と呼応しており、また明代陽明学に於ける、生と死の問題を考察する思想を一層深化させたものだったのだから。

明代の冊封使は、種々の煩雑な儀式の場に限らず、日頃の举止進退も、他者に薫陶を与えるような「徳」を備えていなければならなかった。使節を務めた陳侃や蕭崇業、夏子陽は、琉球より献上された金銭を返却したとして、『使琉球録』に記録されている。その行いは彼らの高潔な精神を示すが、その実こうしたやり取りは、多分に演出的な性格を有していたのだ。

清代には、使節による記述に新たな展開が見られるようになる。それは、当時の学術風潮と一脈通じるものがあつた。例えば康熙年間の徐葆光『中山伝信録』を見れば、『使琉球録』とは性格が大きく異なり、現地の地理関連の記述に重点が置かれている。さらに、乾隆年間の周煌（?-1785）『琉球国志略』もこの流れに連なつた著作である。これらの著作は、清代考証学の隆盛に影響を受けた可能性が極めて高い。

あるいは、乾隆・嘉慶年間の使節を取り巻く文学活動から、当時の詩学の高潮を読み取ることもできる。趙文楷（1761-1808）と李鼎元（1750-1805）は、嘉慶帝の勅諭を拜命して嘉慶五年に琉球冊封使として出発したが、出航に際して友人たちから実に二千首もの詩を寄せられたという。文人たちにとって、この派遣が如何に重要なイベントであつたか、当時の文学活動が如何に活発であつたかが分かるエピソードだろう。送られた詩の内容は多岐にわたり、航海の様子をはじめ、海賊を掃討するさま、異国で見聞する事物など、琉球使節ならではの記述で溢れている。そして、使節を務めた趙文楷の「渡海放歌行」と李鼎元の「後航海詩六首」は、中国の海洋詩学の進展

に貢献した作品と言える。二人は琉球より帰朝する途上、蔡牽（1761－1809）という海賊一味の襲撃に遭い、激しい戦闘を繰り広げた。後に李鼎元は『使琉球録』に記述を残したが、それは琉球冊封使による記述の中でも珍しい、戦争の記録である。また、異国たる琉球について、李鼎元は現地の様子をこと細かに観察していた。自然景観や動植物、風土や習慣、何であれ自ら進んで見聞せんとする姿からは、清代中期の知識人による世界観や価値観が読み取れる。さらに注目すべきことに、李鼎元は琉球に派遣されている間、琉球と日本の交流についても注意を払い、一定の警戒を怠らなかった。琉球で流通していた銅銭や宝刀、果ては宗教や信仰などの事物から、琉球側は明言を避けていても、日本との確かな繋がりを看破していたのである。清朝の冊封使たちにとって、琉球は日本を観察する重要な窓口であった。

このように、明清代の海洋詩歌の作品群と使節による記述は、近世東アジア世界の世界観や秩序の構造および変化をよく捉え、表している。そしてこうした記述が、多くの人々のイメージの拠り所となっていくとも言える。海洋詩学は東アジア漢字文化圏において、広く深い影響を持ち、非常に豊富な内容を供する分野であり、それ故に今後一層の研究が望まれるのである。

（文責：廖 肇亨，蔡 毅）

アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2013年2月22日（金）

場 所：名古屋キャンパス R棟1階 会議室

テーマ：アメリカにおける調査報道の現状と課題

報告者：立岩 陽一郎（NHK国際放送局専任記者）



立岩 陽一郎氏

本講演の主な内容は、特別寄稿論文“米国ジャーナリズムの新たな潮流：非営利化する調査報道”として、本書 pp.22-40 に掲載されています。

アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2013年2月28日（木）

場 所：名古屋キャンパス J棟1階 特別合同研究室

テーマ：中国の経済発展と地域間格差：逆U字は期待できるか

報告者：陳 光輝（神戸大学大学院国際協力研究科教授）



1. 中国の地域間格差

1978年の改革開放以降、中国経済は急速に発展したが、その発展はさまざまな格差の問題を引き起こすことになった。なかでも早くから指摘されてきたのが発展の地域間格差、とりわけ沿海・内陸間格差の問題であった。日本の都道府県にあたる省レベル地域の一人当たりGDPでみれば、改革開放が始まった当時、いずれも沿海に位置する3つの直轄市：上海、北京、天津が突出した地位にあり、その他の地域は大差なかった。格差の問題は直轄市とその他地域の問題だったのであるが、改革開放後、広東省を皮切りに沿海の「その他地域」が急速に成長した。それら地域は3直轄市にキャッチアップして現在の3大集積：珠江デルタ、長江デルタ、環渤海地域に発展し、沿海部では格差が縮小したのであるが、半面、その成長は大きな沿海・内陸格差をもたらすことになり、1990年代以降、ジニ係数、変動係数、タイル尺度といった不平等尺度で測った一人当たりGDPの省間格差は拡大を続けた。

2. 逆U字は期待できるか

ところが近年、地域間格差の象徴であったこの省間格差が低下を続けている。中国の人口統計は地域によっては出稼ぎなどの人口移動を反映せず、人口移動が盛んに

なって以降、省レベル一人当たりGDP、そしてそれから計算される省間格差は誤差が大きくなっているという問題が存在したが、各省人口が移動をより反映した常住ベース（原則半年以上の居住）で統一された2005年以降のデータを使い、第二のタイル尺度、あるいはMLD（mean log deviation）とよばれる尺度で2011年までの格差を計算したところ、その値は低下を続け、2011年には改革開放開始時点とそう変わらないレベルになっていた。また、この低下はほぼ沿海・内陸間の格差縮小によるものであった。二つの所得分配状況（改革開放開始時点と2011年）を比べてどちらの不平等が大きいかを判断することは難しい問題を含み、尺度によって判断が異なることも稀ではないが、省間格差、沿海・内陸間格差が有意に低下したことは間違いない。

地域間格差についてはウィリアムソンの逆U字仮説が知られている。経済発展の地域的偏りは初期段階では避けたいが、ヒト・モノ・カネの自由な移動、すなわち市場は初期段階ではともかく、いずれは格差を縮小させる力を持つという仮説である。省間格差、沿海・内陸間格差の値は低下したが、地域間格差の縮小は必ずしも実感にそぐわないところもある。それはなぜなのだろうか。格差はこのまま逆U字型に低下すると期待していいのだろうか。

3. 省間格差はなぜ縮小したのか

地域間格差は所得が平均より低い地域が平均以上に成長すれば、あるいは所得が平均より高い地域が平均以下でしか成長しなければ小さくなり、格差の縮小幅はそれら地域の所得と成長率、そして（格差は通常、所得を人口でウェイトづけして計算するために）人口に依存する。このことに着目し、報告者がタイル尺度（MLD、2005～11年）の低下要因を定式化して計算したところ、格差低下の80%近くは内陸の成長ではなく沿海の不振、具体的には上海、北京、広東、浙江の成長率が低かったことにより説明された。この時期、成長率は平均的には内陸が沿海を上回り、かなりの高成長を記録した内陸地域も少なくなかったが、成長率や所得、人口の平均との乖離幅は上海、北京等ほど小さくなく、格差の縮小に対するインパクトは大きくなかった。

4. 格差縮小は続くのか

一方、ここ数年の内陸の状況に関しては、以下の2点が観測された：

- (a) 内陸の平均成長率が沿海を上回るようになった2000年代後半、内陸地域では投資（総固定資本形成）の対GDP比が急速に高まり、2008年以降は60%を超えていた。
- (b) 2010年の地級市（省のひとつ下の行政単位）データからは、経済密度（面積当たりGDP）が高い産業・都市集積が内陸に広がっているようには見えなかった。

望まれるはおそらく沿海既存集積の不振ではなく、その産業・都市集積や都市ネットワークがグレードアップし、かつ内陸部にも集積やネットワークが形成されて、沿海・内陸格差や都市・農村格差が縮小していく姿であり（地域間格差の重要な構成要素である都市・農村格差の縮小に都市の成長が必要であるという説は有力であり、中国でも都市集積が発展した長江デルタ地域で都市・農村格差が縮小したという報告がある）、そのとき、格差の縮小は実感を伴うものになりそうである。しかし現状、上記の2点(a), (b)から、2000年以降の内需振興政策やリーマン危機後の景気対策が投資主導型の内陸成長をもたらしたのではないかと推察されるが、それが今後望ましい姿へとつながっていくかどうかは見通しにくい。中国の地域構造はどう変化していくのか。現状分析を深めると同時に今後の動向を注視していきたい。

（文責：林 尚志）

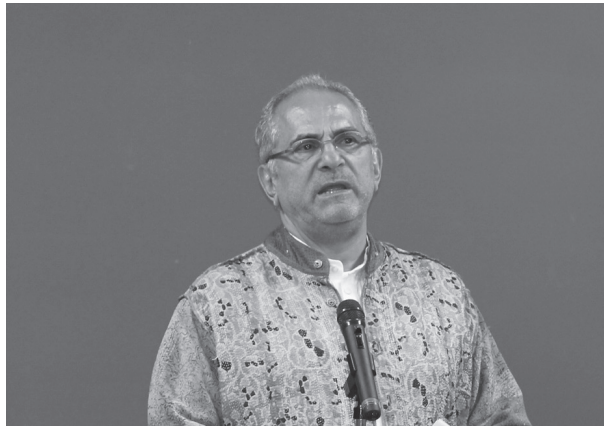
外国語学部アジア学科主催、アジア・太平洋研究センター 共催講演会（特別講演会）

日 時：2012年11月27日（火）

場 所：名古屋キャンパス M棟1階 MB12教室

テーマ：Post Conflict Countries: From Conflict to Peace and Prosperity
——The Case of Timor-Leste

報告者：ジョゼ・ラモス＝ホルタ（前東ティモール大統領）



前東ティモール大統領ラモス・ホルタ氏は、ノーベル平和賞受賞者（1996年）としても名高い。今回の講演会は学長室の企画であるが、昨年（2011年）10月に講演されたイジリオ・コエーリョ東ティモール大使のお計らいにより、実現した。

ラモス・ホルタ氏は日本占領末期の1949年にディリ（現在の首都）で生まれたが、東ティモールは戦後再びポルトガルの植民地支配下に置かれた。政変でポルトガルが植民地を「解放」するときに、東ティモールはインドネシアの軍事侵攻を受け、1975年に強制併合された。海外にあったラモス・ホルタ氏は東ティモール独立革命戦線の代表・スポークスマンとして東ティモールの惨状を世界に伝えるとともに、紛争の平和的な解決に尽力した。ノーベル平和賞はその貢献が評価されたもので、東ティモール住民の精神的指導者ペロ司教との同時受賞であった。インドネシアから分離後は東ティモール国連暫定行政府の外務担当閣僚を務め、独立後は首相、大統領を歴任した。

東ティモールは紛争を経て独立したが、その10年を振り返り、平和と繁栄の構築には何が鍵となるのか、講演では、ふたつの点が強調された。

一つ目は、国家建設における指導者の責任の重たさである。東ティモールは「ゼロ

からの出発」であった。急速に発展してはいるが、平等な分配や貧困の解消はできていないし、引き続いてインフラ投資や貧困対策のための支出を積極的に行わなくてはならない。幸い、2006年からの石油収入により国家予算が7倍にも増加した。この地からの恵みを公正に活用するために、政府が安易に多額の資金を流用できないように法制度を整え、汚職や腐敗を防止している。石油収入を運用する「石油基金」は議会と市民社会の厳しい監視下に置かれ、「採取産業透明性イニシアティブ (Extractive Industries Transparency Initiative: EITI)」^(*)からも、アジアでは最善、世界でも第3位のモデルとして評価されている。民衆と国家のためにこの収入を使わねばならないが、戦略的な開発計画の立案が必要である。そこに求められるのは知性と高潔さである。

二つ目は、紛争のトラウマや憎しみにとらわれずに、積極的に「和解」を推進することの重要性である。まず、東ティモールの住民同士でも対立していたことを冷静に見つめ直し、インドネシアによる併合を支持した人々を赦すことにした。次に、今は隣国となったインドネシアによる過去の強制併合や人権侵害に対して敵意をいさぐことなく、和解を推進した。東ティモールの歴史上なされた暴力を知るための「国民真実追究委員会」とインドネシアとの間に二国共同の「真実追究委員会」を設置した。後者は、世界初の紛争当時国同士による国家レベルの委員会である。東ティモールとインドネシアは良好な関係を築き、東ティモール内に在住するインドネシア人が嫌がらせを受けることもない。

多くの困難を経て独立した新興国の意気が伝わってきたところで、話は日本および今後のアジアに及んだ。「二一世紀はアジアの世紀」と言われるが、果たしてそう言えるのか。中国、日本、韓国は豊かでアジアにおける強国ではあるが、安定したパートナーシップを作り上げられないままである。また、経済発展をしても南アジアのように不可触選民が残存していたり、宗教間の対立が起きたりという問題を抱えている国々がある。さらに、アジアは、核兵器の保有国が多く、世界で最も核兵器が問題化している地域となっており、そのような国々は従姉妹兄弟を標的にしている。アジアには深刻な課題が多いことに目を向けるべきだと指摘して話を締めくくった。

講演のあと、学生から質問がいくつも出たが、特に第二次世界大戦中の日本の加害行為について、アジアの国々との和解が必要であることが強調された。東ティモールは日本による占領について賠償を要求しなかった唯一の国であり、また日本の安全保障理事会の常任理事国入りを当初より支持した。しかし、国を代表して謝罪したブランドドイツ第二代首相や、また勇気と知性あふれる演説を行ったヴァイツゼッカー元ドイツ大統領のように、日本にもアジアの人々に頭を下げて、日本の占領下で犠牲になった人々に対して謝罪する指導者が必要であると述べた。

* 「採取産業透明性イニシアティブ (Extractive Industries Transparency Initiative : E I T I)」とは、石油・ガス・鉱物資源等の開発にかかわるいわゆる採取産業から資源産出国政府への資金の流れの透明性を高めることを通じて、腐敗や紛争を予防し、もって成長と貧困削減に繋がる責任ある資源開発を促進するという多国間協力の枠組み。

(文責：小林 寧子)

中国出張報告

宮原 佳昭

出張先：中国

期間：2012年8月14日～8月27日

私はアジア・太平洋研究センターの研究支援を受け、2012年8月14日から27日までの間、中国へ出張した。前半（8月14日～22日）は上海市近郊の農村でフィールドワークに参加し、後半（23日～27日）は広州市へ移動して中山大学図書館を訪れた。以下、前後半に分けて述べたい。

前半は、太田出（広島大学准教授）・佐藤仁史（一橋大学准教授）両氏の主催になる、上海近郊の農村におけるフィールドワークに同行したもので、前回（2011年12月）に引き続き、計4回目の参加となる。前回までの調査が、すでに太田・佐藤両氏が長年実施してきた聞き取り調査の内容を補充するものであったのに対し、今回はテーマや地点を新たに設定し、一から開始するものである。今回のテーマは、中華人民共和国建国後における国家と農村のあり方を、風土病と医療という切り口から探ることである。

今回、インフォーマントを探すにあたっては、フィールドに選定した農村に直接赴き、現地の人々にたずねながら芋づる式に見つけていく方法をとった。一行が探したインフォーマントは、1950年代から1970年代に村の幹部（党支部書記・生産大隊長）や医者（いわゆる「裸足の医者」）を務めた人物である。聞き取りを行った人数は9人、回数はこのべ13回にわたった。いずれも初回の聞き取りであるため、インフォーマントの姓名・生年月日・出身など、基本的な経歴に関する確認が中心であった。8月18日までは太田・佐藤両氏がメインの聞き役となったが、19日以降は私自身もメインとして、太田・佐藤両氏のサポートを得ながら聞き取りを実施した。インフォーマントの多くは健康で記憶力が比較的高く、話の内容も豊富であった（ただ、上記のとおり彼らの個人情報に関するものであるため、ここでは紹介を避けたい）。2013年以降も文献史料の収集・分析とともに、聞き取りを継続して実施する予定である。



上海近郊の農村

後半は、広州市に移動した。主な目的は、中山大学図書館の中国近代史関係史料の所蔵状況を調査するとともに、次回以降の利用に備え、利用方法を確認することである。広州滞在期間中は宮内肇（大阪大学学振PD）氏の協力を得て同館に訪問し、館員の案内により同館の史料所蔵状況の概要を確認することができた。利用方法についてはパスポートのみで入館・閲覧が可能で、申込書に記入すればデジカメによる写真撮影も自由と、非常に開放的なのが印象的であった。古籍部については管理がより厳重であり、事前申請が必要であるが、これは史料の盗難が近年相次いでいることも影響しているという。このように、広州滞在期間中に上記の目的を達成したほか、報告者と同様の研究分野に取り組んでいる中山大学PDの朱貞氏ら中国の若手研究者と面会し、学術上の交流を深めることができた。



中山大学図書館

宗教行政の諸相

（インドネシア出張報告）

小林 寧子

出張先：インドネシア

期間：2012年9月3日～9月14日

2012年9月3日から14日までジャカルタに出張したが、うち4日から10日まで、演習Ⅳ（学部4年次生）の「ゼミ旅行」で学生課からの学生引率予算によるものである。今回の出張では、公的イスラーム機関、およびそれと関連する民間団体を訪問した。学生とともに訪問した諸機関は筆者の研究にも関連がある。日程的には予算の出所は異なるが、報告に重複するところがあるのをお許し願いたい。

憲法に「宗教の自由」を謳うインドネシアでは、国家は国民の日常的宗教実践のための便宜を図る責任があるため、そのための国家機関が整備されている。同時に、国は民間の諸機関との連携、あるいは適度の距離を置いて意見を交換することが必要とされている。今回はふたつのテーマに絞って、その諸機関のコミュニケーションのあり方を追った。それぞれのテーマで訪問、およびインタビューを行ったのは下記の通りである。

1) 宗教行政：巡礼運営事業

公的機関：宗教省巡礼局（巡礼事業を統括・運営）

アスラマ・ハジ（宗教省下部機関、巡礼参加者の集合地）

民間機関：シャリーア銀行（巡礼費用の積立を委託されている）

旅行社（「特別巡礼」を請け負う業者）

* 「特別巡礼」は、宗教省の直接運営ではなく、民間の旅行業者に委託されるもので、通常の巡礼より割高の費用を必要とする。

2) 「制定法とイスラーム法」：ポルノ規制法、婚外子問題など

公的機関：国家女性人権委員会、児童保護委員会

半官半民機関：ウラマー評議会（Majelis Ulama Indonesia）

その他、宗教副大臣室（じゃかるた新聞社記者に同行）、中央統計局、国立図書館、ナフダトゥル・ウラマー（社会宗教団体）図書室等を訪問した。

1) については、宗教省の直面する大きな問題が浮上した。1998年の民主化以降、宗教省は最大の部局であった「宗教裁判局」が最高裁判所に移管され、巡礼局は現在

最も重要な部局となった。しかし、毎年のようにその運営に関する巡礼者からの不満は大きく、しかも巡礼事業にまつわる汚職疑惑も後を絶たない。さらに民間の旅行業者が参入を強く要請するようになっていた。今後もこの圧力は強まることが予想され、宗教省はその存在意義を問われかねなくなっている。

2) は、この種の問題で、イスラーム言説を強くリードするウラマー評議会と、それに対抗する国家委員会という構図が見えてきた。1975年に設立されたウラマー評議会は民間の社会宗教団体の代表（と言っても、その団体自身によって選出されたメンバーではない）から構成されている。スハルト政権下では政府の開発政策を正当化する宗教見解を出していたが、民主化以降はイスラーム法が関わる問題では政府に強力に働きかけを行うことで、その存在意義をアピールしている。一方、ふたつの国家委員会は、いずれも民主化以降に設立されたもので、その構成員はNGO活動の経験者が多く、市民権や人権の確立を目指して活動しており、保守的なイスラーム法解釈の論陣を張るウラマー評議会とはしばしば対立している。両者のせめぎ合いは続きそうである。

インドネシアの宗教行政には、宗教省、司法機関、国家委員会、半官半民団体、NGO、私企業等、多様なアクターが関与して、そのあり方を模索、改善する作業が続けられている。多くの問題を抱えるものの、上意下達や一方通行ではない議論のあり方には、民主化の進展が強く感じられた。



ジャカルタの巡礼団宿泊施設の巡礼研修施設
(カーバ聖殿を模してある)

現地人材育成の進展とアジア子会社の展開可能性 (シンガポール・マレーシア出張報告)

林 尚志

出張先：シンガポール，マレーシア

期 間：2013年3月10日～3月17日

今回の出張では、当センター客員研究員・岡本義輝氏の全面的な協力を得て、日系電機メーカー9社の現地子会社（シンガポール2社，マレーシア7社）を訪問して現地聞き取り調査を行い、各1～2時間程度、「現地人材育成の進展とアジア子会社の展開可能性」というテーマに関し、いずれも大変貴重なお話を伺うことができた。

以下では、「1. 従来の研究」において、今回調査の背景となった筆者によるこれまでの研究内容の概略を述べた後、「2. 今回調査の概要」において、今回調査のねらいと2つの作業仮説、さらに主な回答結果について簡潔に述べる。そして、「3. 今後の研究に向けて」において、今回調査の結果をふまえた今後の研究課題について紹介する。

1. 従来の研究：アジア子会社の“ミスマッチ問題”と“□型&○型”の段階的融合

筆者はこれまで、日本企業のアジア子会社に対して3回の聞き取り調査を重ねながら、多くのアジア子会社が現地人材を育成するにあたり、日本企業と現地人材との間に存在する「ミスマッチの問題」（職務に対する“意識”や“考え方”に関するギャップ）に苦労を重ねてきた点を確認してきた。

たとえば、日本企業の場合は、企業内の長期定着性を前提とし、各労働者の間に“グレーゾーン”（職務内容や分担があいまいな領域）についても、「周囲の状況を理解しながら柔軟に対応しよう」とする意識が相対的に強いのに対し、労働者の流動可能性が高いアジア各国では、各労働者の間に「事前かつ明示的に割り当てられた職務に対してしっかり責任を果たそう」とする意識が相対的に強いという。このため、生産現場における日常の業務でグレーゾーンに関わるトラブルが発生した場合には、お互いに「これは、私の責任ではないですよ」という姿勢が先に立ち、各メンバーの間に、「知識や情報を共有し、互いにアイデアを出しながら課題解決に向けて協力し

よう」とする意識や能力が育ちにくいといった問題点が指摘されてきたのである。¹

それでは、アジア子会社では、どのような形で「ミスマッチ問題」が生じ、また、この問題の解決に向けて、従来どのような取り組みが進められてきたのであろうか。

筆者は、この問題をとらえるにあたり、「○型モデル」（グレーゾーンが相対的に大きく、日本人の“グレーゾーン対応意識”や“知識共有意識”と補完的）と「□型モデル」（グレーゾーンが相対的に小さく、現地労働者の“明確責任分担意識”や“知識専有意識”と補完的）という概念を提示するとともに、各々に対応する諸特徴を、職務のあり方、技能や知識のあり方、調整や連携のあり方等の各側面から確認しつつ、生産現場を中心にミスマッチが生じる具体的な状況をとらえることを試みた。

さらに、各アジア子会社が問題の解決に向けて進めてきた種々の取り組みを、以下の「□型&○型」の段階的融合」という概念を用いて理解するとともに、職務のあり方、調整や連携のあり方、人材管理のあり方等の多様な側面から、これらに関する具体的な取り組みについて例証を重ねてきた。

- (i) 短期的な“□型の対応”：現地人材の“□型意識”（“明確責任分担意識”や“知識専有意識”）を前提に、「職務上の“グレーゾーン”を減らす」、「タテ方向のコントロールを重視する」など、“□型モデル”の諸特徴を導入する。
- (ii) 長期的な“□型&○型”の融合：現地人材の“○型対応能力”（“グレーゾーン対応意識&能力”や“知識共有意識&能力”）を育成するとともに、「責任範囲は明確に&担当能力は柔軟に」、「ヨコ方向の連携&タテ方向のコントロール」などの形で、“□型&○型”両モデルの特徴を融合する取り組みを進める。

2. 今回調査の概要：“融合型の経験”とアジア子会社側の主体性の高まり

このように、筆者はこれまで、主に現地人材の育成というテーマに注目し、日本企業のアジア子会社が現地での“ミスマッチ問題”の解決に向けて「□型&○型」の段階的融合」とも言うべき“一連の取り組み”を進めてきた状況について例証を重ねてきた。ところで、アジアをはじめとする海外市場への進出や台頭著しいアジア新興国企業との関わり方が重要性を増している今日、日本企業は、「異なる環境への適応」を図りつつ、“従来の日本企業の強み”を活かす」という意味で“融合型の経験”として理解される上記のアジア子会社での取り組みを、今後のアジアや海外での事業展開にどのように活かそうとしているのであろうか。

¹ 筆者がこれまでに行った3回の聞き取り調査（1998年、2002年、および2007年）の概略については、林（1999、付論）、林（2004、付論1）、および林（2008）を参照のこと。また、以下で紹介されるこれら調査に関する筆者による分析結果については、林（1999、2005、2008、2012）、および Hayashi（2011）等を参照のこと。

このような問題意識を念頭に、筆者は、今回調査の実施にあたって、「“□型&○型”の段階的融合」の進展が、「(1)アジア子会社自身」、および「(2)日本本社とアジア子会社間の関係」の各々にもたらしつつあると考えられる状況に関し、アジア子会社における現地人材の育成や日本企業のアジアや海外での事業展開に関する諸研究、さらには筆者自身の前回までの聞き取り調査の結果等をふまえつつ、以下の作業仮説を考えてみた。²

[仮説1] アジア子会社：自らが担うべき活動領域の拡大？

「“□型&○型”の段階的融合」の進展とともに、アジア子会社において各種の“グリーゾーン対応能力”（例：部門内のメンバー間連携能力、部門を超えた連携能力 etc.）が高まりつつあることが予想され、これに伴って、「アジア子会社が担うべき活動領域」も、より高い課題対応能力が求められる高度な内容へと拡がりをみせつつあるのではないかと考えられる。

- * すなわち、生産面では、たとえば従来の「普及型製品や海外市場向けの製品等を担当する“量産型の生産拠点”」から「最先端の製品や日本市場向けの製品等を担当する“戦略的な生産拠点”」へとといった形で、その役わりが拡がりつつあるのではないかと考えられる。
- * また設計・開発面では、たとえば従来の「日本本社で開発されたモデルの地域別仕様に関わる“修正設計を行う拠点”」から「構想設計や意匠デザインを含むモデル開発の全般を担当する“本格的な設計・開発拠点”」へとといった形で、その役わりが拡がりつつあるのではないかと考えられる。

[仮説2] 日本本社－アジア子会社の関係：両者の連携強化と子会社側の主体性向上？

アジア子会社における「“□型&○型”の段階的融合」の進展や“グリーゾーン対応能力”の向上は、従来から高度な“グリーゾーン対応能力”を備えていたと想定される日本本社との間で“より双方向的な連携の強化”をもたらしつつあるのではないかと考えられる。

- * すなわち、両者が相通する“グリーゾーン対応能力”を共有することで互いの技術・情報・ノウハウ等を伝え理解し合う能力が高まり、従来よりも迅速かつ柔軟に、両者が協力して諸課題を解決しつつ、より幅広い局面で連携して業務を進めることが可能となりつつあるのではないかと考えられる。

² 日本企業のアジア子会社を含む海外子会社における現地人材の育成については、石田（1994）、吉原（1996）、茂垣（2001）、白木（2011）等を参照のこと。また、日本企業のアジアや海外での事業展開のあり方については、石田（1994）、天野（2005）、新宅・天野（2009）等を参照のこと。

- * さらに、上記(1)のようにアジア子会社の活動領域が拡がり、彼らの技術・情報・ノウハウ等の蓄積が進む中、生産や設計・開発等における両者の連携にあたり、アジア子会社側の主体性が高まりつつあるのではないか。
- * そして、日本本社－アジア子会社間の技術・情報・ノウハウ等の流れに注目した場合、従来の「本社→子会社」という“一方的な流れ”が「本社↔子会社」という“双方向的な流れ”へと徐々に変化し、その結果、両者の関係も「本社が教え、子会社が学ぶ」という“一方的な関係”から、「本社と子会社がともに学び合う」という“双方向的な関係”へと変化しつつあるのではないか。

今回の調査では、上記の問題意識、および“仮説1 & 仮説2”を念頭に、冒頭で述べた日系電機メーカー9社を訪問し、これら2つの仮説に関わる点を中心に、各社で1～2時間程度のお話を伺った。

その結果、筆者による過去3回の調査、および上記の“仮説1 & 仮説2”と概ね整合的な内容を確認することができた。すなわち、(ア)各事例の間で具体的な進展状況はかなり異なるものの、いずれの事例においても、近年、「□型&○型”の段階的融合」とも言うべき取り組みが進められており、現地人材の“グレーゾーン対応能力”が次第に高まる中で、アジア子会社が担当する活動領域が拡大しつつある点、(イ)アジア子会社において技術や技能・情報・各種ノウハウ等の蓄積が進む中で、生産や設計・開発における日本本社との連携にあたり、アジア子会社側の主体性が高まりつつある点などが確認されたのである。

3. 今後の研究に向けて：より機動的・積極的なアジアへの“融合型の展開”へ？

このように、今回調査において上記の“仮説1 & 仮説2”と概ね整合的な結果が得られたことをふまえ、今後の研究にあたっては、たとえば以下の2つの点についても考察を試みながら、各事例の回答内容についてより詳細に検討を進めていきたい。そして、これらの考察を通じ、日本、ならびに日本企業の進出を受け入れてきたアジア諸国、そしてアジアをはじめとした各国に事業を展開しつつある日本企業の各々に関し、有用な含意をさぐりたいと考えている。

すなわち、今後考察を進めたい第1の点は、「“仮説1 & 仮説2”と概ね整合的であった」という今回調査の各事例間の“共通性”のみならず、各事例間に“違い”をもたらした諸要因についても検討を深めたいという点である。たとえば、「なぜ事例Aでは、“段階的融合の進展度”が相対的に遅かったのか」、「なぜ事例Bでは、“段階的融合の進展度”が相対的に早かったにも関わらず、アジア子会社側の“担当活動領域”や“主体性”は相対的に低かったのか」といった疑問をさぐりつつ、上記の“仮説1 & 仮説2”のみでは捉えきれなかった諸要因を確認するとともに、これらの諸要

因が「段階的融合の進展→子会社の担当領域拡大&主体性の向上」という仮説の因果関係にどのように関わっているのかについても考察を行いたい。

また、将来的に考察を試みたい第2の点は、上記の“仮説1 & 仮説2”では、主にアジア子会社側に焦点を当て、“段階的融合の進展”が「アジア子会社を中心とした事業展開」にもたらす影響について注目したのに対し、今後は、アジア子会社での「“□型&○型”の段階的融合」を“一つの起点”として、「本社を中心とする“当該日本企業全体”のアジアおよび海外事業展開」にもたらす影響についても考察を広げたいという点である。

すなわち、近年、ITの発展に伴う急速な技術変化やアジア系企業の台頭などに直面する中で、日本企業は「“新たな環境への適応”を図りつつ、“従来の日本企業の強み”を活かす」という意味での“融合型の取り組み”を模索しつつある。³ 一方で、上記の“仮説2”と関連して、今回調査のいくつかの事例で指摘されたように、アジア子会社での「“□型&○型”の段階的融合」が1つの起点となって、日本本社-アジア子会社間で“ともに学び合う関係”が育ちつつあるとすれば、今後日本企業が「“新たな環境への適応”を図りつつ、“従来の日本企業の強み”を活かす取り組み”を進める際に、少なくとも以下の2つの点で有効であると考えられる。

第1は、「“□型&○型”の段階的融合」の進展によって「アジア子会社側の“学ぶ力”」が高まるという可能性である。そして、もしこの力を高められた場合には、「アジア子会社が、日本本社側で生まれた技術や各種ノウハウを、より迅速・的確に理解・吸収した上で、自らの事業展開に活かす」ことが可能となり、日本企業にとって「アジア&海外で、“従来の強み”をより機動的・積極的に展開できる」という効果が期待できるであろう。

第2は、「“□型&○型”の段階的融合」の進展によって「日本本社側の“学ぶ力”」が高まるという可能性である。そして、もしこの力を高められた場合には、「日本本社側が、アジア子会社が、現地の市場や現地系企業、そして現地の人々から学んだ知識や情報、各種ノウハウを、より迅速・的確に理解・共有した上で、海外子会社のネットワークも含めた“当該企業全体”の事業展開に活かす」ことが可能となり、日本企業にとって、「より機動的・積極的に“新たな環境への適応”を図り、アジア&海外に展開する」という効果が期待できるであろう。

そして、日本企業が、これら2つの効果を十分に実現することができるならば、『アジア子会社を起点とした「“□型&○型”の段階的融合」の進展が、当該企業に

³ 近年、日本企業が「“新たな環境への適応”を図りつつ、“従来の日本企業の強み”を活かす」という意味での“融合型の取り組み”を模索しつつある点については、たとえば伊藤(2002)、藤本(2004)、新宅・天野(2009)等を参照のこと。

「より機動的・積極的なアジアへの“融合型の展開”をもたらす」という可能性も示唆できると考えられるのである。

参考文献

- 天野倫文 2005. 『東アジアの国際分業と日本企業：新たな企業成長への展望』 有斐閣.
- 藤本隆宏 2004. 『日本のもの造り哲学』 日本経済新聞社.
- 林尚志 1999. 「日本型人材育成システムの有効性と課題：日系メーカーシンガポール・マレーシア子会社における事例研究」『南山経済研究』14 (1・2)：345-375.
- 林尚志 2004. 「日系メーカーアジア子会社における人材育成：“○型&□型”の融合に向けた取り組みをめぐって」『南山経済研究』19 (1)：1-34.
- 林尚志 2005. 「“○型 vs. □型”モデルの再考：日系メーカーアジア子会社における取り組みから」『国際ビジネス研究学会年報2005年』11：29-44.
- 林尚志 2008. 「アジア子会社における現地人材の取り組みをさぐる：日系企業等への現地聞き取り調査から」『南山大学アジア・太平洋研究センター報』3：1-13.
- Hayashi, Takashi. 2011. “Skill Development by Asian Affiliates of Japanese MNEs : Misalliance Problem and Hybrid of ○ & □ Model,” *Proceedings of the Third Annual Conference of the Academic Network for Development in Asia (ANDA)*, March 5-7, 2011, Nagoya University, Nagoya: 393-418.
- 林尚志 2012. 「“早すぎる登用”と“実力に応じた登用”：日系企業中国子会社における事例研究」『南山経済研究』27 (1)：57-89.
- 石田英夫（編）1994. 『国際人事』中央経済社.
- 伊藤秀史（編）2002. 『日本企業 変革期の選択』東洋経済新報社.
- 茂垣広志 2001. 「国際人事管理」『国際経営を学ぶ人のために』（根本孝・茂垣広志・池田芳彦編）世界思想社.
- 新宅純二郎・天野倫文（編）2009. 『ものづくりの国際経営戦略 アジアの産業地理学』有斐閣.
- 白木三秀 2011. 「人材グローバル化の諸課題 日本在外企業協会調査からの考察」『月刊グローバル経営』2011年5月号：4-9.
- 吉原英樹 1996. 『未熟な国際経営』白桃書房.